

第4章 報告Ⅱ

1. 九州・琉球列島における14世紀前後の中国陶磁と福建産白磁
2. 東南アジアにおける14世紀前後の福建産陶磁
3. 略論古代福州港与中琉航海交通
4. ふたつの「琉球」
5. 明初里甲制体制の歴史的特質

13～14世紀の九州・琉球列島・中国・東南アジアの歴史状況を、考古学と文献史学の二つの方法で追究する。

九州・琉球列島における14世紀前後の中国陶磁と福建産白磁

新里亮人
伊仙町教育委員会

SHINZATO Akito
Board of Education ISEN Town

はじめに

今帰仁タイプ白磁碗、ピロースクタイプ白磁碗とは、沖縄本島の今帰仁城跡、石垣島のピロースク遺跡から検出された特徴的な白磁碗を標識とする（金武2007、田中・森本2004）。これらは琉球列島各地での検出状況から14世紀前後に位置付けられており、中国の福建省で生産されていたと推定されている（田中・森本2004）。また、日本国内においては、主として琉球列島で消費され、分布の特異性がたびたび指摘されている（金武1988、2007）。

両白磁碗の消費動向とその特色をより詳しく検討するには、琉球列島近隣における中国陶磁器の消費状況と比較検討することが有効と考えられる。そのため、本稿では九州・琉球列島における中国陶磁器出土遺跡の集成を行ない、それらの消費状況を時期別に把握することを第一の目的とした。この作業を通して九州以南の地域における中国陶磁器の消費状況の推移を整理し、今帰仁タイプ白磁碗、ピロースクタイプ白磁碗の特異な消費状況とその意義について検討していくこととする。

1. 琉球列島出土中国陶磁器の特徴

最初に琉球列島における陶磁器研究について略述し、検討課題を抽出しておきたい。

琉球列島の集落遺跡や城塞的遺跡（奄美諸島の山城、沖縄諸島のグスク・先島諸島のスクをそれぞれ指す）からは多くの貿易陶磁器（中国産・朝鮮半島産・東南アジア産）が出土する。このことは戦前より認識されており、琉球列島における陶磁器研究は比較的早くから行なわれていた。それは、中継貿易によって繁栄していた琉球王国の歴史的経緯に基づいて、これを物質資料から検証しようとする試みが早くから進められていたことによる。鎌倉芳太郎らが沖縄各地の遺跡から陶磁器を数多く採集していたことはその典型例である（鎌倉1976）。戦後に至っても、多和田眞淳は各地の遺跡を踏査し、グスクや集落から多数の陶磁器を採集している（多和田1956）。

沖縄県内では本土復帰以前から、城跡の発掘調査によって多くの中国陶磁器が得られており、資料の蓄積が進んでいた。こうした資料に注目し、琉球列島出土の中国陶磁器を総合的に検討したのは亀井明德であった。亀井は日本列島における陶磁器貿易を通史的にまとめる中で、琉球列島のグスク及び集落から採集された中国陶磁器を詳細に検討し、貿易状況の推移について述べている（亀井1983）。その中で、「沖縄における中国貿易陶磁器の需要は、一部、12世紀中葉から開始されたが、13世紀に入ると、かなり広範囲に拡がり、初期のグスク及びそれに関連する集落に及んで」おり、「最初の段階では、宋商船が有力按司勢力地のいくつかに来航し、交易を行っていたがやがて彼ら按司の中から、宋商人に替って、交易船を福建に遣し、自ら貿易商人的能力を持つ按司集団として成長する」（亀井1983、378頁、379頁）として琉球列島と中国との直接的な関係を想定した。

その後亀井は、薩南諸島から奄美諸島における貿易陶磁器を集成する中で、「14世紀中葉以前、厳密には後述するように13世紀代以前には、（薩摩以上に）膨大な量の陶磁器を検出できる遺跡は上述したように沖縄諸島に確認できない」ことから、この頃までの琉球列島における中国陶磁器は九州本土から薩摩を経由する交易船の往来によってもたらされたと述べている（亀井1993、30頁、括弧内筆

者)。亀井は従来の説に修正を加えながら琉球列島における14世紀以前の中国陶磁器需要の背景に九州との関連を重視したが、「14世紀前半代には沖縄各地の有力領主の中に中国との交易により、陶磁器を入手している蓋然性はある」として、朝貢貿易の以前の私貿易の存在を想定している。

一方、琉球列島側からの陶磁器研究は、本土における分類との比較検討および在地の食器類（沖縄貝塚時代後期におけるくびれ平底土器、グスク時代の石鍋模倣土器、徳之島産カムイヤキなど）との共伴関係による年代的位置付けを中心に進められてきた。こうした検討は金武正紀によって主導されており、本土の研究を参照しながら、琉球列島出土陶磁器の年代的な位置付けと陶磁器流通の画期について述べている（金武1983、1989、1990、1998a、b、図1）。また1998年には、これらを総括するかたちで沖縄における貿易陶磁器の動向をまとめ、グスク時代への胎動（Ⅰ期：11世紀末～12世紀前半）、グスク時代前夜（Ⅱ期：12世紀後半～13世紀）、グスク時代（Ⅲ期：14世紀～16世紀）の3期に区分した（金武1998c）。これらのうち、11世紀後半から13世紀代に位置付けられている琉球列島出土の中国陶磁器は、大宰府における陶磁器分類（横田・森田1978、宮崎編2000）に収まることが確認されている（琉球大学考古学研究室2003）。

個別資料の観察によってそれらの特徴が明確になると、奄美諸島・沖縄諸島・先島諸島からは日本列島では稀な陶磁器が出土することが次第に明らかになってきた。金武が調査を行なった石垣島ビロースク遺跡では、厚手で内湾する器形の白磁碗がまとめて検出され、その特異性からビロースクタイプ白磁碗（金武1983）、今帰仁城跡で多く発見された薄手の浅碗は今帰仁タイプ白磁碗と命名された（金武2007）。これらの白磁碗は13世紀末から14世紀代に位置付けられ、中国福建省の閩江流域に窯元がある可能性が想定されている（田中・森本2004、本報告第3章）。

こうした研究によって琉球列島における中国陶磁器の様相が通史的に理解されるようになり、日本列島と琉球列島出土の中国陶磁器の共通点と相違点が次第に明らかとなってきた。特に、今帰仁タイプ白磁碗、ビロースクタイプ白磁碗に代表されるような琉球列島で集中的に検出される資料群の存在は、当地域における特異性を明確に示す資料として注目されるものである。近年は、琉球列島出土の中国陶磁器を網羅した分類と編年案が提示され、独特の陶磁器組成とその変遷を追及しようとする研究が積極的に進められている（瀬戸他2007）。

こうして、朝貢貿易に至るまでの交易状況の祖筋が組み立てられる中で、今帰仁タイプ白磁碗とビロースクタイプ白磁碗の存在が確認されたことにより、日本列島出土の中国陶磁器との共通点と相違点が明らかにされてきている。

以上が琉球列島の陶磁器研究の到達点であるが、これらから抽出できる検討課題は次の点にある。

まず、琉球列島における13世紀代以前の中国陶磁器は大宰府分類が適用可能であることは（琉球大学考古学研究室2003）、この時期までの琉球列島出土中国陶磁器は九州で検出される資料と大差無いことを示しており、それらが九州地方との関連で入手されていたことが推察される。このことは亀井・金武ともに指摘しているとおりである。

しかしその一方で、14世紀前後に位置付けられる今帰仁タイプ白磁碗、ビロースクタイプ白磁碗は大宰府の分類ではまとめることができず、独自の分類案が用いられている。このことから、大宰府分類適用外の資料は九州とは異なる経済事情の中で持ち込まれたとの推測が可能である。池田榮史も13世紀後半ごろから中国からの貿易陶磁器の流入が始まると想定しており、その現象を示すものとして福建産粗製白磁を挙げている（池田2006）。この時代は亀井が指摘した按司による私貿易の時代と重なり、これら特別な白磁碗の歴史的な位置付けは朝貢貿易以前における琉球列島の経済状況を復元するに当たり重要な検討課題となりうる。

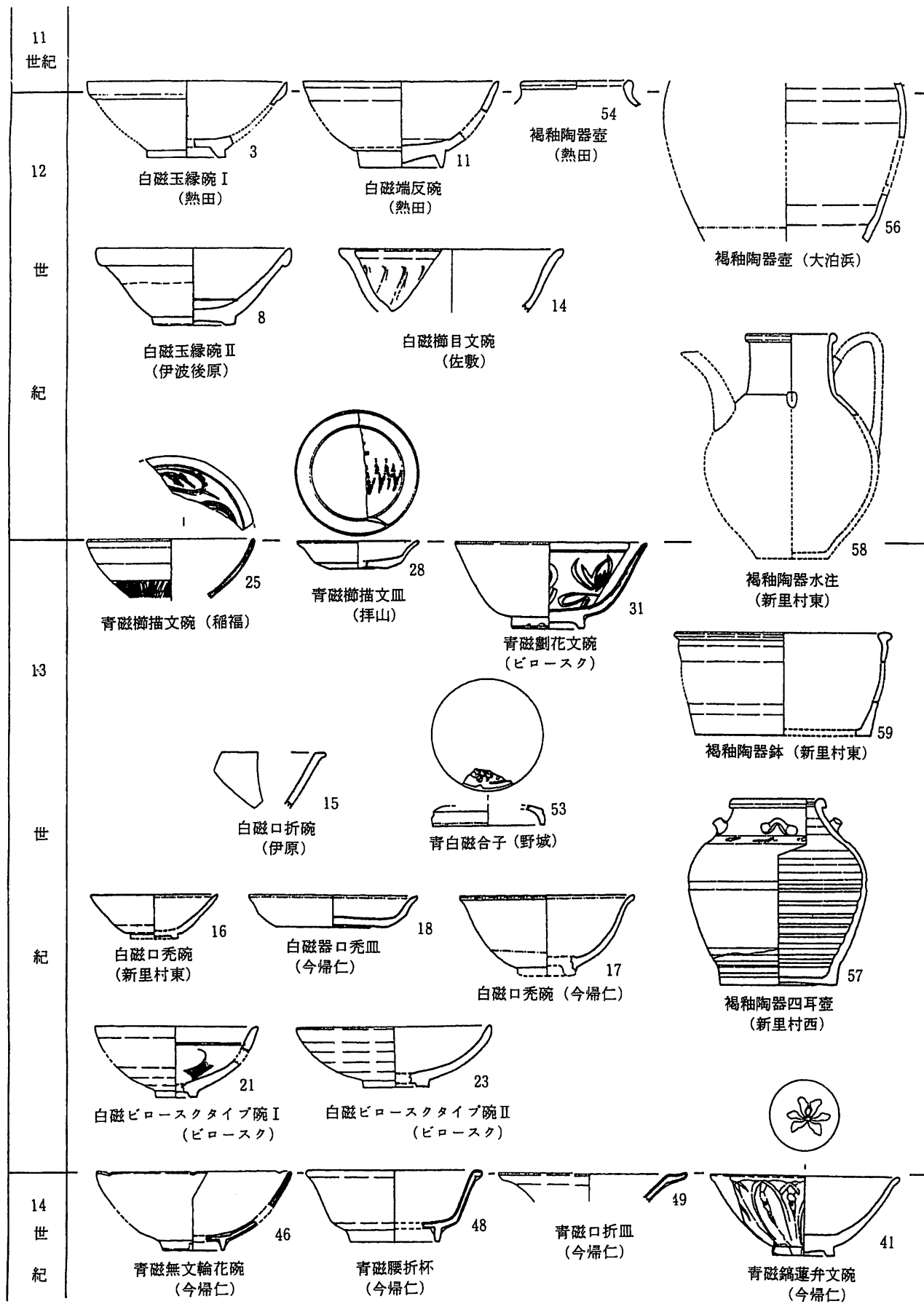


図1 沖縄県出土中国陶磁器の編年図 (金武1989より転載)

こうした研究動向を鑑みると、九州と琉球列島における中国陶磁器需要状況の推移を検討し、需要状況の異同を明らかにすることによって、陶磁器の流通過程を推測することは重要な検討課題であると考えられる。

以上の点に着目しながら次節では九州・琉球列島における中国陶磁器出土遺跡の集成から、当該地域の今帰仁タイプ白磁碗、ビロースクタイプ白磁碗の消費状況を検討していく。そして、両地域における中国陶磁器の消費状況の時期的推移から当時の流通様相を推定し、琉球列島における14世紀前後の福建産白磁の意味について考えていきたい。

2. 九州、琉球列島における中国陶磁器出土遺跡の集成

九州・琉球列島における中国陶磁器の消費状況を検討するため、また、九州地方において今帰仁タイプ白磁碗、ビロースクタイプ白磁碗がどの程度出土しているかを確認する目的で九州・琉球列島における中国陶磁器出土遺跡の集成を行なった。

資料収集の期間は2004年3月から2006年5月で、熊本大学文学部考古学研究室の図書室に所蔵されている発掘調査報告書より一覧表を作成した。なお、集成した遺跡の一覧表は5. 資料編2九州・琉球列島の中国陶磁器出土遺跡一覧に掲載している。

作成にあたっては、以下の点に留意した。

第一に、大宰府における陶磁器分類と時期区分（横田・森田1983、宮崎編2000）と対応する白磁、青磁、陶器を一覧表に反映する。大宰府における時期区分は、C期（11世紀後半～12世紀前半）、D期（12世紀中頃～12世紀後半）、E期（13世紀初頭～13世紀前半）、F期（13世紀中頃～14世紀初頭）、G期（14世紀初頭～15世紀前半）と設定されている。

第二に、各遺跡出土の中国陶磁器は、検出遺構（土坑、井戸、墓、溝など）、包含層ごとにその内容（種別、器種）を記録する。

第三に、今帰仁タイプ白磁碗、ビロースクタイプ白磁碗Ⅰ類、Ⅱ類など大宰府の分類に該当しないものは備考欄に記した。九州地方において、今帰仁タイプ白磁碗、ビロースクタイプ白磁碗がどの程度検出されているかを確認するためである。作成した一覧表に、宮城弘樹作成の琉球列島における福建産粗製白磁碗のデータを加え（第3章）、九州、琉球列島における11世紀後半代から14世紀前半代の中国陶磁器出土遺跡数を集計すると、福岡県523箇所、佐賀県122箇所、長崎県34箇所、熊本県50箇所、大分県46箇所、宮崎県35箇所、鹿児島55箇所、琉球列島159箇所となる。

ただし、中世屈指の港湾都市である博多遺跡群と官都である大宰府史跡は遺跡の性格上大量の中国陶磁器が検出される場所であり、今回作成した一覧表では十分な情報を反映できない。さらに、中国陶磁器の消費様相を一般的な遺跡と単純に比較することは有意義ではないと考えられるため、現段階のところ遺跡名と文献の記載にとどめて、今回の集計からは除外することにした。これらのデータは、改めて作成すべきであろう。

集成の結果、九州地方において今帰仁タイプ白磁碗、ビロースクタイプ白磁碗Ⅰ類、Ⅱ類は福岡県の博多遺跡群を除いてはほとんど確認できなかった（第3章）。これらは琉球列島を中心に分布している中国陶磁器であることは間違いなさであろう。

3. 九州、琉球列島における中国陶磁器消費状況の推移

作成した一覧表から各時期の中国陶磁器出土遺跡数を算出し、九州・琉球列島全域における中国陶磁器の消費状況を大宰府の時期区分に沿って把握していきたい（図2～4）。

まずは全体的な傾向を見てみよう。作成した一覧表から各時期の遺跡数を算出し、これらの年代的な推移を第2図に示した。C期（11世紀後半～12世紀前半）では総遺跡数が470箇所あり、中国陶磁器が大量に消費され始める時期である。まさに「白磁の洪水」と称されるにふさわしい出土状況を呈している。その後、D期（12世紀中頃～12世紀後半）の遺跡数は547箇所消費がピークを迎え、E期（13世紀初頭～13世紀前半）まで遺跡数515箇所と安定的な状況が維持される。F期（13世紀中頃から14世紀初頭）に至ると出土遺跡数は251箇所と遺跡数が突如半減して、G期（14世紀初頭から15世紀前半）の186箇所で最小となる（図1）。この傾向は1997年の土橋理子による統計とほぼ同様の結果が得られた（土橋1997、73頁表2、福岡～沖縄を参照）。

それでは各地における消費状況を地域別に見てみたい。地域別の出土遺跡数の時期的推移を検討するにあたり、福岡県を北部九州、佐賀、長崎県を西北九州、熊本県を中九州、大分、宮崎県を東九州、鹿児島県を南九州、薩南諸島から先島諸島を琉球列島と区分した。この地域区分に沿って中国陶磁器出土遺跡数を数量化し、地域別の出土遺跡数の移り変わりを折れ線で表現してみた（図3）。

これによると九州各地ともに共通することは、D期ないしE期にピークを迎え、F期以降下降線を辿ることである。このことは、中国陶磁器出土遺跡数を地域別に見ても、九州の全体傾向と大差は無く、C期以降安定的に消費されていた陶磁器がF期以降減少していく傾向が読み取れる。この傾向は、北部九州において特に顕著であるが、他の地域も似たような傾きの折れ線を描くため、九州各地における中国陶磁器出土遺跡数の減少は北部九州における中国陶磁器消費量の減少と対応していると見てよいであろう。当該期の中国陶磁器の需要は博多、大宰府を要する北部九州の動向が重要であることを示している。

ところが、これと異なった様相を見せるのが琉球列島である。F期以降九州各地の中国陶磁器出土遺跡が減少する一方で、琉球列島ではF期まではその数を維持しながら、G期にピークを迎える。このことは、F期以降から琉球列島が九州における中国陶磁器の消費動向から外れ始める時期と推察される。

便宜的に大宰府編年のC期（11世紀後半代から12世紀前半代）を第1期、D、E期（12世紀中頃から13世紀前半）を第2期、F、G期（13世紀中頃から15世紀前半）を第3期としてその推移を見てみたい（図4）。これによると、九州各地の中国陶磁器出土遺跡数は第2期でピークとなって、第3期で減少するのでグラフは山形の折れ線を描く。これに対し、琉球列島では段階を追うごとに増加傾向を示し第3期でピークとなる。第3期は、琉球列島が九州における中国陶磁器の消費動向から外れるとともに、中国陶磁器出土遺跡数が最多となる時期と捉えてよい。

4. 小結

以上の検討により明らかとなった点は以下のとおりである。

まず、14世紀前後に編年される福建産白磁碗のうち、今帰仁タイプ白磁碗、ピロースクタイプ白磁碗Ⅰ・Ⅱ類は九州地方ではあまり検出されず、琉球列島で多く検出される傾向にある。

次に、九州地方において第1期（11世紀後半代～12世紀前半代）から第2期（12世紀中頃～13世紀前半代）にかけて中国陶磁器出土遺跡数は増加し続けるが、第3期（13世紀中頃～15世紀前半）では極端に減少する。

最後に、琉球列島における中国陶磁器の出土遺跡数は時代ごとに増加し続け、その数を維持しながら、第3期に最多となる。このことは九州地方の中国陶磁器需要状況と大きく異なる点であり、今帰仁タイプ白磁碗、ピロースクタイプ白磁碗Ⅰ・Ⅱ類が琉球列島へと持ち込まれることに起因して、そ

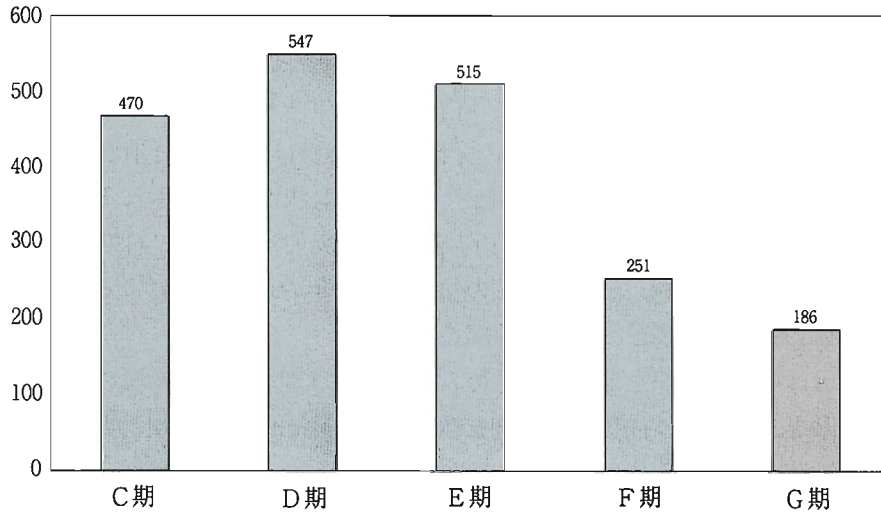


図2 九州・琉球列島における中国陶磁器出土遺跡数の推移

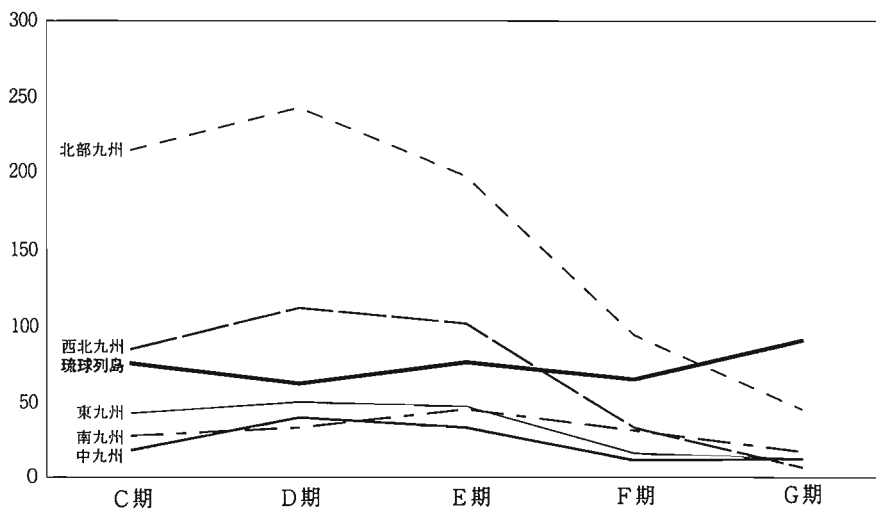


図3 地域別中国陶磁器出土遺跡数の推移

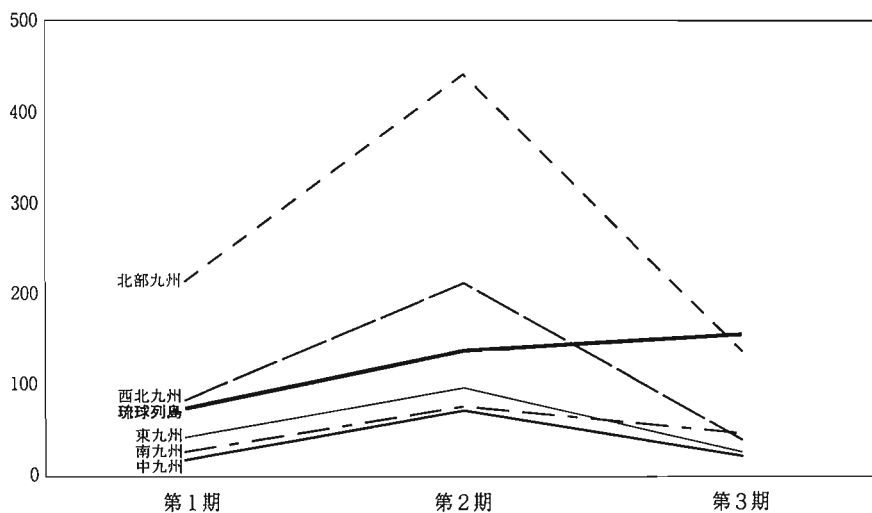


図4 本稿での時期区分に沿った地域別中国陶磁器出土遺跡数の推移

の数が増加したと考えられる。当該期の琉球列島には、九州地方とは異なる経済状況の中で中国陶磁器が持ち込まれた可能性が考慮される。

5. 琉球列島における福建産白磁の意義

それでは、九州・琉球列島における中国陶磁器の需要状況と当時の経済事情を考慮しながら琉球列島における今帰仁タイプ白磁碗、ビロースクタイプ白磁碗の特異な出土状況とその意義について考えてみたい。

まず、中国陶磁器出土遺跡数と出土破片数の推移が陶磁器流通状況の時期的変遷を示していると想定したうえで、琉球列島における中国陶磁器の消費様相と博多を中心とした九州の状況と対比させながら確認したい。

11世紀後半頃、大宰府鴻臚館を拠点とした律令制的管理貿易が終わりを向かえ、「博多綱首」と呼ばれる宋商人が「唐房（唐坊）」と呼ばれる居住区を拠点に貿易を行なういわゆる「住藩貿易」が博多において展開していた（亀井1986）。その証拠として博多では大量の貿易陶磁器が出土するのみならず、貿易港であったことを示すコンテナ用の大型容器、釉着したままの陶磁器、大量一括廃棄遺構などが検出されている（大庭1999）。これと対応するように、九州各地では数多くの中国陶磁器が検出されるようになり、中国陶磁器出土遺跡数もかなり多い。中国陶磁器出土遺跡数の増減は、その流通量のある程度反映しているとみてよいであろう。琉球列島でも、中国陶磁器が一般的に消費されるのはこの時期にあたり、九州地方における中国陶磁器の需要と深く関連していると考えられる。

12世紀中頃から13世紀前半は白磁に変わって青磁が多く消費されるようになり、九州地方における中国陶磁器出土遺跡数はピークを迎える。この現象は全国的に認められており、特に13世紀代には全国各地に地域差無く中国陶磁器が流通していた（土橋1997）。

文献史学の立場からも中国陶磁器を含む12、13世紀の海外貿易の様相について積極的な議論が進められている。榎本渉によると、12世紀後半頃大宰府による管理貿易は終焉を迎え、寺社、権門による海商の組織化が進んだ結果、商品流通が効率化し、博多以外の地域で貿易陶磁器の出土量が増加したという。同時に寺社・権門は国内交易集団も同時に組織して海商との分業と連携を調整し、博多綱首によってもたらされた財貨は、寺社・権門と関わる商人、神人・寄人などを通じて運送・販売されただろうと推定している（榎本2001、2008）。この時期に九州地方だけではなく全国的に中国陶磁器出土遺跡数が増加することは、こうした動向と関連していると考えられるだろう。また西北九州や南九州の沿岸部に港湾的な遺跡が増加することも（徳永1998、宮崎1994、1998、宮下1998など）、こうした背景の中で解釈できるのかもしれない。第2期の琉球列島においても中国陶磁器の出土遺跡数は第1期以上に増加しており（図4）、この頃までの琉球列島の中国陶磁器の需要状況は、九州地方の動向と同様な文脈の中で理解できるものである。なお、奄美大島の宇検村沖で発見されている倉木崎海底遺跡では第2期に位置付けられる中国陶磁器が多く発見されている（田村他1999）。この遺跡は琉球列島近海を通過する貿易船の存在を示す可能性があり、琉球列島から九州に至る日宋貿易のサブルートと評価されている（榎本2008）。琉球列島での中国陶磁器出土遺跡が若干増加するのはこうした事情も加えてよいであろう。

その後、第3期には状況が大きく変化し、九州各地の中国陶磁器出土遺跡数は極端に減少する（図4）。この傾向は博多においても認められ、陶磁器の流入は鎮静化に向かうと言われている（田中・佐藤2008）。ただし、陶磁器の減少は決して博多の衰退を示すものではなく、幕府や有力神社を中心とした日本船を派遣する貿易すなわち需要者主体の貿易へと変化した結果と考えられている（田中・

佐藤2008)。京都や鎌倉における貿易陶磁器出土遺跡数が非常に多くなるのはこれと調和的に捉えられるのかもしれない(土橋1997、73頁表2を参照)。九州地方における中国陶磁器出土遺跡の減少もこれと無関係ではないとみられ、需要者主体の貿易へと変化したことによって認められた現象と考えてよいであろう。

こうした中、琉球列島では今帰仁タイプ白磁碗、ビロースクタイプ白磁碗に代表される福建省産粗製白磁が需要されることにより、中国陶磁器出土遺跡は安定的にその数を伸ばしていく。これらは全国的にも稀有な資料であることから、11世紀後半代から13世紀前半代における九州地方とは異なる経済事情のもと招来されたものと見られる。日本における需要者主体の貿易状況を考慮すると、おそらく琉球列島が交易の対象地から外れ、琉球列島と中国との新たな経済関係が構築されたと考えるのは大げさな想定ではないであろう。琉球列島における両白磁碗の出現は、九州地方における中国陶磁器の流通動向から外れ、中国と関連を強める現象を示すと考えられ、琉球列島における中国陶磁器需要の大きな画期と捉えてよい。今帰仁タイプ白磁碗、ビロースクタイプ白磁碗Ⅰ・Ⅱ類は、琉球列島と中国との経済的な結び付きを表わすという意味で非常に意義深い資料と考えられるのである。

ただし、これらの絶対数は朝貢貿易が開始された14世紀後半代以降の陶磁器(ビロースクタイプⅢ類、瀬戸他2007による竜泉窯系青磁碗Ⅴ類など)と比べて圧倒的に少ないことから(第3章)、消費財として性格を振り払うことはできない。したがって、今帰仁タイプ白磁碗、ビロースクタイプ白磁碗Ⅰ・Ⅱ類が財貨として蓄えられた後、各地へと搬出された状況は想定し難く、これらは琉球列島の人々が生活用品として積極的に受容した雑器であると考えておきたい。

おわりに

九州と琉球列島における中国陶磁器出土遺跡の集成の結果、福建省産の粗製白磁である今帰仁タイプ白磁碗、ビロースクタイプ白磁碗(正確にはⅠ・Ⅱ類)は琉球列島において限定的に消費されたものであったことが想定された。また、九州・琉球列島における中国陶磁器の消費動向の推移を比較した結果、これらは13世紀後半代以降に中国との結び付きによって琉球列島へと持ち込まれたと推定した。このことから、両タイプの白磁碗は琉球列島と中国との経済関係を示すものとして非常に意義深い資料であることは間違いないであろう。

これらの消費状況をさらに明らかにしていくには、琉球列島における中国陶磁器出土量を詳細に検討することが必要であり、個別の層順や遺構における食器類の数量化を根気強く進めていくことが求められるであろう。海外貿易を中心とした琉球列島の経済事情を考古学的に検証することは、こうした作業を通してのみ達成できるのであり、今後実証的な取り組みが要求されるであろう。

文献

- 池田榮史 2006 「琉球における中世貿易陶磁の様相」『九州史学』第14号 69～79頁 九州史学会
榎本 渉 2001 「宋代の『日本商人』の再検討」『史学雑誌』110-2 史学会37～60頁
榎本 渉 2008 「日宋・日麗貿易」『中世都市・博多を掘る』海鳥社 70～81頁
大庭康時 1999 「集散地遺跡としての博多」『日本史研究』448 67～101頁 日本史研究会
鎌倉芳太郎 1976 『セレベス 沖縄発掘古陶器』国書刊行会
亀井明德 1983 「グスク採集の輸入陶磁器」『沖縄出土の中国陶磁器(下)』沖縄県立博物館「第6章 琉球における貿易陶磁器予察」として『日本貿易陶磁史の研究』に再録。本稿はこれによる。
亀井明德 1986 『日本貿易陶磁史の研究』同朋舎出版

- 亀井明德 1993 「南西諸島における貿易陶磁器の流通経路」『上智アジア学』11 11～45頁 上智大学アジア文化研究所
- 金武正紀 1988 「ピロースクタイプ白磁碗について」『貿易陶磁研究』8 148～158頁 日本貿易陶磁研究会
- 金武正紀 1989 「沖縄における12・13世紀の中国陶磁器」『沖縄県立博物館紀要』15 1～22頁 沖縄県立博物館
- 金武正紀 1990 「沖縄の中国陶磁器」『考古学ジャーナル』320 ニューサイエンス社
- 金武正紀 1998a 「沖縄出土の12・13世紀の陶磁器」『陶磁器に見る大交易時代の沖縄とアジア』12頁 那覇市立壺屋焼物博物館
- 金武正紀 1998b 「沖縄出土の14・15世紀の陶磁器」『陶磁器に見る大交易時代の沖縄とアジア』16頁 那覇市立壺屋焼物博物館
- 金武正紀 1998c 「沖縄における貿易陶磁」『日本考古学協会1998年度大会 研究発表要旨』日本考古学協会 35～36頁
- 金武正紀 2007 「今帰仁タイプ白磁碗」『南島考古』No.26 沖縄考古学会
- 瀬戸哲也・仁王浩司・玉城靖・宮城弘樹・安座間充・松原哲志 2007 「沖縄における貿易陶磁研究」『沖縄埋文研究』5 55～76頁 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 田中克子・佐藤一郎 2008 「貿易陶磁器の推移」『中世都市・博多を掘る』海鳥社 112～131頁
- 田中克子・森本朝子 2004 「沖縄出土の貿易陶磁の問題点－中国粗製白磁とベトナム初期貿易陶磁－」『グスク文化を考える』353～370頁
- 田村晃一他（編）1999 『倉木崎海底遺跡』宇検村文化財調査報告2 宇検村教育委員会
- 多和田眞淳 1956 「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」『琉球政府文化財要覧』12～13頁 那覇出版社
- 土橋理子 1997 「日宋貿易の諸相」『考古学による日本歴史10 対外交渉』雄山閣 61～76頁
- 徳永貞紹 1998 「肥前神崎壮・松浦壮域の中世港湾と貿易陶磁」『貿易陶磁研究』No.18 日本貿易陶磁器研究会 33～44頁
- 宮崎貴夫 1998 「長崎県域の貿易陶磁の様相－肥前西部・壱岐・対馬－」『貿易陶磁研究』No.18 日本貿易陶磁器研究会 45～57頁
- 宮下貴浩 1998 「鹿児島県持鉢松遺跡と出土陶磁器」『貿易陶磁研究』No.18 日本貿易陶磁器研究会 70～85頁
- 横田賢次郎・森田 勉 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心にして－」『九州歴史資料館研究論集』4 1～26頁 九州歴史資料館
- 琉球大学考古学研究室 2003 「琉球列島出土の貿易陶磁器の基礎的研究」『琉球大学考古学研究集録』第4号 琉球大学法文学部考古学研究室

東南アジアにおける14世紀前後の福建陶磁

—インドネシア・マレーシア・フィリピンの遺跡の出土遺物—

森本朝子

福岡市教育委員会

MORIMOTO Asako

Board of Education FUKUOKA City

はじめに

筆者は1989年～1990年に参加した文部省科学研究助成金による「東南アジアにおける貿易陶器の研究」(代表岡田茂弘)に、1991年4～5月に行った個人的調査旅行の成果を補足して東南アジア出土の貿易陶磁の報告をしたことがある(森本1991)。その後すでにかかなりの時間が経ってしまったが、引き続き中国やベトナムを始め東南アジア各地で経験を重ね、フランスやアメリカでも東南アジアで収集された遺物を調査する機会に恵まれた。2007年3月のインドネシア訪問の折には、本プロジェクトの視点から資料を見直すこともできた。

近年の東南アジア社会の安定がもたらした学界の進歩は著しいものがあり、最近いくつかの遺跡については報告書も出版されている。まだまだ不明なことも多いが、ここで一先ず以前の未熟な報告を再検討することは大いに有意義と考える。当時すでに龍泉窯や景德鎮などの有力窯については学界全体が一定の水準に達していたので本稿では触れず、これまで研究の遅れていた粗製の陶磁器に焦点を置くものである。最近の報告書ではようやくこれら粗製の陶磁研究に関心が高まっていることが感じられ、情報も増えてきた。

しかしながら本稿では主に過去の報告書に示された不十分な(底部が写っていない)写真や、筆者自身がとった古いメモ写真に頼らざるをえず、調査が不十分なことは筆者自身十分に認識しているところである。本稿が将来当該資料について本格的な再検討がなされるきっかけにでもなれば望外の喜びである。

1. 13・14世紀の東南アジアの遺跡と出土の福建陶磁

13あるいは14世紀といわれる遺物を出土した遺跡は、龍泉窯の青磁や景德鎮の青花と青白磁、あるいは徳化窯の白磁など、比較的研究の進んだ遺物を根拠に時代を与えられていることが多い。こうした遺跡で出土しながら報告されていない粗製陶磁が少なからず、いながらかなり多量にあることが近年次第に分かってきた。

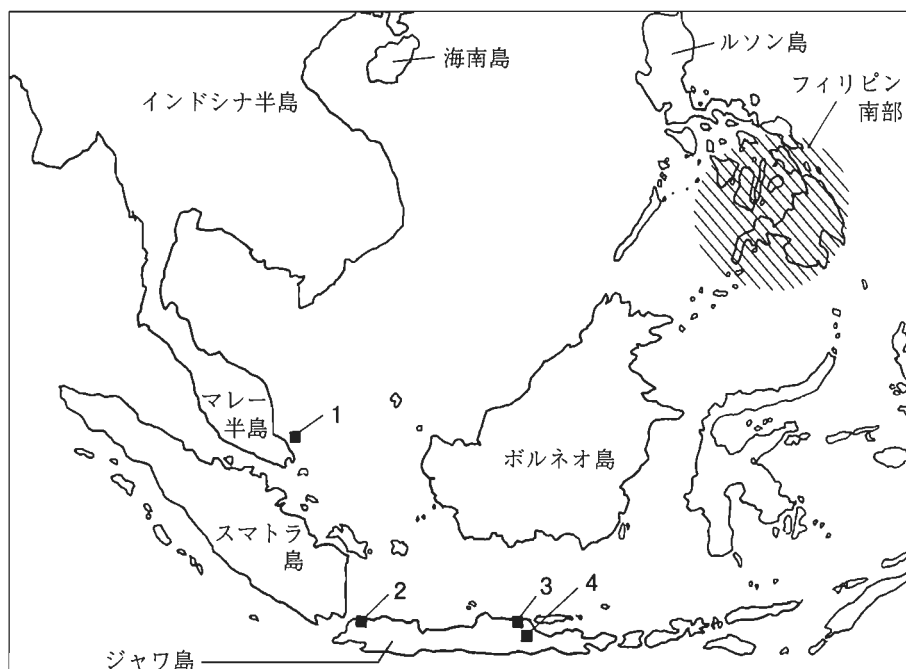


図1 東南アジアの福建陶磁出土遺跡示位図

1. チオマン島 2. バンテングラン 3. トゥベン 4. トローラン

というよりは、残された新しい分野として注目を浴びるようになってきたというべきであろう。

東南アジアにおいては出土する北宋後期の中国陶磁は大部分が広州出口の広東陶磁ということで、筆者もそれに同意するものであるが、12世紀のあるときから広東窯の陶磁はなくなり、代わって福建地方の窯の陶磁器がちらほら見られるようになる。この傾向は13・14世紀にはすっかり定着して、福建陶磁以外のものは珍しいという状況になっている。しかし同じ福建とはいえ、日本で出土するものとは微妙に異質なものも多い。本稿ではまずこれらの陶磁が実際にどのようなものであるのか、提示したい。

1.1. バンテングラン Banten Girang、西ジャワ、インドネシアの場合

バンテンはインド洋と南シナ海が接するインドネシア、ジャワ島の西北端部に位置する。南アジアや西方の諸国と中国を中心とする東アジアとの交易の重要な拠点であった。ここは16世紀から17・18世紀にかけて栄えたイスラム港市国家の王都として近年考古学的調査が進められてきた。このバンテン地方にあって、バンテングランはバンテン川を河口から15キロほど遡った左岸にある。1527年ごろに下流のバンテンラーマにイスラム教徒の勢力が確立されるまでこの地方の政治的中心であったと考えられている。ちなみにグランとは上流の意であり、ラーマは古いの意という。

このバンテングランについては1990～92年に行われたインドネシアとフランスの共同調査の報告書が出版されている (Dupoizat et al. 1994)。まずはこの報告書を見てみよう。

1.1.1. 報告書の写真資料

報告書では出土した陶磁器は24に分類され、それぞれに X・XII・XIII 世紀あるいは X～XI 世紀・XII～XIII 世紀などの年代が与えられている。この分類に従って出土陶磁の数量が示され、その年代的推移が検討されている。しかし分類の内容については叙述がなく、研究者共通の資料としては価値を減じているといわざるを得ない。

報告書には出土陶磁器の45枚の写真 (Ill. 59～106、114個体が写る) と2枚の描図 (Ill. 107, 108) が提示されているので、これらを手がかりに若干の再検討を試みることにする。なお45枚の写真のうち2枚、21個体はベトナムとタイ陶磁の写真である。

それではまずは内底に輪ハゲのある碗皿、あるいは内底無釉の粗製の碗皿を中心に見ることとする。検討結果は表1の通りである。

表1 バンテングラン報告書の福建陶磁

(Dupoizat et al. 1994, pp.147-157により作成)

Ill. No.	遺物表記	報告者コメント	筆者コメント
70	BG, 92-5F/DA10(no9)	多分同安か安溪窯、14世紀	チャム青磁、15世紀
84	BG, 92-4F/N13	福建、12～14世紀	莆田窯、14世紀後半
85・86-①	BG, 92-4F/MS8	莆田など福建の窯、13～14世紀	浦口西山窯に類似品あり
85・86-②	BG, 92-4F/MT14		浦口窯に似る、13世紀
85・86-③	BG, 92-4H/PH12		浦口窯、13世紀
87	BG, 92-4T/MT12	福建? 浙江? 13～14世紀。 (12～14世紀?)	白泥あり。今帰仁タイプI類か
88	BG, 92-4F/MT7	白泥、露胎は赤みを帯びる。 13～14世紀。(12～14世紀?)	今帰仁タイプIII類か
90	BG, 92-4F/L2	13～14世紀。福建か浙江	莆田窯、14世紀後半～15世紀世紀初

以上輪状釉剥ぎと内底露胎の碗の写真について検討した。紙数の都合ですべてを載せることができないが、イラストナンバー 70と90以外はコピーして、写真1に載せてある。85・86で紹介された3個以外は外底の写真がなく確認が困難であるが、現在の学界の水準で再調査するならば明らかにできることも多かろうと思われる。

その他にも新しい認識を提示できる写真がある。

III. 59:60-2: BG. 92-4F/OT9, 広東(西村窯?), 11~12世紀と推測されている青磁碗であるが、福建の12世紀後半~13世紀のものであろう。

III. 59:60-3: BG. 91-4J/EP-DQ, 10~11世紀が与えられているが、徳化窯などの13世紀の鉢と思われる。

III. 67・68: BG. 92-4F/NS9(No57), 見込みに目跡がある幅広高台の青磁蓮弁碗で10世紀があたえられている。よく似たものが長崎県の元寇遺跡鷹島出土品にあり、13世紀後半の青磁と見るのが妥当であらう(森本1993、第2図7)。後ほど検討するミシガン大学のゲーテコレクションにも同種の物(写真12-⑤)があり、一定量の海外流通があったものと思われる。

以上の作業を通して感じることは近年の我々の知識の進歩の大きさである。結局50個ほどの15世紀以前の中国の碗皿が写真紹介されていたが、その約5分の1に新しい解釈を与えることができそうである。

1.1.2. 筆者の実見資料

筆者は2007年3月、短時間であり、限られた分量ではあるが、ジャカルタの考古学研究センターおよびバンテン遺跡博物館収蔵庫で、バンテンギランの資料を見る機会を得た。そこには85年の調査資料と90~92年の調査資料があった。前者は上述の報告に関わる以前の調査で採集されたものであるが、後者は前述の報告書で分類された遺物の一部と思われる。これらの資料について、ここ数年のわれわれの調査による、新しい知見を付け加えたいと思う。以下に紹介する。

写真1-①: 同安窯系青磁碗2個。内面の文様は龍泉窯を倣う。12世紀後半の莆田窯の可能性あり。

写真2-①: 今帰仁タイプに似る。浦口窯。

写真2-②: 今帰仁タイプに似る。浦口窯。

写真2-③: 今帰仁タイプに似る。浦口窯。

写真2-④: ビロースクタイプII。閩清窯。

写真3-①: 浦口窯、内底露胎の白磁碗。今帰仁タイプ。

写真3-②: 今帰仁タイプに似た高台の輪状釉剥ぎ碗。浦口窯

写真3-③: 浦口窯の碗底部。今帰仁タイプ。

写真3-④: 輪状釉剥ぎ碗底部各種。右下は青磁である。

写真3-⑤: 青磁の輪ハゲ碗。龍泉窯ではない。福建か。

本研究のテーマからは遠くなるので詳述は避けるが、13・14世紀だけでなくこの遺跡の全般について特徴的な遺物を以下に紹介する。

- ・ いわゆる初期貿易陶磁では、越州窯青磁のⅢ類碗、10~11世紀がある。また日本では見られないタイプの青磁がある。これは広東など中国南部の窯の製品であらう。
- ・ 11~12世紀の広東の白磁が少量ある。しかし博多、大宰府で出土する閩江流域の同時代の粗製白磁は見られない。この時代、東南アジアへは広州港が主要な出口だったのであろう。
- ・ 龍泉窯系の青磁は12世紀後半からあるが、確かな数量が見られるようになるのは13世紀の蓮弁碗

からで盛期は14世紀にある。以後15世紀まで続く。

- ・ 前述のように同安窯系青磁が少数ある（写真1-①）が、同安汀溪窯の物としては典型的でない⁽¹⁾。泉州地域から閩江流域までを視野に入れて考える必要がある。輪状釉剥ぎの粗製白磁や青磁がたくさんある。報告書執筆者の一人はこれらに12世紀からの年代を考えているらしい。実はこの12世紀という認識は日本出土の閩江流域の白磁から導かれたものと想像される。しかしここにはこの時代の日本出土の輪状釉剥ぎ碗と同じものはない。したがって「輪状釉剥ぎ=12世紀後半」の日本の常識をここで適用する必要はない。日本の研究を援用できるものとして鷹島出土の浦口窯13世紀後半の輪状釉剥ぎが指摘できる。しかしここには、これにも当てはまらない輪状釉剥ぎ（写真3-④・⑤など）が多数あってそれらが何処で、何時生産されたかは将来明らかにすべき問題である。なお当プロジェクトが2005年に福岡市で実施した研究会においても当該時期の浦口窯の製品は莆田窯のそれとよく似ており、判別が困難なことを認識させられた。栗建安氏によればこの2つの窯は閩江中流域の窯として一くくりすることも可能ということである。ことに今回は写真による分類ではあり、不明確な場合は細分を控えたい。
- ・ 白磁・青白磁は口ハゲの碗や形作りの合子があるがほとんどは徳化窯かその系列下にある莆田窯と考えている。また例外的に景德鎮と考えられるものもある。
- ・ 染付けは元染の薄片といわゆる明代空白期の碗の写真がある。
- ・ ベトナムの青花、タイ青磁も一定量ある。15・16世紀とされている。特筆すべきものとしてベトナム黄白釉碗がある。下に置く器の内底を輪状釉剥ぎせずに高台に耐火土をつけた器を直接置いて重ね焼をしている。通常目跡の残る重ね焼より古い技法である。ベトナム国外の遺跡では初見である。13～14世紀前半の可能性がある。

ここバンテンギランは、16世紀以前のジャワ地方の様子を知る重要な中国陶磁出土遺跡である。報告書には分類された陶磁器の推定年代と個体数が記されており、それをもとに出土量の推移を示すグラフを製作した。これについては第2章で検討の予定である。

1.2. トローラン Trowulan とその周辺の出土陶磁器

ジャワでは「1222年にクディリ朝に代わりシンガサリ朝が成立した。」シンガサリ朝は「クルタナガラ王の治下でインドネシア海域の貿易を掌握し、この地方で最強の勢力となった。この王の1289年、中国元朝の使節を追い返したため、1293年の元のジャワ追討軍を招いた。シンガサリ朝はこの元寇をうまく利用して新王朝、マジャパヒトを建国した」（桜井他1993 pp.91～92）。マジャパヒトが首都としたのがトローランといわれている。そしてその外港とも言うべき港がここにあるトゥバンであり、元寇の船が目指して来たのもトゥバンであった。トゥバンは『諸蕃志』にも現れる古くから重要な港で、鄭和の遠征でも名が挙がる。

1.2.1. トローランの出土資料

さて、マジャパヒトの首都があったと伝えられるトローランは、元青花の出土が多く、これがザクザクと、あるいはガラガラと出土したと称される骨董界では有名な遺跡である。トローラン出土と伝えられる元青花のコレクションは世にたくさん存在している。その上ここではトゥバンでは見つからないもの、たとえば釉裏紅や磁州窯なども多く出土しており、トローランはトゥバン以外にも港を持っていたことが推測されている。それはそれで確かであろうが、実はトゥバンの遺物は港の沖で引き揚げられた沈没船などの、限られた時間幅の遺物であると推測されるのに引きかえトローランの遺物は都市、あるいはマジャパヒト王国200年の歴史を反映していると考えられるべきであろう。遺物の多

様性はこのことに由来すると思われる。

長い間多くの人の夢をあおってきた遺跡であるが、昨年ようやくトローラン出土の陶磁についての報告が出版された。この報告書は対象を植民地時代から続けられた発掘による出土品に限っており、巷の噂や骨董市場によって作られたトローランのイメージと比べてかなり地味な印象を与える(Dupoizat et al. 2007)。

報告によれば、調査によって出土した陶片はトローランとジャカルタの2つの収蔵施設に保管されている。全部で12684片が登録されていて、そのうち10282片は中国陶磁で全体の81%に当たり、2198片、17%の東南アジア陶磁を大きく引き離している。204片はヨーロッパ陶磁である。また中国陶磁のうち586片はマジャパヒト以後の16世紀以降のものであり、さらに9c～12c前半のマジャパヒト以前のものも若干あるという。中国陶磁は13c末から急激な増加を見せる。ちなみにマジャパヒトの建国は1298年とされる。結局マジャパヒト時代の中国陶磁として以下の9685が計数されている：

緑がかった釉の福建産輪状釉剥ぎ碗 3245片、33%

龍泉窯青磁 2793片、29%

徳化窯白磁 361片、4%

景德鎮の青白磁 212片、2%

青花 157片、2%

貯蔵用の壺 2864片、30%

その他

これは東南アジアの遺跡における出土陶磁の組成の実態を伝える画期的な数字といえる。今まで我々はいつも龍泉窯の青磁や元青花などの分かりやすい遺物、あるいは珍しい遺物の情報を与えられることで満足していたようだが、それが情報としては大変にゆがんだものであったことを思い知らされた。東南アジアの14・15世紀に出土する中国陶磁の最多の遺物は実は輪状釉剥ぎ碗などの福建の粗製陶磁だったのである。この数年我々は浦口窯や閩清窯の研究を進めてきたが、我々の中でさえもかなりマイナーな遺物の研究という認識があったことを否定できない。この認識は今強く揺さぶられているのである。

報告書には問題の福建の輪状釉剥ぎ碗として次のような8枚9個体の写真が示されている。

写真4-18a・b：3個の輪状釉剥ぎ碗の底部の内、外である。無文である。いずれも外底に顕著な二度削りは認められない。

写真4-20a・b：輪状釉剥ぎの内底中心に細い線の蓮華文がスタンプされている。外底は二度削り、高台は面取りをしている。体部は平らな底部から角度を持って立ち上がる。

写真4-21a・b：左に内底に細い線の草花文がスタンプされた輪状釉剥ぎ碗、外底は二度削りされている。右には花芯に寿の字を入れた菊花文がスタンプされている。輪状釉剥ぎはなく、厚い高台は閩清窯のピロースクタイプⅡ類の碗である。この2個は報告書では浙江省の青磁の可能性が指摘されている。全体に強く褐色を帯びているようであるが、土色の影響をうけたのではあるまいか。

写真4-19：見込みにやや不明瞭な印花文がある。輪状釉剥ぎには細い段がついている。ゆったりと丸く立ち上がる碗。

写真4-32：口縁の外反する浅めの輪状釉剥ぎ碗。

以上の9個は閩清窯のピロースクタイプ碗1個を除いてはすべて莆田窯のものとする。

この他の福建粗製陶磁としては徳化窯と思われる形作りの皿や合子、双耳壺、双耳鉢、三足香炉などの写真がある。写真26の双耳つき鉢と類似形のものが同安汀溪窯で出土していて鳥食罐として紹介

されている。注（1）の文献で見ると福建の窯ではかなりポピュラーなものだったようである。ただし徳化窯やその周辺の窯の影は予測より薄く、閩江中流域の窯の製品が目立つ。

後回しになったが、龍泉窯の青磁を見ると、蓮弁碗から始まるようで、それに先立つとされる劃花文碗は見られない。14世紀も後半の資料がやや増えているように見えるが15世紀は多くない。総じて青磁の扱いは軽い。

次に有名な元青花に目を転ずれば、さすがにたくさんの写真がある。そのほとんど（29枚、30片、内1個はビーズ貼付け文）はスケッチ風の簡略な文様のタイプでトゥバン出土と同類だが、端正ないわゆる至正様式の文様の破片も6枚8個が紹介されている。このほか元代の景德鎮のものとして褐斑文の中くらいの広口壺やビーズ貼り付け文の四角い小壺、小さな人形などがある。他に元以後の青花も9枚、9片を見ることができる。永楽や宣徳、成化などでいずれも15世紀のものである⁽²⁾。さらに簡略文の元青花と似た文様の釉裏紅も少なくとも20片報告されている。元代から明代洪武期までと考えられている。このように、元青花の遺跡の代名詞のごときトローランではあるが、景德鎮陶磁を全部ひっくるめても出土中国陶磁の2%にしか達しないというのが現実のようである。

以上、トローランの中国陶磁は、龍泉窯の青磁や景德鎮の青花などが、14世紀中ごろから後半にたくさん入ったこと、そしてそれは明初あるいは15世紀には急激に減っていることが分かる。16世紀のものはほとんどない。しかし龍泉窯の青磁に13世紀の蓮弁碗があること、またビロースタイプII類があることから、中国陶磁の33%を占める粗製の輪状釉剥ぎ陶磁の多くは我々の対象としている13・14世紀のものである可能性が大きいと考える。

報告書は東南アジアの陶磁についてもかなり詳しく書いている。東南アジア陶磁の輸入は14世紀後半から始まると考えられており、本稿の対象とする時代と重なる部分は大きくはないが、貿易陶磁全体の推移を知ることによって中国の粗製白磁の位置がより明確になると考え取えて記す。

タイの陶磁：スコタイの鉄絵の写真が11枚、7個体紹介されている。草花文の3個は14世紀後半から15世紀前半、魚文の4個には14世紀後半から15世紀末までの年代が与えられている；シサッチャナライの鉄絵は写真5枚に3個体が写るが、14世紀末から15世紀初めのタイプ2点とやや遅めの1点である。これらタイの鉄絵は15世紀中期の早い段階から急速に青磁にとって代わられたようである；シサッチャナライの青磁は9枚の写真に13個の皿の破片が写っている。これらは16世紀には及ばないと考えられている。以上合計23片。

ベトナム陶磁：単色釉の陶片、10枚、14片（厳密には内白外青磁の2色掛け分けが2片、褐斑ある青磁4片が含まれる）が紹介されている。明らかに14世紀と考えられるものは2片で大部分はやや遅れる時代のものである。中にチャム陶器らしいものもあるが写真だけでは断言できない。14世紀後半から15世紀中ごろと見られる；初期の鉄絵および青花、16枚、18片。14世紀後半から15世紀前半；花文搔き落し瑠璃釉の皿3枚3片。非常に珍しい種類のもので、13・14世紀とする研究者もある（Stevenson et. Al. 1997, pp. 248 - 251）が、著者らは15世紀半ばの早い時期を考えているようである。筆者はこの種類のもをナムディンの博物館で見たことがあり、やはり遅く考えたい；青花碗、10枚、16片。蓋など、4枚6片。瓶や水注その他、5枚、6片。皿2枚、2片；色絵、2枚、4片；飾り物（主に動物をかたどった水滴や水注である）、15枚、24片；壁タイル（ジャワ特有の注文品と考えられている）、14枚20片。以上合計113片。

タイ陶磁とベトナム陶磁の実数について、あるいは両者の比率についての言及はないが、写真の数からもベトナム陶磁が圧倒的に多いことが理解できる⁽³⁾。

タイやベトナムなどの陶磁の輸入は14世紀後半に始まるが、15世紀には確実に増加している。多く

の研究者が、明の海禁で中国陶磁の供給が不足した分が東南アジアの陶磁器で埋められたと説く所以である。タイ陶磁に比べてベトナム陶磁の比率が大きいのはジャワの特徴である。しかしこれもトローランでは16世紀には続かないようで、それ以前にマジャパヒトの勢いは落ちてしまったようである。

トローランの、したがってマジャパヒトの建国の歴史は琉球のそれと年代的に近く、また両者とも海外貿易を立国の基盤とするなど、おおいに共通するところがあるため、出土の貿易陶磁器に興味を惹かれる。ここでは龍泉窯や景德鎮などの中国陶磁が15世紀には急激に減少して代わりにタイやベトナムの陶磁が増加し、全体としては16世紀には出土が終わるようである。琉球で我々の注目した輪状釉剥ぎ碗に似たものが非常に大量に出土していることが分かった。それにしても、トローランで33%という大きな数字を前に改めて福建粗製陶磁研究の重要性を感じた次第である。

1.2.2. ジャカルタの考古学研究所のトゥバン Tuban 引き揚げの陶磁

1980年、上記トローランの外港だったといわれるトゥバンの沖で大量の陶磁が発見された。大半は調査以前に散逸してしまったが、世の中にはトゥバン出土と伝えられるたくさんの遺物があり、我々は主にそれらを通じて遺跡の概要を想像してきた。

1983年にジャカルタの考古学研究所が海軍の協力の下に行った学術調査では5～6箱分（約500キロ）

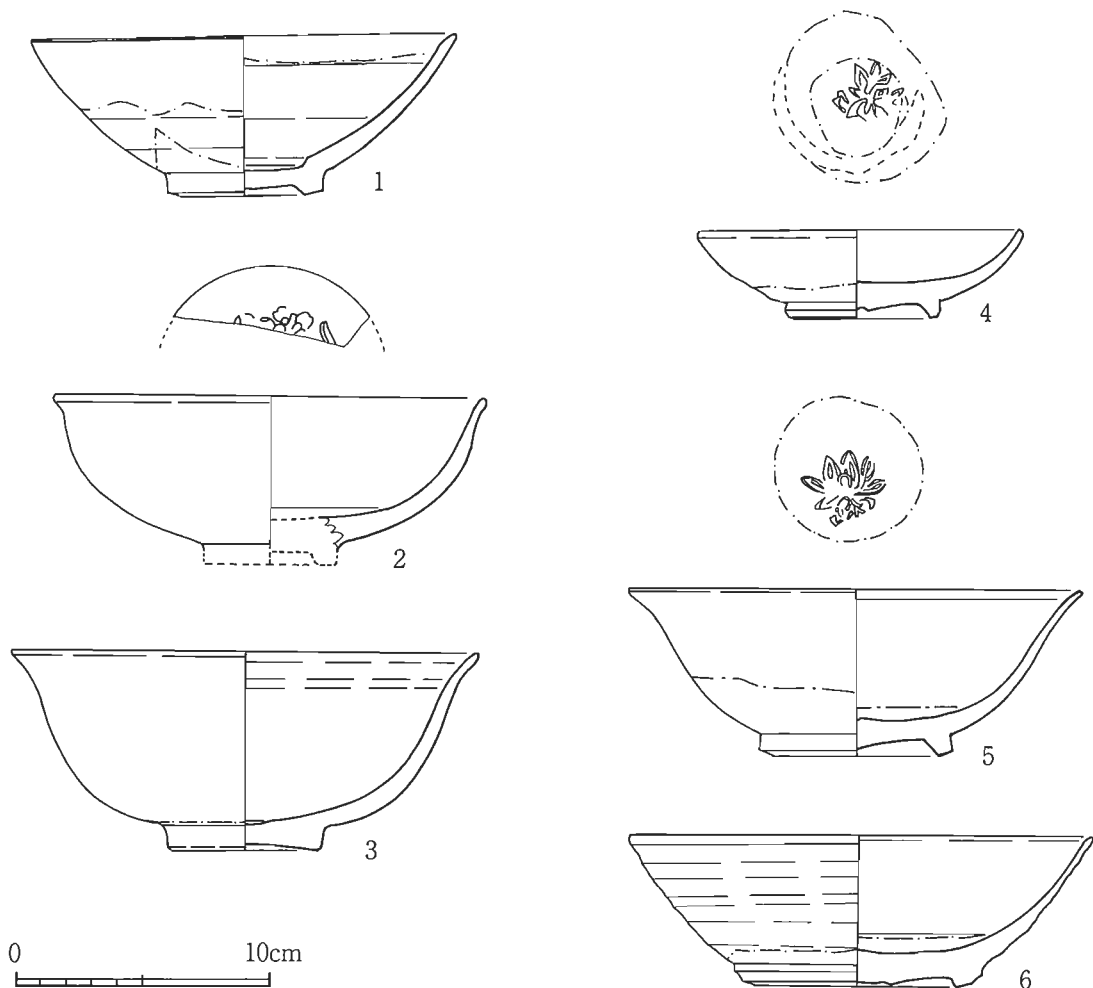


図2 トゥバン出土福建粗製陶磁

1、2はジャカルタの考古研究所、3～6は東京出光美術館所蔵

の陶片を引き揚げたが、内容はそれまで現地の人々によって発見されたものと相違はないという。これらはおおむね新安沈船の遺物よりはやや新しく考えられている。新安沈船と共通する青磁や白磁の他そこでは見られなかった、元青花、ベトナム鉄絵、ベトナム青花、チャム陶器碗が含まれているからである (Abu Ridho et al. 1983)。

筆者は、1989・99年の調査、および2007年3月の考古学研究所訪問の折にこれら調査資料の一端に触れることがあった。今回はこの折に目についた粗製の陶磁を紹介することにする。

写真5-①： 輪状釉剥ぎ碗、今帰仁タイプに似る。浦口窯か。

写真5-②： 内面露胎碗。今帰仁タイプに似る。浦口窯か。

写真5-③： 今帰仁タイプに似る内底露胎の碗と輪状釉剥ぎ碗である。重ね焼の白泥がたっぷりと残っている。莆田窯か。

写真5-④： 外面に細めの二重蓮弁を刻む碗。見込みには茶だまりがある。浦口窯。

ここには図2-1：同安窯系の青磁碗や図2-2：ピロースクタイプⅢ類もあった。

1.2.3. 出光美術館所蔵の伝トゥバン引き揚げ資料

東京の出光美術館にはトゥバンの出土と伝えられる資料が購入、所蔵されている⁽⁴⁾が、このなかにも以下のごとき粗製陶磁がある。

写真6-③・図2-4：輪状釉剥ぎの皿、見込みに印花文がある。莆田窯

写真6-①・図2-5：輪状釉剥ぎの外反口縁の碗。見込みに印花文がある。莆田窯

写真6-④：体内面を丸刃で搔き落とし外面には縦に片切彫りを入れて、菊皿にしている。輪状釉剥ぎで見込みには印花文を入れる。莆田窯

写真6-②・図2-6：内面露胎の碗。火が足りず生焼けである。莆田窯に似る。

ここには図2-3：徳化窯系の白磁碗もある。

第1章第2節2・3で見るとようにトゥバンには閩江中流域の窯の製品が一定量あることが分かる。そしてここでは浦口窯よりは莆田窯の雰囲気やや強いことが指摘できる。トゥバンの遺物について与えられている年代観はおおむね矛盾がないといえよう。

1.3. チオマン Tioman 島 (2.48N 104.10E)、マレーシアの場合

チオマン島はマレー半島南東海岸のパハンから32km 洋上にあり、南北20km、東西は広いところで15kmの三角形、マレー半島東岸最大の島である。900m級の山が3つあり、700余平方kmの島の大部分は山がちで熱帯雨林に覆われている。狭い海岸部分の平地は耕され、いくつかの小さな集落がある。人口は約1400人(1980年調査)、現在島の生業は観光事業に負うところが多い。山は遠くからのよき目印となり、新鮮な水が年中豊富にあって古くから遠洋航路のよき停泊地となったと思われる。チオマン島は10世紀のアラブ資料に Bitumah として現れる。中国史料では明初の鄭和の大航海の海図『武備志』に苧麻山として現れる。西アジアからこの島を通過して中国に向かう航路は Sulaiman bin Ahmad Al-Mahri が記していて、1475年以来知られているという。

1962年マラヤ大学の動物学調査隊 (Lord Medway 隊長) が島の南西部の入り江テルニツパ Teluk Nipah の洞窟グアセラウ Gua Serau で170片 (40個体強) の陶片を採集。これは現在クアラルンプールのネガラ博物館に保管されている。一行はさらにこの洞窟からテルニツパまでの間で陶片が散乱している箇所を発見、ここを荷揚げ場 pengkalan と名づけた。

1970~73年、Dr. Stephens はテルニツパで「ゴミ捨て場」および「台所」を発掘。遺物はマラヤ大学のセニアジア博物館へ収められた。1981年および1984年、Mr. & Mrs. Russel は海中の遺物の

あり場所を明らかにした。そして、テルニツパ発見の遺物は11世紀から19世紀と報告。この時までの資料を以って "A Ceramic Legacy of Asia's Maritime Trade" なる展覧会がマラヤ大学センアジア博物館で開かれたのは1985年のことであった。この少し前、1984年10月に、ネガラ博物館の考古部門の Encik Adi Haji Taha 率いるチームがテルニツパとカンボンジュアラで発掘調査を行い、2000片近くの陶片を発見しているし、以後も順次調査が行われているが、これらは展覧会カタログの考察には入っていない。

この時の展覧会の展示品の大部分は島の西側から来ているが、島の東側、特にカンボンジュアラ Kampung Juara でもたくさんの遺物が採集されている。ここは太平洋に開けた湾になっていていい風避け港になっているが、海賊の攻撃からも逃れやすい立地と思われる。カンボンジュアラのものは完形品が多く、発見されるや、たちまち骨董屋や個人収集家の手に渡ってしまった。これらには記録がなく、学問的な価値は失われてしまった。ジュアラの遺物は一部分ネガラ博物館とパハンのスルタンアバカル博物館 Muzium Sultan Abu Bakar でも見ることができる。12世紀～19世紀の遺物があるが、主力は14世紀半ば～後半であろう。

西海岸の中央部 Tekek に建設されたホテル近くにも17世紀の中国陶磁片と19世紀のヨーロッパの陶片が出土した2地点がある。

この展覧会のカタログとして立派な本が出版されている (SACS 1985)。1985年という早い出版年には珍しく、調査による遺物をすべて網羅している点は高く評価したい。遺物はかなり細かく分類され、類毎に代表的な陶片の写真と時には簡単に、また時には細かい解説がつけられている。このため多くの項目で読者が追考査できるので、ありがたい。ここではまずこの本の末尾に見られる分類表に従ってチオマンの出土陶磁を見ることとしたい。ただし本稿の趣旨により13・14世紀に力点を置くこととする。この表に入っているのはテルニツパ、グアセラウそしてテケの遺物で、すでに述べた事情からカンボンジュアラの遺物は含まれていない。遺物は総数1686片で、生産地と時代を基にして大きく次のように分類されている。

- ① 11～12世紀の広東窯：817片
- ② 12～14世紀の福建窯：41片
- ③ 江蘇窯：1片
- ④ 11～12世紀の浙江もしくは広東窯：1片
- ⑤ 12～15世紀の浙江窯：53片
- ⑥ 11～19世紀の東南アジアの土器と炆器：263片
- ⑦ 15～17世紀のタイ陶器：36片
- ⑧ 15～17世紀の景德鎮の青花：33片
- ⑨ 19～20世紀のいわゆる Kichen Ching ware：41片
- ⑩ 窯口不明：16片
- ⑪ 19世紀後半～20世紀の西洋陶磁：20片
- ⑫ 貝や珊瑚が付着して判別ができないもの：364片

以上の分類は写真との照合によって現在でもおおむね首肯できることが分かった。この中で本稿に関係あるものは②・③・⑤・⑥となり、中でも②・③・⑤が対象になる。しかしはなはだ残念なことには②と③の一部で表と写真の番号に混乱があり正しく照合できなくなっている。ここでは表に従って写真番号を訂正することとした。

②は泉州窯の陶器が26片、徳化窯の白磁9片、同安窯と安溪窯それぞれ1片、閩清窯の白磁1片、

その他窯口不明3片である。同安窯と安溪窯については筆者には確認する能力がないが、閩清窯の白磁とあるのは連江窯の白磁である。それ以外はおおむね妥当な判定である。総ずるにこれらは12世紀後半から13世紀の遺物である。大部分が泉州周辺の窯の製品である中、閩江流域の浦口窯の陶磁があることに注目しておきたい。①の広東窯に代わって東南アジアで福建窯が見られるようになるのは12世紀ということである⁽⁵⁾が、ここではそれを実感することができる。③は正しくは写真253の長胴四耳壺であろう。江蘇省宜興周辺一帯で宋元明にわたり長く作られた。⑤は龍泉窯の青磁である。粗製の蓮弁碗Ⅱ類と精製の蓮弁碗や皿類はⅢ類である。ほとんどが13世紀と考える。

以下写真と実測図を参照されたい。

写真7-①：輪花のある大宰府分類Ⅶ類の白磁碗に近い。報告書では閩清窯とあるが、見込みに印花文があり、浦口窯の製品である。12世紀後半。

写真7-②左・図3-1：脈入り蓮弁碗、報告書には同安窯の青磁とあるもの。12世紀後半。

写真7-②右・図3-2：龍泉劃花文碗をまねるが、底部は粗く造られている。報告書では安溪窯とされている。浦口窯にも似ている。12世紀後半～13世紀前半。

写真7-③：上に似るが、無文で口縁も外反ぎみである。龍泉青磁をまねたもの。

写真7-④：徳化窯系の形作り口ハゲ碗の大小。

写真7-⑤：図3-4：徳化窯系の脈入り蓮弁碗。形作りで口ハゲに作る。

図3-3：徳化窯13世紀の白磁鉢。これはカンボンジュアラ（個人蔵）にもある。バンテンギラン（Dupoizat et al. 1994, Ill. 59, 60-3:BG. 91-4J/EP-DQ）、グーテコレクション（写真12-②）にもある東南アジアではかなりポピュラーなものである。

以上をまとめれば、テルニッパでは13世紀までで14世紀はないということである。なお、我々が現地では採集したものには若干の12世紀にさかのぼりうる龍泉窯の青磁や14世紀以降の遺物もあったことを記録しておきたい。

・ テルニッパとは山を隔てた反対側の海岸にあるカンボンジュアラでも陶磁器が発見された。しかしここでは前述の通り、多くの完形品が出土したため、遺物として記録されないまま好事家の間に散逸したという。こうした事情でカンボンジュアラの遺物はこの展覧会では参考程度に展示されただけで、遺物の計数表にも入っていないのだが、幸いカタログにも写真が数枚紹介されている。ジュアラの遺物は考古学的な資料とならないという考えも理解できるが、完全に欠落させるのは残念である。少なくともネガラ博物館やアブバカル博物館で収集した資料は、大きな確率でカンボンジュアラ出土と信じることができよう。

実は筆者らは早くからこのカンボンジュアラの遺物に興味を抱き、これら博物館の資料を調査させてもらったことがあるので、次に筆者らの調査を基にカンボンジュアラの遺物を紹介することにする。

カンボンジュアラで特筆すべきことを以下にあげる：

- ・ 元の青花や枢府タイプの白磁が一定量ある。
- ・ ベトナムの白磁や鉄絵が非常に多い。
- ・ ベトナム初期青花もある。
- ・ 中部ベトナムのチャムの輪ハゲタイプの碗がある。
- ・ タイのスコタイの鉄絵の碗皿があること、ハンネラとシサッチャナライの青磁もある。
- ・ 龍泉窯青磁で多いのは外反口縁の碗である。
- ・ 白磁は少数の景徳鎮系の口ハゲを除いて徳化窯系の形作りの口ハゲといわゆるマルコポーロウエアと称される小瓶が多い。

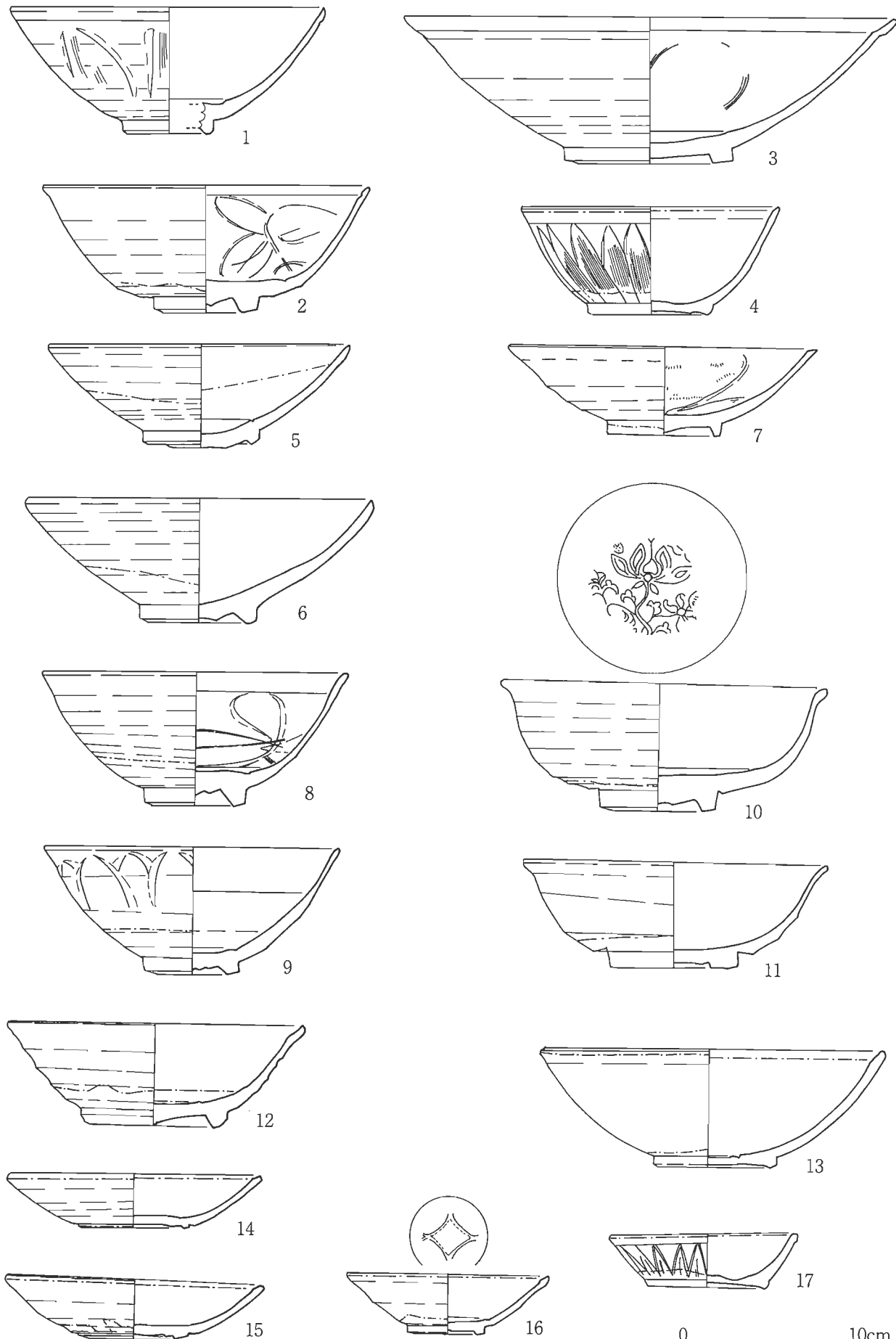


図3 チオマン島出土の福建産粗製陶磁
 ①～④ テルニツパ、⑤～⑰ カンボンジュアラ出土
 アババカール博物館所蔵

実は以上のような認知度も高くある程度素性の分かっている遺物のほかに、これまで注目されることが少なかった、粗製の白磁や青磁が無視できない量存在している。

今回は主にこれらを写真と若干の実測図で紹介する。

写真8-①・図3-5は写真左上の個体：浦口窯に似る。内底無釉碗。

写真8-②：輪状釉剥ぎ碗各種。施釉の部分や、高台の作りはいろいろである。莆田窯あるいは徳化窯碗坪崙など？

写真8-③：口縁外反の輪状釉剥ぎ碗。

写真8-④：同じく口縁外反の輪状釉剥ぎ碗である。似た形で内底露胎の碗が14世紀末～15世紀前半とされるマレーシア沖の沈没船から引揚げられている⁽⁶⁾。

写真8-⑤：大きな目がついた鉢。図3-3と同類で、テルニツパと共通の遺物である。徳化窯。

写真9-①・図3-8：内面には龍泉窯タイプの劃花文を持つ。雑なつくりの高台の青磁碗。浦口窯に似る。

写真9-②：やや軟質な感じの土の青磁碗。無文。釉は不透明。外底に糸きり痕のような窺痕？がある。高台は部厚い。

写真9-③・図3-9：淡いオリーブ色を帯びた透明釉の蓮弁碗。総じて浦口窯に似るが高台が整いすぎて異質な感じがある。

写真9-④：高台の様子が③によく似ており、同じ窯の製品かと思われる。蓮弁はなく無文で、見込みは段をつけずなだらかな曲面で口縁にいたる。釉はかなり不透明、下まで届く。

写真9-⑤：輪状釉剥ぎ碗。浦口窯か。

写真9-⑥・図3-6：釉剥ぎはないが、外底の雑な削りは浦口窯を思わせる。釉はとけきらずピンホールが多い。

写真9-⑦：胎土に混じりの多い口縁外反の碗。外底の削りも浅い。釉胎はほとんど陶器というべきであろう。沖縄で泉州窯系とされるものに似ている⁽⁷⁾。沖縄では14世紀半ばから見られる。

写真9-⑧：型作り緑釉陶器皿。南海1号沈船引揚げに同類がある⁽⁸⁾。元代泉州磁窰製品か。

写真10-①・図3-7：大宰府分類白磁碗 VII 類。閩清窯、12世紀後半。

写真10-②・図3-10：ピロースクタイプⅢ類の白磁碗。

写真10-③：図3-11：高台は厚くピロースクタイプに似るが、胎土、釉ともに褐色がかり、削りは粗く、口縁の外反も大きくて別の窯の製品と思われる⁽⁹⁾。

写真10-④：灰色の硬い感じの平底皿で、口ハゲ。見込みにピロースクタイプⅢ類によく似た印花文がある。

写真10-⑤・図3-16：灰色がかった釉の高台つき口ハゲの皿。見込みには陽印刻の菱形が浮いている。

写真10-⑥：体部は開かずに立ち上がり、そのまま丸く収める。口ハゲ仮圈足の杯である。莆田窯であろう。

写真10-⑦・図3-15：口ハゲの皿。ごく低い高台を斜めに削り上げた特徴ある皿である。

写真11-①：徳化窯系の型作りの碗、皿、合子など。

写真11-②：徳化窯系の型作りの碗

写真11-③：やや分厚い口ハゲ型作りの杯。これも徳化窯系か。

写真11-④：型作りの口ハゲ碗。内面に印花文がある。徳化窯系。

写真11-⑤：徳化窯系の型作りの小瓶。いわゆるマルコポーロウエア。

図3-12：厚い高台を面取りし、内面輪状釉剥ぎで外反するこの碗は莆田窯と思われる。

図3-17：徳化窯系の型作りの皿。灰褐色、体外面の文様は退化した蓮弁であろうか。

このように、カンボンジュアラの粗製陶磁には、鷹島の元寇関連の遺跡で出土したような浦口窯の陶磁、あるいは琉球で出土が多い今帰仁タイプの浦口窯の陶磁とピロースクタイプⅢ類の閩清窯の陶磁や、莆田窯の陶磁、そしてそれと数を競うような徳化窯系の白磁がある。さらに、それらに似て異なる産地不明の陶磁などもあり多彩である。全体としては14世紀に盛期があると思われるが、実はテルニッパとカンボンジュアラには共通のものもあり、この2遺跡の活動はある時期並行し、やがてカンボンジュアラに移ったものと思われる。移行の時期は13世紀後半であろう。カンボンジュアラの繁栄は15世紀には終わったと考えられる。

このようにカンボンジュアラの遺物群は、ちょうどテルニッパのそれに後続すると考えられる。このことからこの時期に船を従来通りテルニッパではなくカンボンジュアラに入港させた何らかの事情が起こったものと想像される。この島は大きくはないが山越えの道はなく、20世紀末現在船で移動する場合、潮流の関係で、1日で1周することができなかった。このように両遺跡の間は近くはない。

カンボンジュアラの凋落のあとチオマン島全体で再び目立った状況は発見されていない。

しかし20世紀まで継続的もしくは断続的に一定の船の寄港があったことを示す遺物が出土している。

1.4. フィリピン諸島南部の場合 —グーテコレクション Guthe Collection—

グーテコレクションはカール・グーテを団長として1922～25年まで行われた米国ミシガン大学のフィリピン遠征隊が集めた資料である。これを中核として現在の大学博物館と大学の人類学科が設立されたという由緒を持つ重要なものである⁽¹⁰⁾。

主要部分は14世紀から15世紀の貿易陶磁が占める。完形と破片で7500個もあり、米国内最大のフィリピン考古学、貿易陶磁のコレクションである。ほかに数百のフィリピンの土器があり、3000近くの貴石やガラスのビーズ、数千の貝製装身具、金装身具、鉄器もある。

これらの資料は以下の点から注目すべきものである。

- ・ 遺物には記録があること。542の遺跡から発掘、採集された。うち158遺跡はグーテに自身によるこの時代としてはかなり詳しく信頼性が高い発掘の記録がある。残りの384遺跡は彼の代理agentsが関わったもので精粗はあるもののやはり記録がある。
- ・ 陶磁器などの収集熱によって遺跡が破壊される以前の調査によること。コレクションは1930年代、あるいは40年代にもカタログ作成が試みられたようである。おかげで物がかなりよく分類されて大まかに種類別に箱に分けられていることが分かった。遺物台帳があり、発掘もしくは入手の状況が記され、遺物には番号が記載されている。ただし当時の研究レベルでは窯口など分かっていることはごく少なかったことであろう。総合的な研究は発表されていない。

2005年秋、調査者はこのように大きな資料とは知らず十分な時間を用意せずに行ったため全体像をつかむことさえもできず残念であった。しかしながら、まずは内底露胎、あるいは輪状釉剥ぎなどの粗製陶磁の多さに衝撃を受け、早速これに焦点を当てて調査を始めた。非常に多い14世紀の龍泉窯青磁、タイの鉄絵、陶器などには目をつむり、ひたすら集中して粗製陶磁の網羅を目指した。時代幅が大きくないせいか、やや単調であったが、北ベトナムの白磁や中部ベトナムの青磁も発見し、最後には龍泉窯青磁にもざっと目を通す時間ができて、結局215個を見て写真を撮って終了した。

調査総数：215、総体を調査したわけではないので、細かい数を上げることの意味は少ないが、参考までに私見により分類した内訳は下記ようになった。

- ・ 中国陶磁：9世紀から12世紀前半の越州窯・長沙窯・広東窯など5片；龍泉青磁61片、内訳は12世紀後半が8片、13・14世紀が51片、15世紀が2片；その他の青白磁や陶器（磁甕窯）など21片
 - ・ ベトナム陶磁：北部6片；中部（チャム）15片
 - ・ タイ陶磁：シサッチャナライ窯青磁2片、
 - ・ ミャンマーもしくは北部タイの青磁⁽¹¹⁾：3片
 - ・ スペイン陶器：1片
- 以上合計124片

総数215片から以上を除いたものがおおよそ福建省の13・14世紀の粗製陶磁に当たるものと見ている。するとなんと総体の半数に近い。このときは調査者が意識的に粗製陶磁に目標を定めたので、客観的にはその比率を大きく割り引かなければならないが、それでもこの時代、粗製陶磁が全体に占めた重要性は十分に確認できるであろう。

このようにあくまでもほんの1部分の調査であり、肝心の記録と照合することもできなかったわけであるが、その範囲で分かったこと、あるいは感想を書きとどめておきたい。

1. 目にした遺物で最も古い貿易陶磁は長沙窯の水注である。他に広東の唐代青磁皿、越州窯青磁の水注がある。
2. 12世紀の日本に多い福建の白磁はほとんどない。同安窯系青磁もほとんどない。
3. 龍泉窯青磁は主要なグループをなしている。12世紀後半からあり、13世紀に増加が目立ち、14世紀にピークに達する。15世紀には激減する。
4. 粗製陶磁の中では莆田窯が種類も数も多く大部分を占める。この中でも高台などのつくりで細分できそうで、窯の相違か時代の相違か今後の課題となる。
5. 浦口窯の碗もかなりある。
6. 北ベトナム白磁碗がある。
(以下はただ存在を確かめた程度のもの。)
7. 染付けは元染めがまとまってあるが明初は途切れ、次に多くなるのは弘治ごろである。
8. 白磁は徳化窯系のものが数箱あった。未調査。
9. タイの鉄絵陶器はあるが、ベトナムの鉄絵があるかどうか調査及ばず。
10. タイとミャンマー？の青磁がある。
11. 陶器の壺や甕、鉢などは大部分日本出土と違う。似たものとしては日本で広東窯のものと考えられているものが少しあった。しかし陶器に関しては、ことに大形のもの未見。

次に簡単に粗製陶磁を紹介しておこう。

写真12-①：B52-1 調査中唯一見つけた同安窯系青磁碗

写真12-②：徳化窯系の鉢、釉は灰色で内底に丸い大きな目跡がある。13世紀。この種のはバンテンギラン、チオマン島のテルニツパとカンボンジュアラ両所でも出土している。

写真12-③：青磁の皿。幅広の高台は⑤に似ている。

写真12-④：輪状釉剥ぎの青磁蓮弁碗。濁った灰オリーブ色の釉である。高台は龍泉に似るが龍泉かどうか確信なし。

写真12-⑤：幅広で低い高台の蓮弁鉢。内底に8個の大きな目跡がある。バンテンギランでも報告がある。長崎県鷹島の元寇関連海底遺跡でも類似のものが引き揚げられていることから13世紀後

半と考えられる。

写真12-⑥：青磁蓮弁碗である。輪状釉剥ぎだが、高台などの細工は粗製とはいえないほど丁寧で整っている。釉は透明性がある。窯は不明。

写真13-①：高台は閩清窯のピロースクタイプに似るが、腰や口縁部のひらき具合は別物である。

写真13-②：閩清窯のピロースクタイプ III 類の形だが、釉は薄く灰緑色を帯びて透明であり、見込みの印花も不確かである。

写真13-③：これも全体としてピロースクタイプ III 類を意識しているように見えるが、高台は斜めに削られ、器壁も一様に厚くて別物である。見込みに凹凸の主題不明のスタンプ文がある。

写真13-④：ピロースクタイプに似た高台の碗。釉は灰緑色で半透明、青磁とすべきか。

写真14-①：内面露胎の碗。高台の様子は浦口窯を思わせる。

写真14-②：大きな底部の碗。外底部や体部の調整は平滑だが、高台はやや雑に面取りしている。莆田窯である。

写真14-③：莆田窯の印花文の 1 例。このように輪状釉剥ぎ部に細かい糸目状の篋痕があるものも見られるようである。写真 4 - ⑲参照。

写真14-④：見込みに印花文のある輪状釉剥ぎ碗。トゥバン出土の写真 6 - ②、図 2 - 5 と同じく、莆田窯と思われる。

写真14-⑤：内面露胎の碗。高台は今帰仁タイプのように斜めに削るが、外底は平らで丁寧に作られている。土には小孔がたくさん開いている。浦口窯、莆田窯とは別の窯のものであろう。

写真14-⑥：今帰仁タイプの内面露胎碗と輪状釉剥ぎ碗。浦口窯であろう。

写真14-⑦：莆田窯と思われる輪状釉剥ぎ碗である。

写真15-①：体部内外面に刻線をいれて菊皿にしている。輪状釉剥ぎ。莆田窯である。

写真15-②：輪状釉剥ぎの鉢。この形には大は口径27cm、小は口径10cm くらいのものである。一番小さい形では鏝がつかず、内面露胎である。莆田窯である。

写真15-③：縦形の炉。内面露胎、外面に篋と櫛で文様が施されている。莆田窯である。

写真15-④：分厚い形作りの青白磁双耳小壺。

写真15-⑤：形作り口ハゲの徳化窯系の白磁が、同じ箱に集められていた。大小各種ある。

このようにフィリピン諸島南部には、中国陶磁は 9 世紀から入っているが、13 世紀から目だって増え、14 世紀には頂点に達した。その大半は龍泉窯青磁と福建省の陶磁、ことに莆田窯製品で占められていることが分かった。14 世紀後半には北部ベトナムの白磁もある。15 世紀には中国陶磁は急激に減少するが、中部ベトナムのチャム陶器やタイの青磁、またミャンマーかといわれる青磁も入っている。全体としては流入が鎮静化して以前の水準に戻ったとも言える。

フィリピンにも一定量の浦口窯の製品が渡っていたことを確認することができたこと。しかしここではわが国よりは格段に莆田窯が重要な位置を占めていた。

調査がごく 1 部にとどまり、記録との照合もできなかったために、遺構別の遺物組成を完成するに至らなかったことは残念である。

2. 東南アジア出土の13・14世紀福建陶磁の意味するもの

以上インドネシア、マレーシア、フィリピンの 6 遺物群を紹介した。これらは調査年度、調査規模、調査者が異なり、比較は容易ではない。しかし与えられた情報からできるだけだけの検討を試みたい。まずこの 6 個の遺物群を通じて 13・14 世紀に盛期が認められることを確認して、これを前提として議論

を進めよう。

さて13・14世紀の出土量であるが、バンテングランとチオマンについては報告からそれなりの数量を割り出すことができた⁽¹²⁾。それによって作ったのが図4のグラフである。バンテングランでは13・14世紀に極めて高い山ができています。これは東南アジア一帯で見られる傾向を示していると仮定しよう。一方チオマン島でこの山が見られないのはカンボンジュアラの遺物が除外されているためである。とすれば、カンボンジュアラの遺物量としてはバンテングランの山に匹敵するほどの分量を想定することが許されよう。カンボンジュアラの遺物の豊富さはこの想定を支持して余りある。

トロランの報告でもいろいろ興味深い数字が提示されているが、ここでは全体をマジャパヒト時代として一括しているため16世紀初までの遺物を含んでいて今の目的には使えず、またグーテコレクションではほんの一部を調査したに過ぎないため強弁はできないが、出土量の推移の状況はこれらの地方でも大差がなかっただろうという感触である。すなわち大航海時代以前の東南アジアの多くの遺跡では13・14世紀に中国陶磁の輸入は最高潮に達したのであった。

この大量の中国陶磁の中でその大きな部分が福建陶磁で占められていたことはグーテコレクションやトロランの状況から明らかにされた。この一まとめに福建陶磁と呼ばれるものが実は時代的にも生産地的にも区分可能であることが、今回中国と日本で行なった共同調査で明らかになった。

東南アジアで調査した6つの遺跡に於いては、福建粗製陶磁について、ごく大まかな年代が与えられていただけである。そこに我々の上記の研究成果を適用してみよう。集めた資料の中、今回の研究対象であった今帰仁とピロースクタイプ、それに前後する龍泉劃花文模倣タイプと莆田窯を取り出して作ったのが表2である。

この表から、我々は13・14世紀で一括りにされていた遺物、あるいは遺跡をより細かく時間的空間的に捉えることができる。バンテングランの盛期は14世紀中ごろまでで、14世紀後半にはトロラン・トゥバンに繁栄が移ったこと、チオマン島では13世紀の末ごろにテルニツパからカンボンジュアラに拠点が移動したこと、フィリピン諸島南部では全体に時代が遅れ、14世紀中ごろから本格的に遺物の流入が始まったことなどである。それはまた取りも直さず浦口から莆田への生産地の移動を示す。今回使用した資料はたまたま手にできたといった類の物で、そこから引き出した結果も信頼度が高いとは言えない。しかし使用できる数字が少ない現在にあってはその有効性を示唆できるだけで十分であろう。今後東南アジアの13・14世紀はここで用いた手法でより詳しく見ることができるだろう。

さて、北宋代の広東陶磁に代わって、福建陶磁が次第に増加を始めるその変わり目にいち早く現れるのが浦口窯や、閩清窯である

らしい。やがてそれらは莆田窯に取って代わられる。14世紀半ばを過ぎると莆田窯が圧倒的であるが、他にも閩清窯のピロースクタイプ皿類や、それに類似したいろいろな粗製陶磁が見られ、福建省内でも製品の集荷範囲は莆田窯や閩清窯に限らず広がった様子が窺われる。原則的には東南アジアへは泉州から、日本へは明州=慶元=明州(宋、

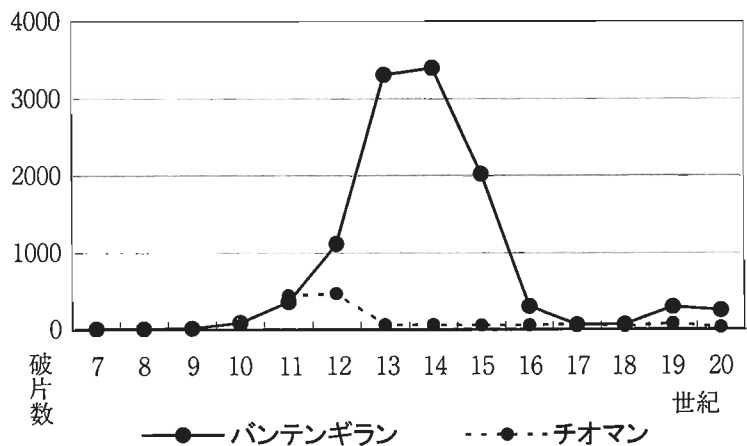


図4 バンテングランとチオマン島における陶磁出土量の推移

表2 調査6遺跡における今帰仁タイプ、ビロースクタイプなどの有無 (○=1個体)

	1. 龍泉劃花文 模倣青磁	2. 浦口窯今帰 仁タイプ	3. ビロースク タイプⅡ類	4. ビロースク タイプⅢ類	5. 莆田窯
Banten Girang	○○	○○○○○○○○ ○	○		○○
Trowulan			○		○○○○○○○○ ○
Tuban		○○		○	○○○○○
Tioman Teluk Nipah	○○○				
Tioman K. Juara	○	(○○?) ○		○類似形あり	(○○○○?) ○○
Guthe collection	蓮弁碗模倣から で劃花文なし。 同安1あり	(○○?)		類似形各種あり	○○○○○○○○ ○○○○○○他 多数

1. 龍泉劃花文を模倣した青磁碗：12世紀後半から13世紀
2. 今帰仁タイプ：13世紀後半から14世紀中ごろ
3. ビロースクタイプⅡ類：13世紀末～14世紀初から14世紀中ごろ
4. ビロースクタイプⅢ類：14世紀中ごろから15世紀前半
5. 莆田窯：今帰仁城跡Ⅴ層（14世紀前半から中ごろ）から出土が見られる。

元、明) から出航したとされる時代に、東南アジア出土と日本出土では出土遺物が異なるのが当然だが、一口に東南アジアといっても地方によって差異がある。そうした差異の性質、成因を考究することが今後の課題である。

今回六つの遺物群を調査して、フィリピンを除いて、この地方では中国陶磁が13世紀末ごろに突然急激に増えるということがわかった。それは取りも直さず大きな歴史的変動が起こったということである。それはインドネシア・マレーシア地方での元寇とマジャパヒトの建国に起因すると思われる地域の再編である。バンテンギラン衰微からトローランの繁栄、チオマン島ではテルニツパからカンボンジュアラへという大小の地方拠点の移動はこうした広域に及ぶうねりの中で起こったものであろう。ひるがえって本稿を起こすきっかけとなった琉球での福建陶磁の出土もこのアジア全体を巻き込んだ大きな流れの中で起きたものと捉え得るのではないか。東南アジアでの状況を眺めると、琉球の船が直接中国に行ったか行かなかったかで終わる問題ではあるまいと思う。

実は筆者は先年、本稿でもたびたび引用したインドネシアで活躍中の二人の研究者、デュボワザとハルカンチニンシ両氏から、東南アジアの遺跡でこうした輪状釉剥ぎ碗が多く出土すること⁽¹³⁾、多い時は出土陶磁の3分の1にもなることを聞かされ、それらが琉球の『歴代法案』に記される青磁ではないだろうかとの問題を提起されたことがあった。

『歴代宝案』によれば琉球から当時の最大の交易相手暹羅国へは1425年から1570年の間に約60隻の船が派遣されているが、計26回約59,000個の青磁が礼物として送られているという(森村健一1995, p. 78)。一方ジャワへは1430年から1442年の間に6回の派遣が記録されている(高良倉吉 1998, p. 95)。このことからかなりの数量の青磁がジャワに入ったに相違なく、各地で多量に出土する輪状釉剥ぎ碗はこの一部と考えられないかという趣旨の問題である。

それに対して筆者は、これらの輪状釉剥ぎ碗は多くは14世紀と考えられること、琉球の中継貿易は

文献上15世紀によく本格化する。ことに問題の遺船を記録した『歴代宝案』は1424年以降の様子を伝えるものであるし、ジャワについての記録も15世紀の30～40年代だから時代が合わない。品質からしても輪状釉剥ぎ碗を船の脇荷と考えるなら別だが、少なくとも『歴代宝案』の記す「礼物」とは考えられない。琉球で出土する15世紀の輪状釉剥ぎ碗は東南アジアで出土するそれと重なる部分は多くないと思うなどなどと答えてきた。

しかしながらこれが『歴代宝案』などの記録が残される以前の問題とすれば話は別である。現に今回の研究で13・14世紀の東南アジアと琉球に共通して見られる福建粗製陶磁が多く検出された。これが何を意味するかは今回十分に究明できなかった。さらに考究すべき大きな課題である。

注

- (1) 実際に汀溪窯の遺物を見たとき、日本出土のいわゆる同安窯青磁が汀溪窯の遺物とは異なるという印象を受けた日本人は多い。筆者もその一人であるが、以下の書を見てもますますその感を強くしている。汀溪窯ではわが国で出土する一般的ないわゆる同安窯青磁と比べて、外底と高台の削り出し方が整っている。傅宋良、林元平『中国古陶瓷標本福建汀溪窯』広州 2002；亀井明德『福建省古窯跡出陶瓷器の研究』1995
- (2) 小野正敏「15, 16世紀の染付け碗、皿の分類とその時代」『貿易陶磁研究』NO. 2、日本貿易陶磁研究会、1982年にトローラン博物館所蔵として青花碗3個、赤絵碗1個の写真がある。今回の報告書の計数に入っているかどうかは不明。
- (3) 三上次男「ベトナム陶磁と陶磁貿易」『世界陶磁全集16 南海』小学館 1984 p. 228にもトゥバンとトローラン両遺跡で得られた遺物の生産国ごとの数値が紹介されている。やはりベトナム陶磁の比率は大きい。
- (4) 金沢陽「インドネシア・トゥバン海域引揚げの青磁片」『出光美術館研究紀要』第14号（未刊、2009年1月出版予定）。これらの陶片閲覧に際して金沢陽氏にお世話になった。ここに記して謝す。
- (5) たとえばスマトラ島の東岸パールスは12世紀のあるときに突然終わった遺跡とされるが、ここには11世紀中ごろから12世紀前半ごろまでの中国陶磁としては広東窯のみで、福建窯のものはないという。Claude Guillot ed. *Histoire de Barus, Le Site de Lobu Tua II, Étude archéologique et Documents, Cahier d' Archipel 30, 2003, Paris* 参照。筆者は『金大考古』第55号2006年12月28日に1部抄訳した。
- (6) Roxanna Brown and Sten Sjostrand, *Turiang: a Fourteenth-Century Shipwreck in Southeast Asian Waters*, Pacific Asian Museum, 2001 p. 51 and p. 58. 筆者は著者からこの碗の断面の写真を送ってもらって形状を確認した。
- (7) この陶器は次の文献で扱っているものと同じと思われる。山本正昭「泉州窯系磁器から見た琉明関係—消費地からの視点で—」『貿易陶磁研究』NO. 24, 2004
- (8) 田辺昭三監修 『—中国・南海沈船文物を中心とする—はるかなる陶磁の海路展』図録 朝日新聞社1993 p. 33. ここでは生産窯について言及はない。
- (9) ビロースタイプが閩清窯だけでなく福建の他の窯でも焼かれたことは本報告書第3章第2節で報告されている。筆者は2007年広西省考古研究所で同省北流窯の南宋といわれる資料が、外面からのちょっと見ではビロースタイプⅡ類に見えて驚いた。内面の印文は全く別種であったが、広範囲に及ぶ器形の時代的な流行が在るのではないかと感じたことではあった。
- (10) このコレクションについては、ワシントンのスミソニアン協会、サックラー美術館のルイーゼ コート、ミシガン大学、人類学博物館館長カルラ シノポリ両氏のご教示を受けた。なお次のサイトでも紹介されている。<http://homepages.uni-tuebingen.de/Alfred.pawlik/Solheim/Bulletin.html>
- (11) この種の青磁は最近ではミャンマーのトワンテ窯と報告されることが多いが、この窯を調査した津田武徳氏は否

定的である。

(12) Dupoizat et al 1994の137～138ページの数表から作成。たとえばX-XII世紀302個をX、XI・XIIの各世紀に等配分するという方法をとった。今回の我々の調査の成果を以って分類をやり直せば山の形が変わることは必然であるが、13・4世紀が突出することは変わらないだろう。

(13) 輪ハゲの粗製陶磁が多いことは次のような論文でも繰り返し指摘されている。

Marie-France Dupoizat, La céramique importée à Angkor : etude preliminaire. Arts Asiatiques, tome 54 -1999

Naniek Harkantiningih, Le site de Leran a Gresik, Java-Est *Étude archéologique préliminaire*, Archipel 63, 2002

文献

森本朝子 1991 「マレーシア・ブルネイ・タイ出土の貿易陶磁 11世紀末—14世紀初—日本出土の貿易陶磁との差異—」『貿易陶磁研究』、NO. 11、日本貿易陶磁研究会

1993 長崎県鷹島海底出土の「元寇」関係の磁器について『法哈囉』第2号、博多研究会

Marie-France Dupoizat & Naniek Harkantiningih, 1994 LA CERAMIQUE IMPORTEE, *Banten avant l' Islam. Étude archéologique de Banten Girang (Java-Indonésie)* 932?-1526, Paris.

2007 *Catalogue of the Chinese Style Ceramics of Majapahit Tentative Inventory*, Cahiers d' Archipel

桜井由躬雄、石沢良昭、桐山昇1993『東南アジア』地域からの世界史—4、朝日新聞社

Abu Ridho & Wayono M., 1983 The Ceramics Found in Tuban, East Java, 『貿易陶磁研究』NO. 3、日本貿易陶磁研究会

SACS (次の機関の略) Southeast Asian Ceramic Society(West Malaysia Chapter) 1985, *A Ceramic Legacy of Asia's Maritime Trade Song Dynasty Guangdong Wares and Other 11th to 19th century Trade Ceramics found on Tioman Island. Malaysia*, SACS

森村健一、1995「日本における遺跡出土のタイ陶磁器」、『東洋陶磁』23. 24、東洋陶磁学会

高良倉吉、1998『アジアの中の琉球』、歴史文化ライブラリー47、吉川弘文堂

John Stevenson & John Guy, 1997 *Vietnamese Ceramics A Separate Tradition*, Art Media Resources with Avery Press

謝辞

本稿ではマレーシアやインドネシア、そしてアメリカと日本に所蔵されている資料を用いた。古いものは1989年新しくは2007年までの調査で収集した資料である。その間大変多くの方にお世話になったがやっとここにこのような形でまとめることができ喜んでいいる。ここにお世話いただいた方がたの名を記して感謝の意を表す。出会いの順に、当時の所属とともに記す。

Othman Yatim (National Museum, Kuala Lumpur), Khoo Joo Ee (Museum of Asian Art, University of Malaya, Kuala Lumpur), Mohamad Mokhtar B. Abu Bakar (Pahang Museum, Pahang), Naniek Harkantiningih (Research Center for Archaeology, Jakarta), Marie-France Dupoizat (Archipel, Paris) Louise Cort (Freer Gallery of Art/Arthur M. Sackler Gallery, Smithsonian Institution, Washington), Karla M. Sinopoli (Museum of Anthropology, Michigan University, Ann Arbor). 金沢陽 (出光美術館、東京)。そして筆者をはじめ東南アジアに連れ出してくださった岡田茂弘先生を初めとする調査団の方々。なお、図2-2および図3-12はこの調査団で作成したものである。

84～88は Dupoizat et al. 1994 よりの
コピー。

1はジャカルタの考古学研究所所蔵

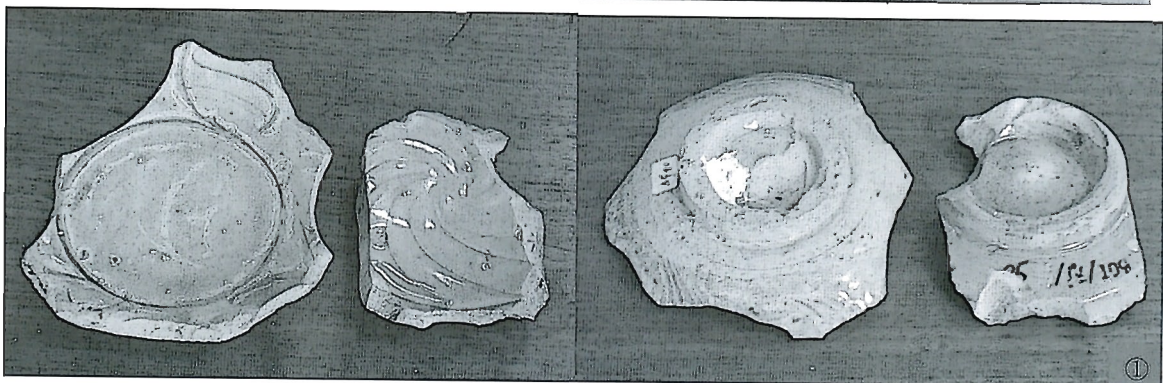
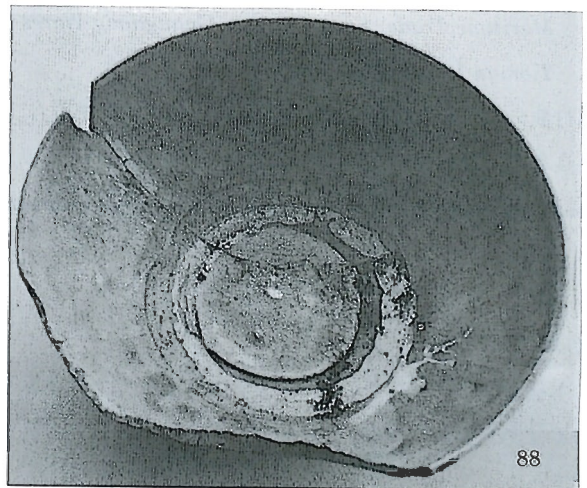
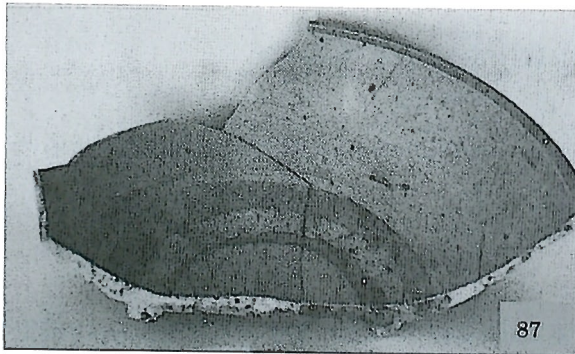
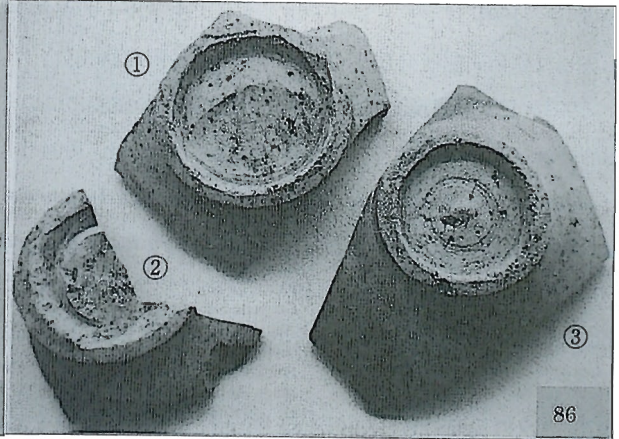
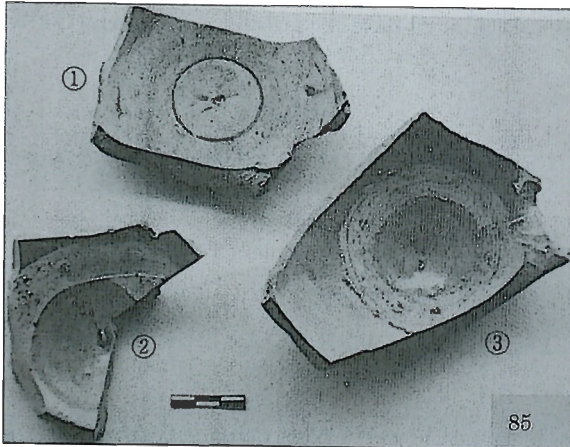
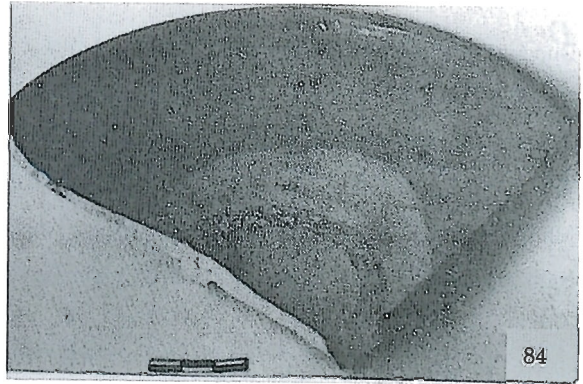


写真1 バンテンギラン出土の福建産粗製陶磁(1)

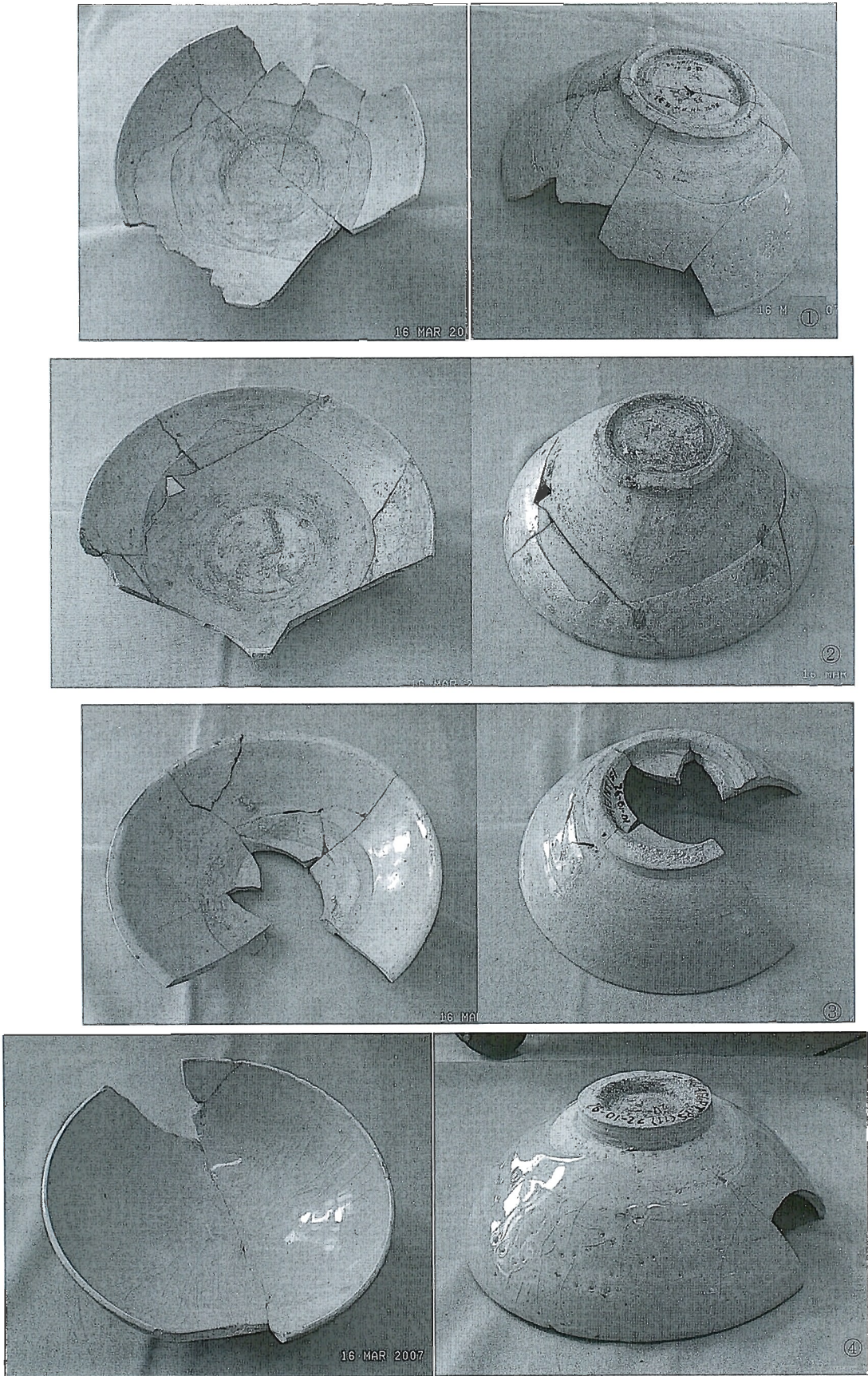


写真2 バンテングラン出土の福建産粗製陶磁(2)
 ジャカルタ考古学研究所蔵

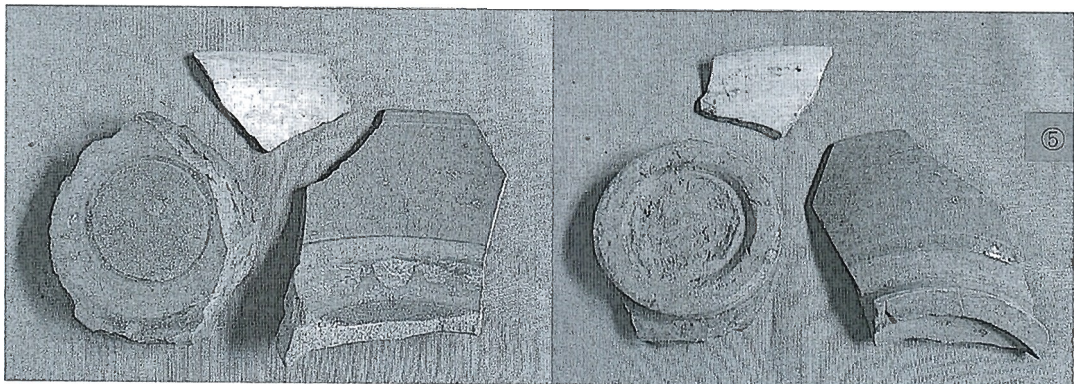
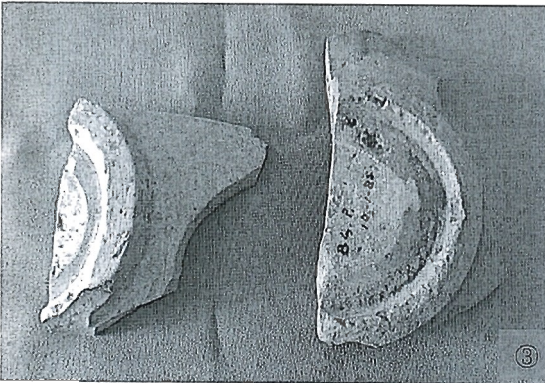
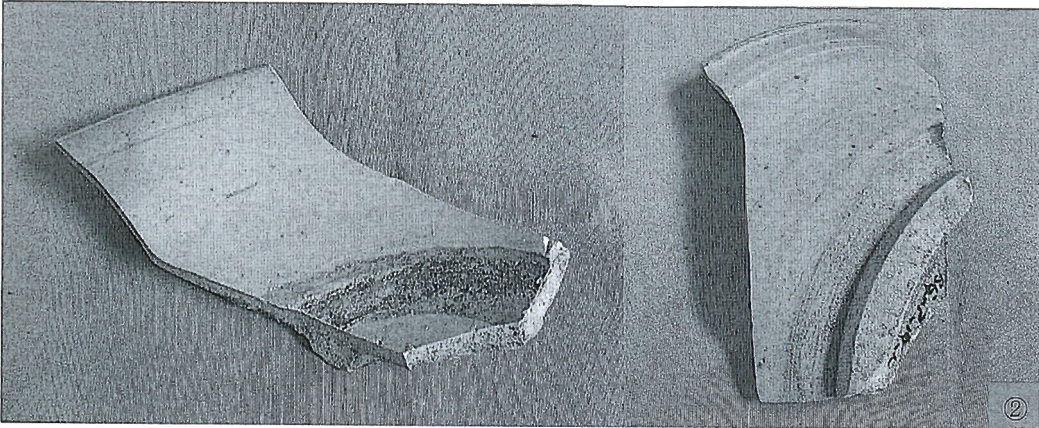
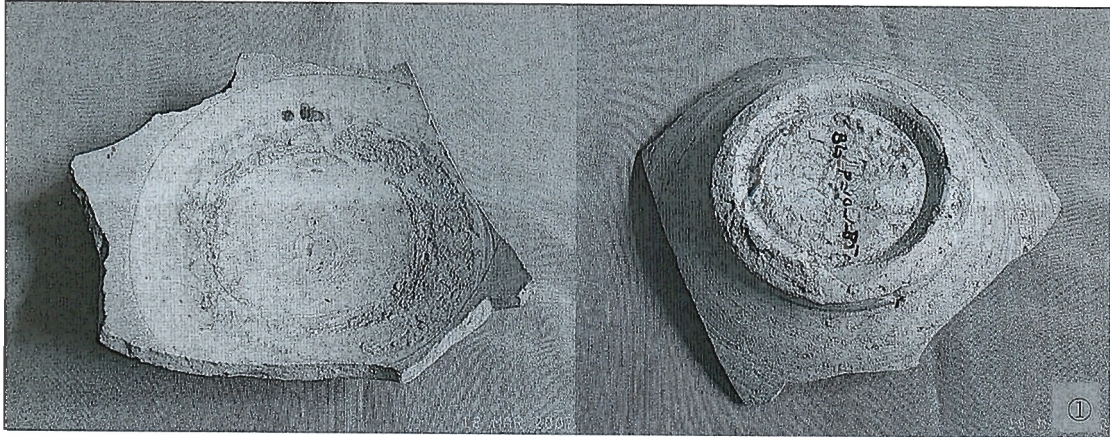
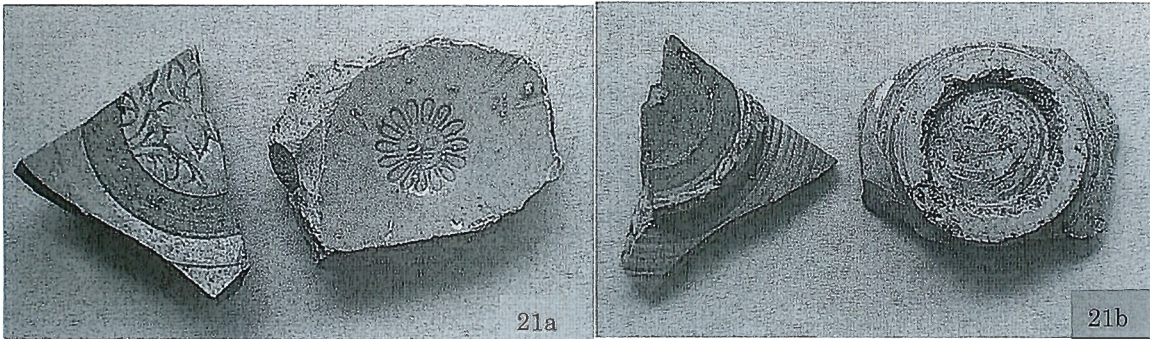
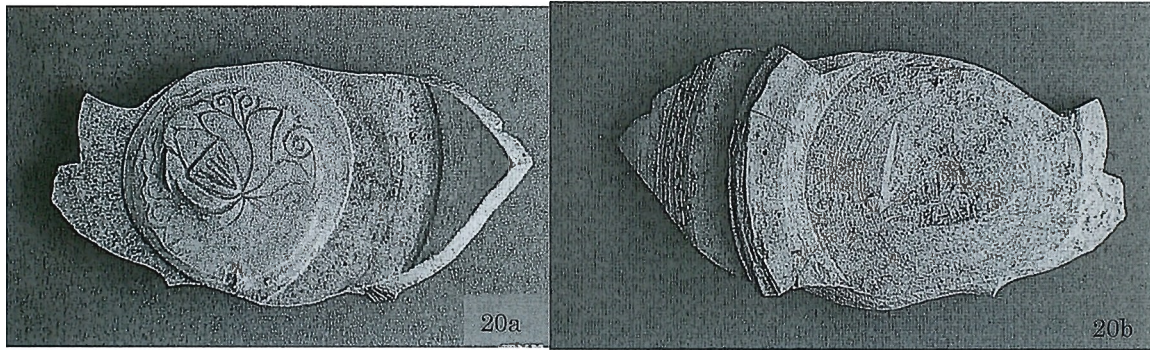
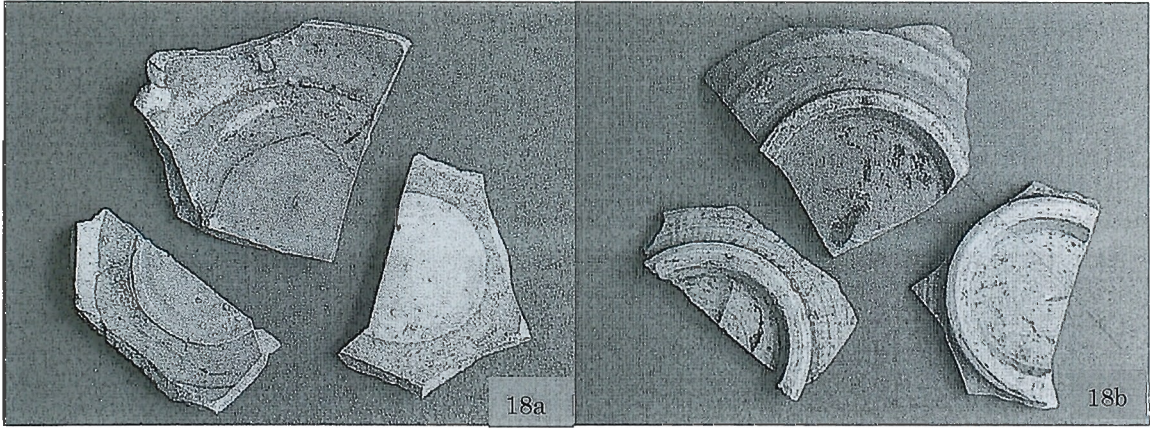


写真3 バンテンギラン出土の福建産粗製陶磁 (3)
バンテン遺跡博物館所蔵



本ページの写真は Dupoizat et al. 2007
よりのコピーである。

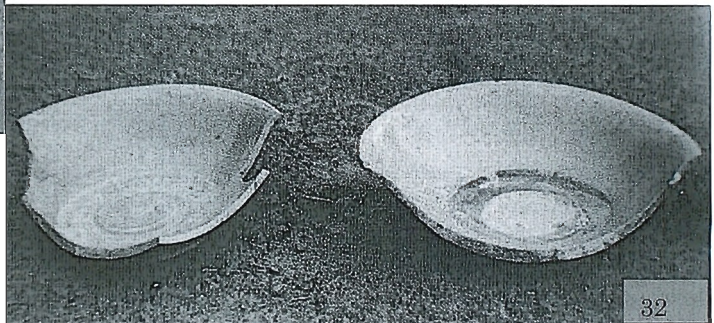


写真4 トローラン出土の福建産粗製陶磁

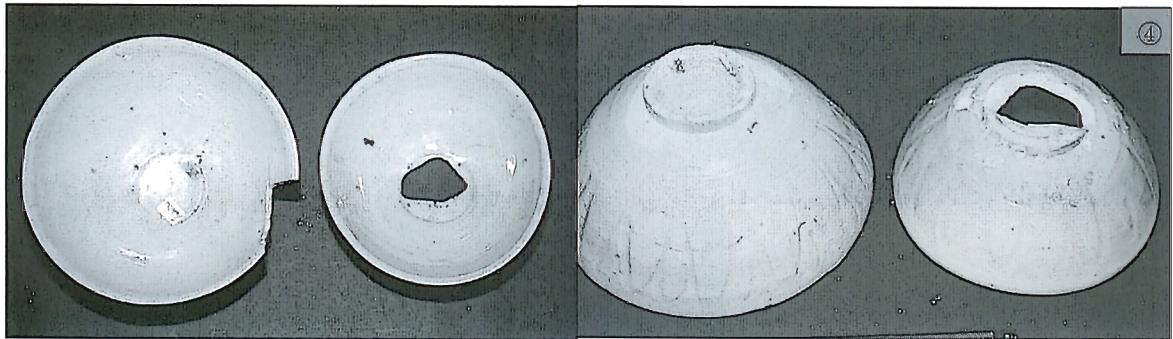
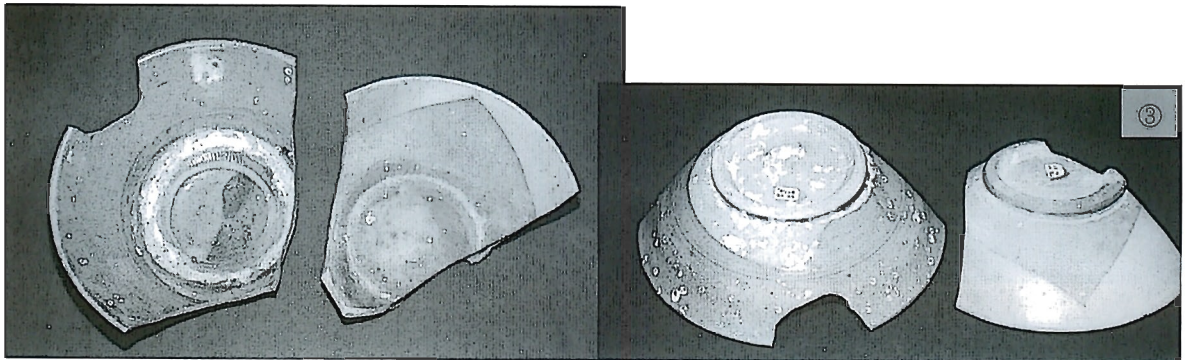
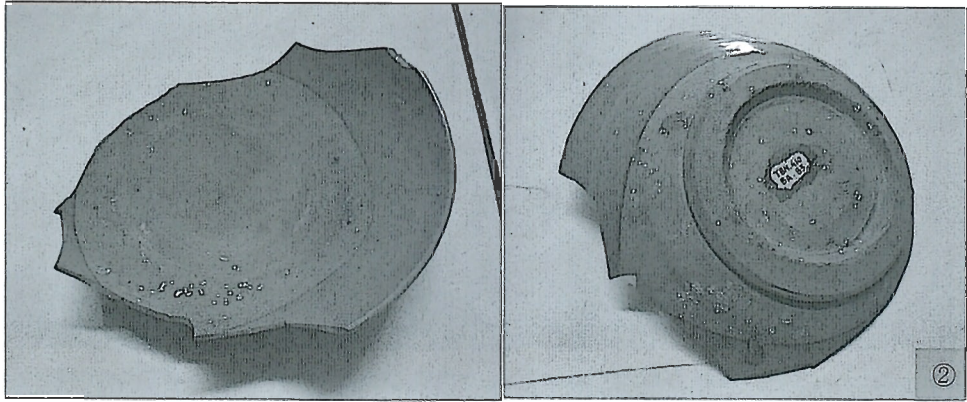
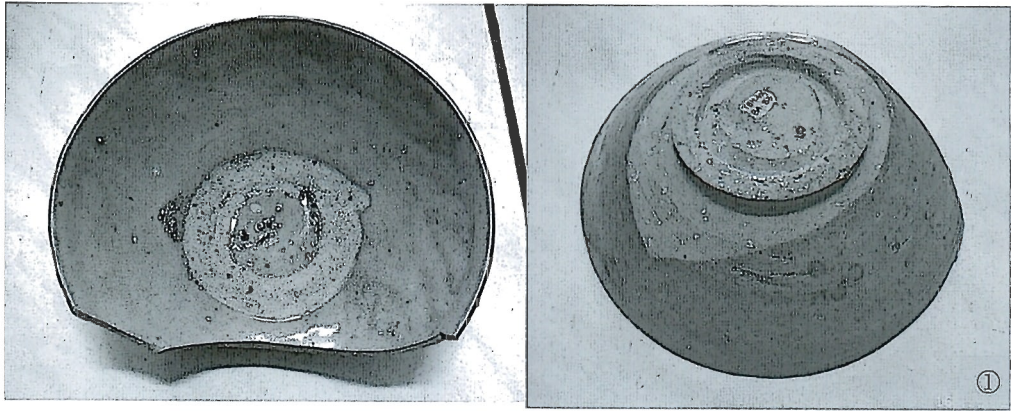


写真5 トウバン出土の福建産粗製陶磁(1)
ジャカルタの考古学研究所蔵

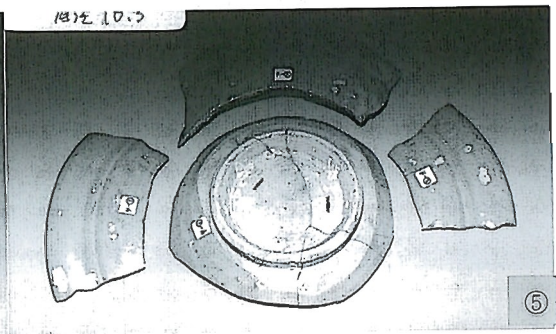
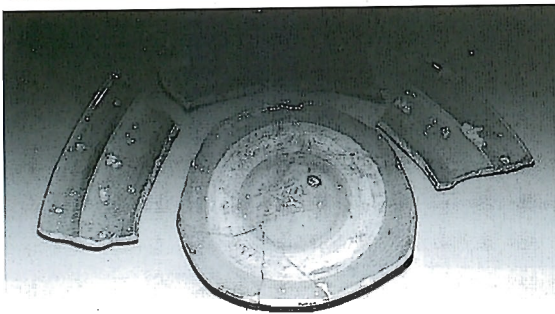
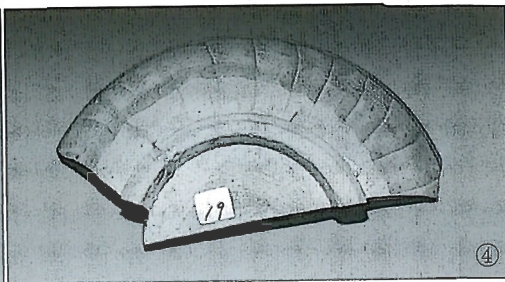
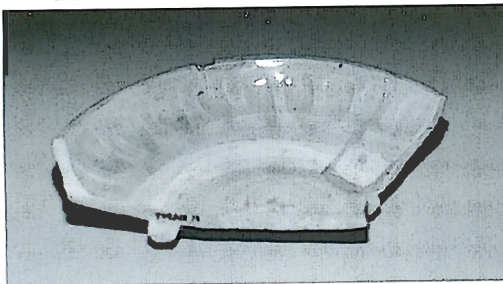
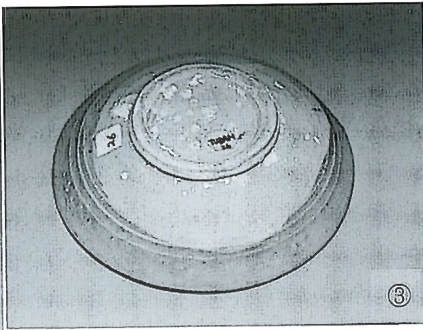
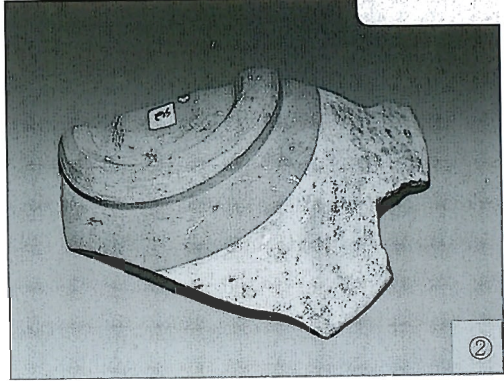
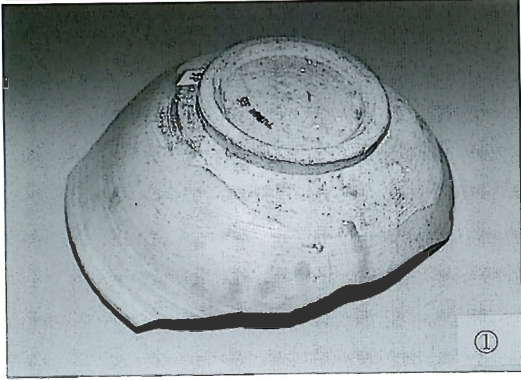
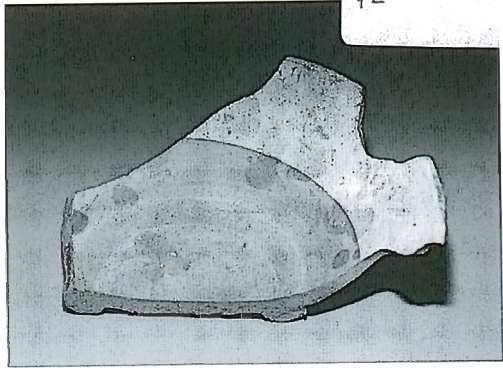
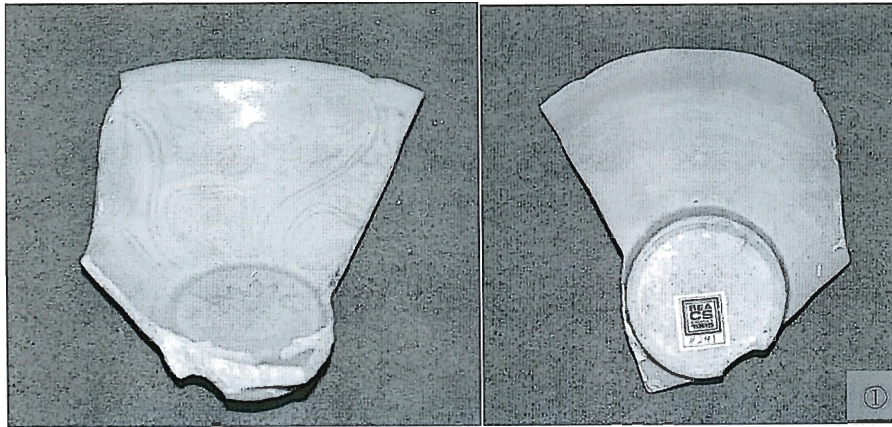


写真6 トウバン出土の福建産粗製陶磁(2)
出光美術館所蔵



1～4 はセニアジア美術館所蔵。
5 はネガラ博物館所蔵。

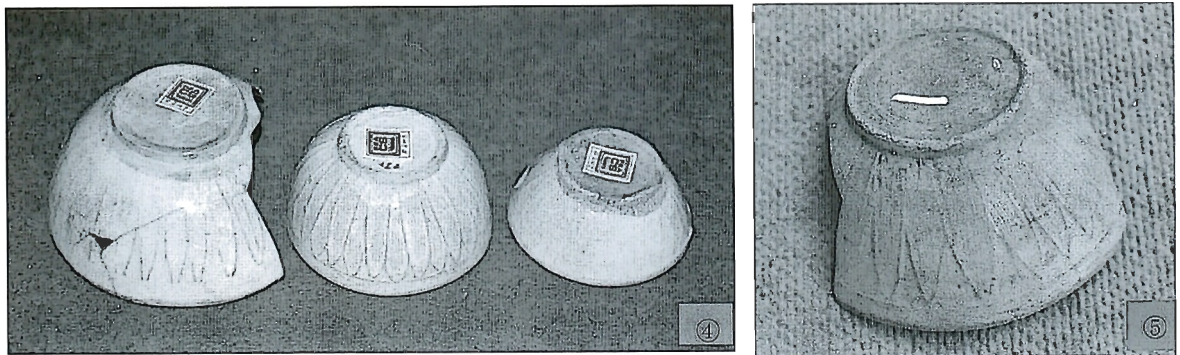
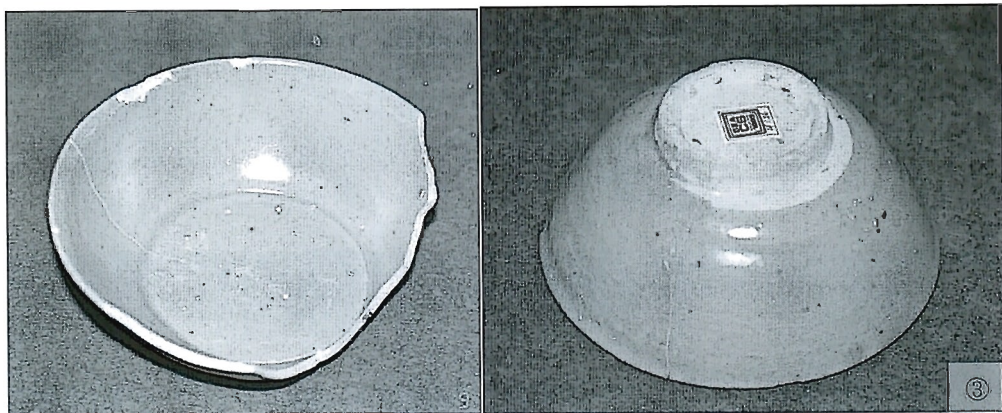
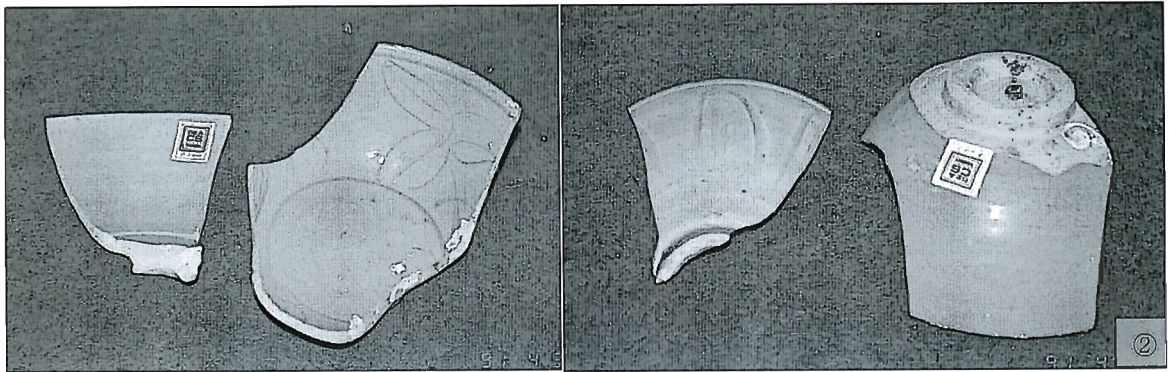
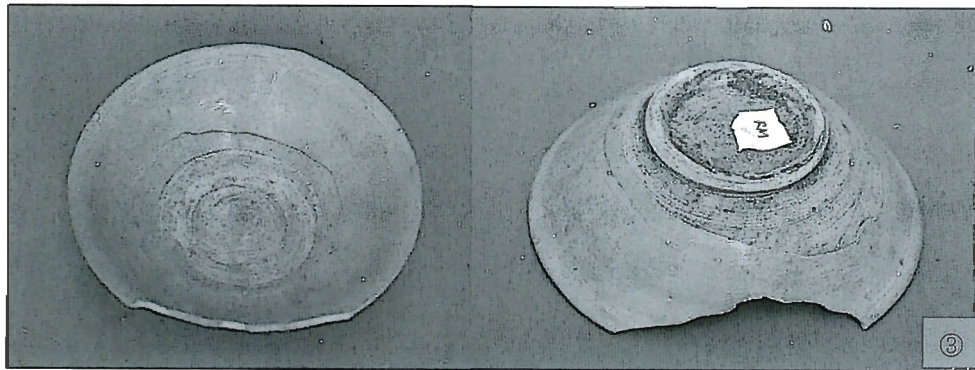
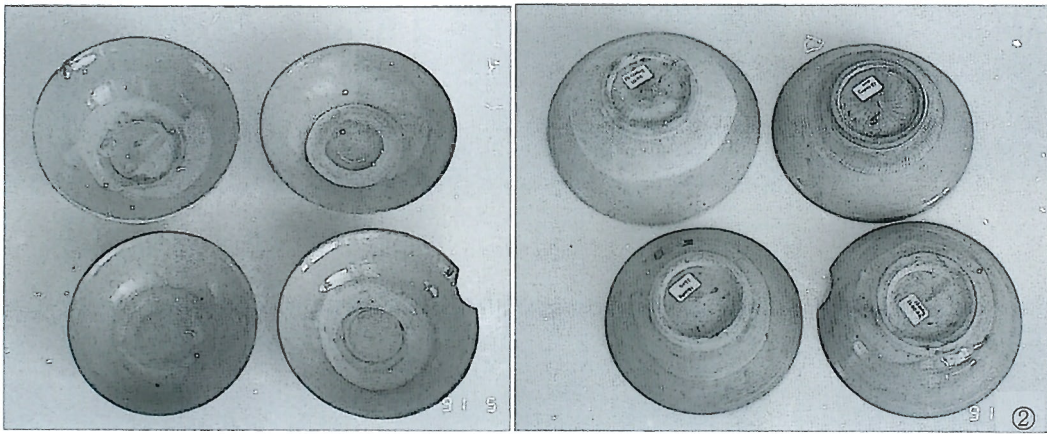
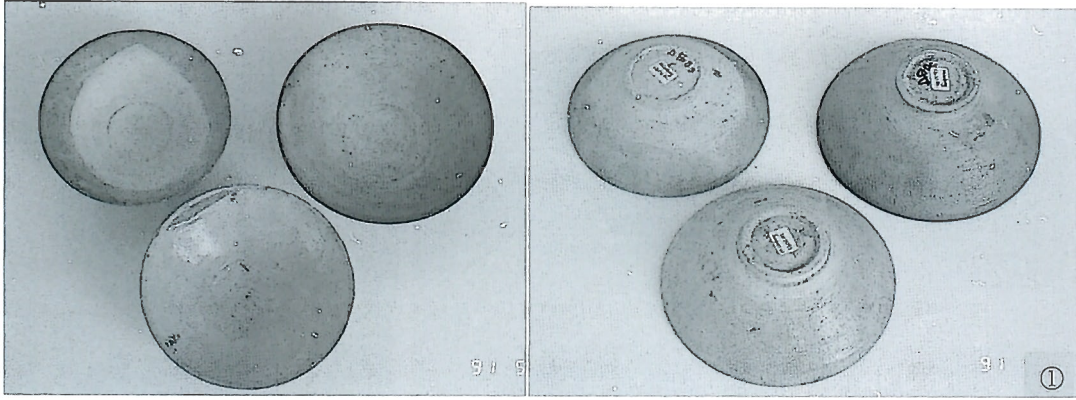
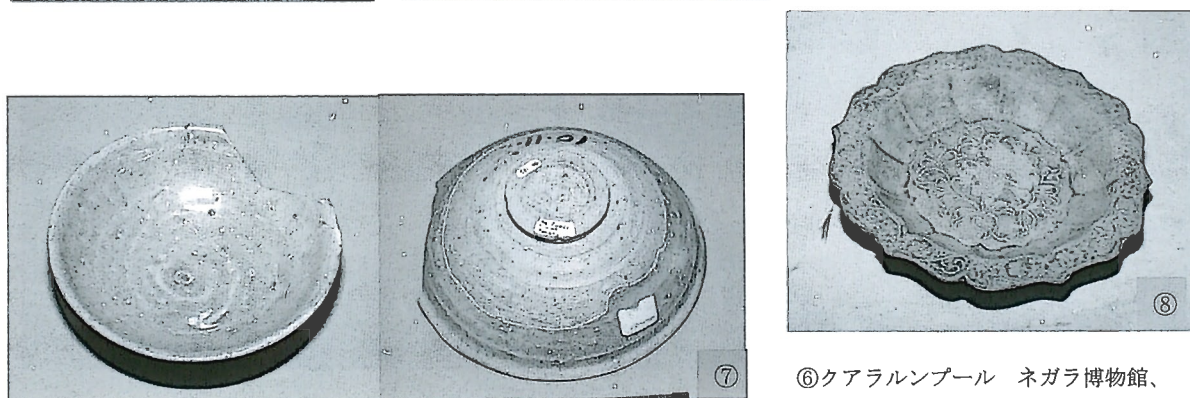
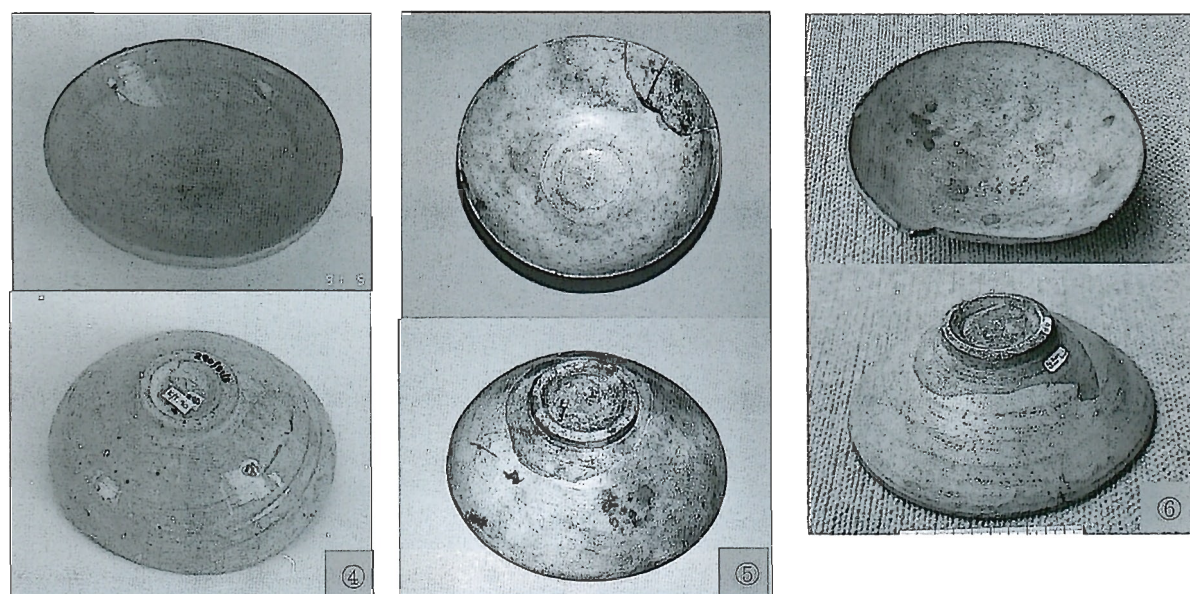
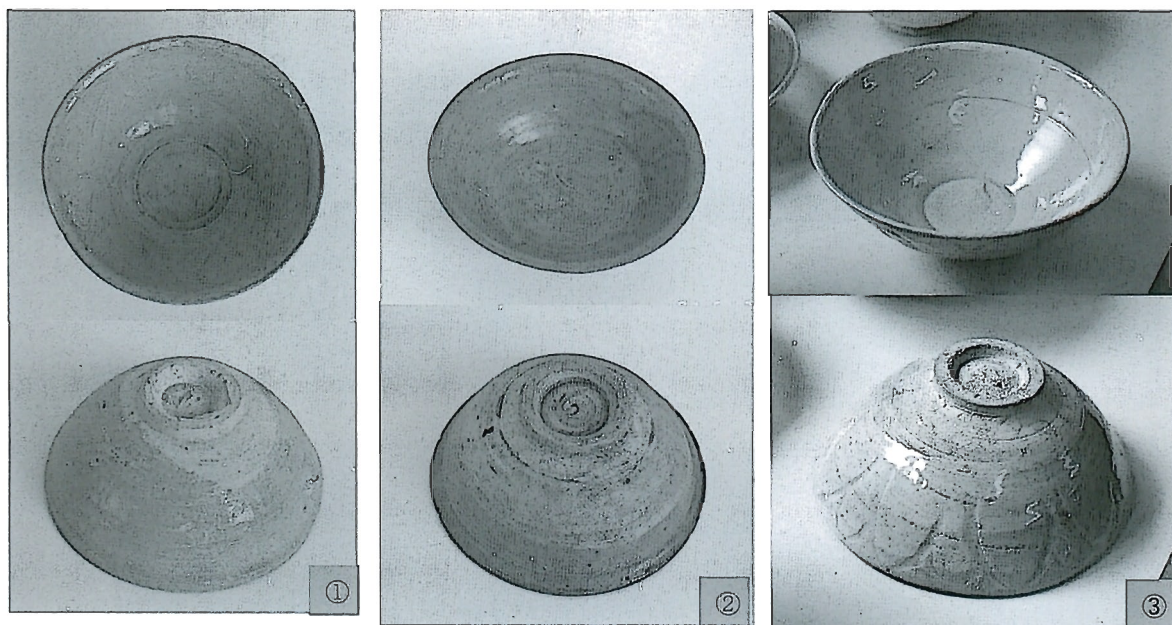


写真7 チオマン島テルニッパ出土福建産粗製陶磁



1～3はバハンのアプバカル博物館所蔵、4・5は個人蔵

写真8 チオマン島カンボンジュアラ出土の福建産粗製陶磁 (1)



⑥クアラルンプール ネガラ博物館、
他はパハン アブバカル博物館所蔵

写真9 チオマン島カンポンジュアラ出土の福建産粗製陶磁(2)

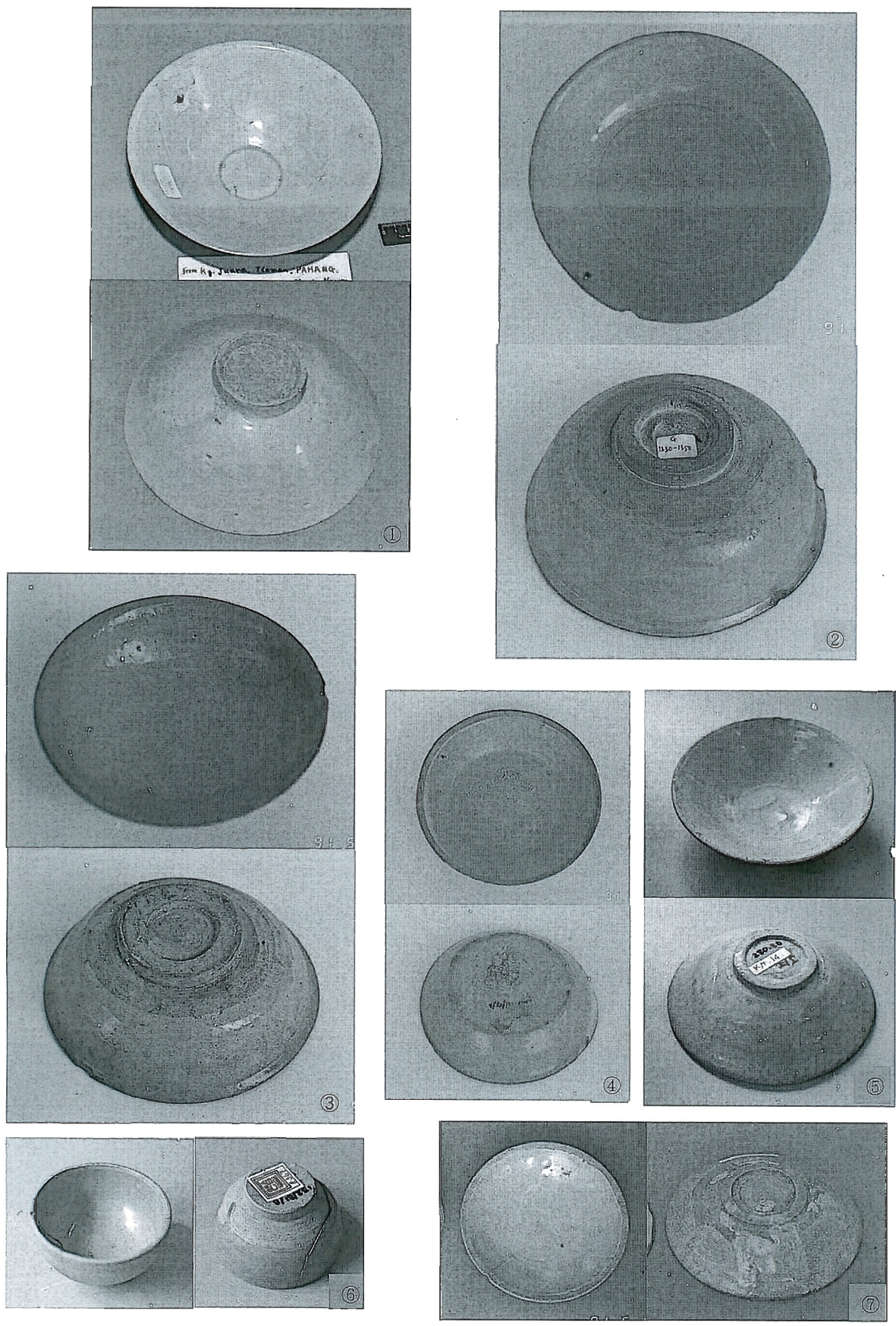


写真10 チオマン島カンボンジュアラ出土の福建産粗製陶磁 (3)

①クアラランプール ネガラ博物館、他はパハン アブバカル博物館所蔵

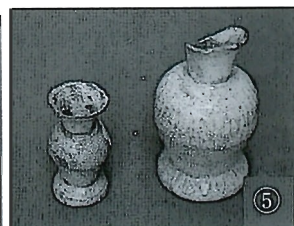
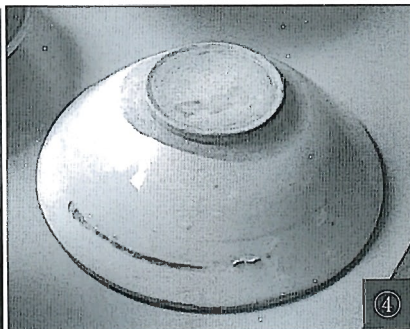
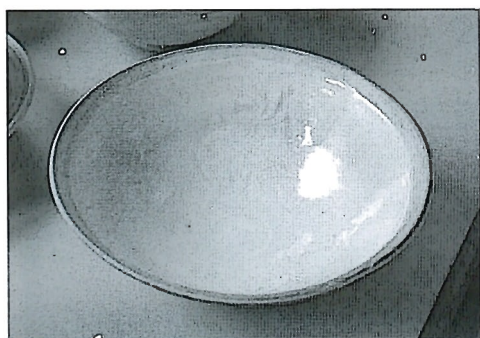
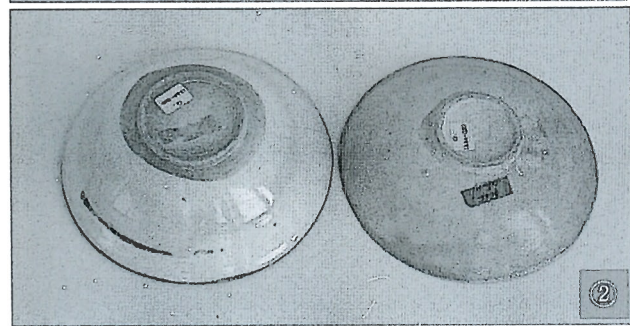
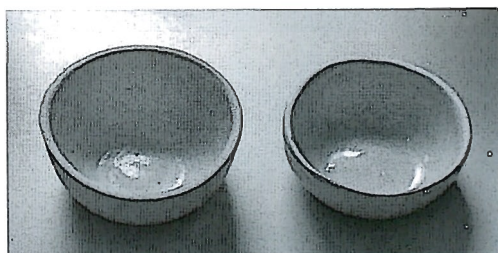
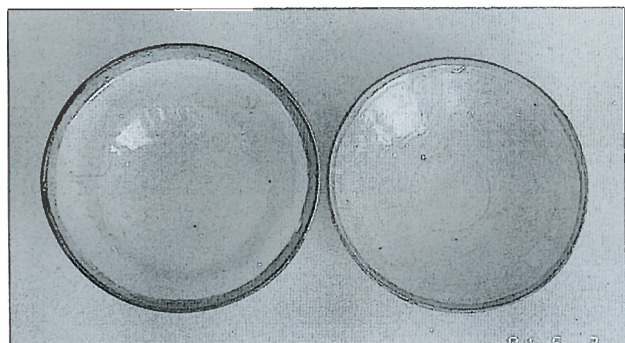
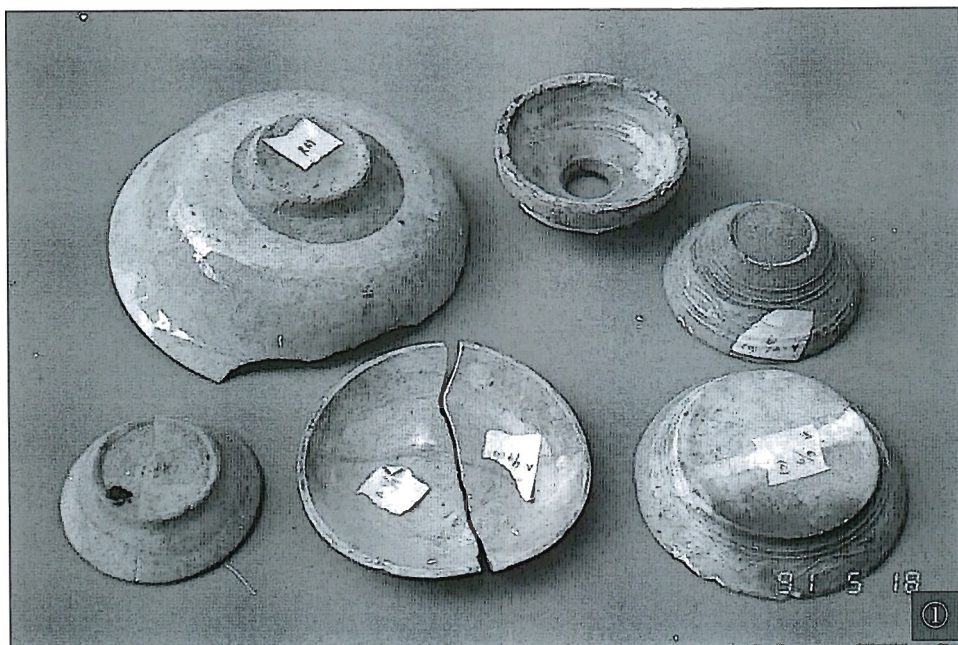


写真11 チオマン島カンボンジュアラ出土の福建産粗製陶磁 (4)
 バハン アブバカル博物館所蔵

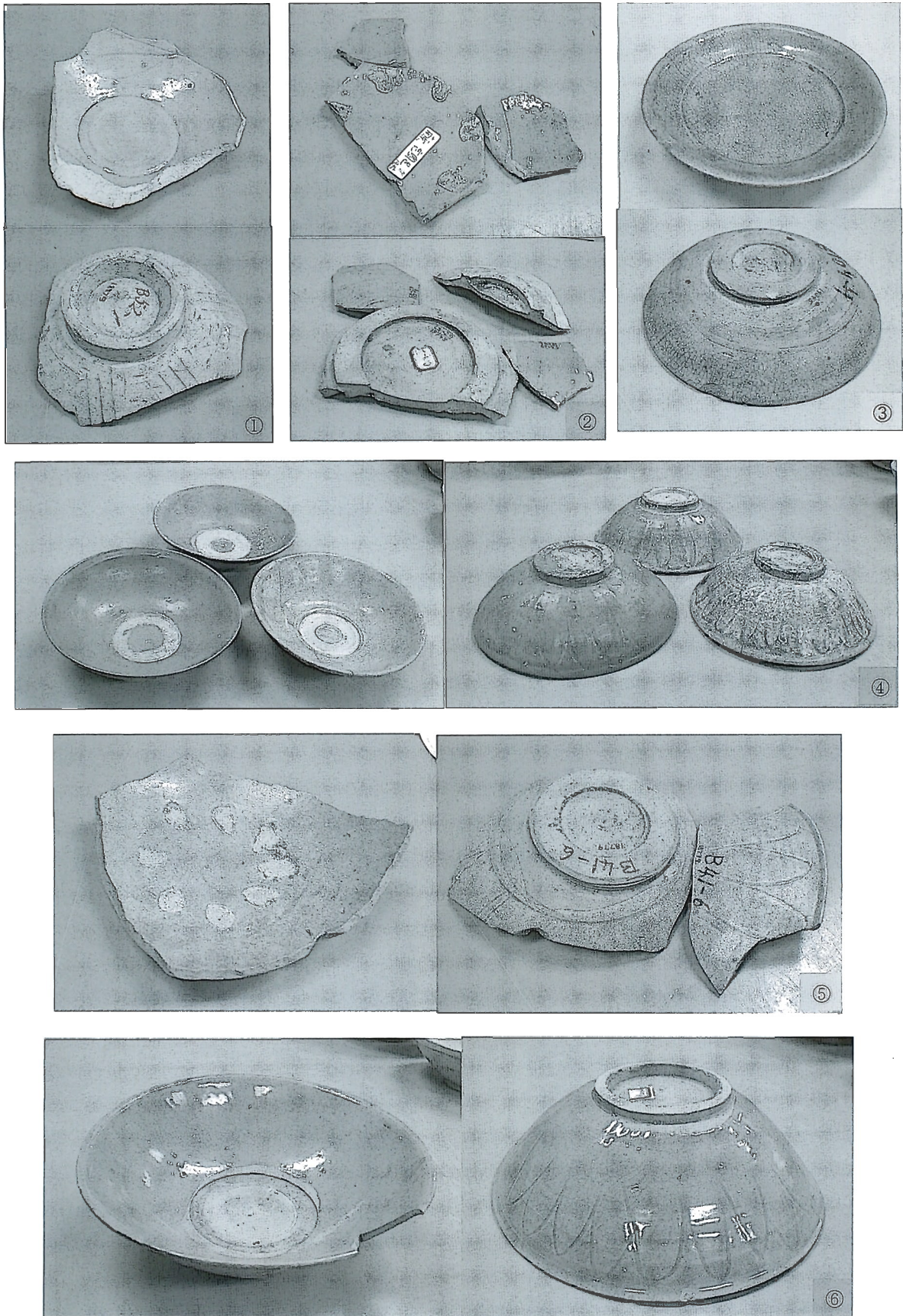
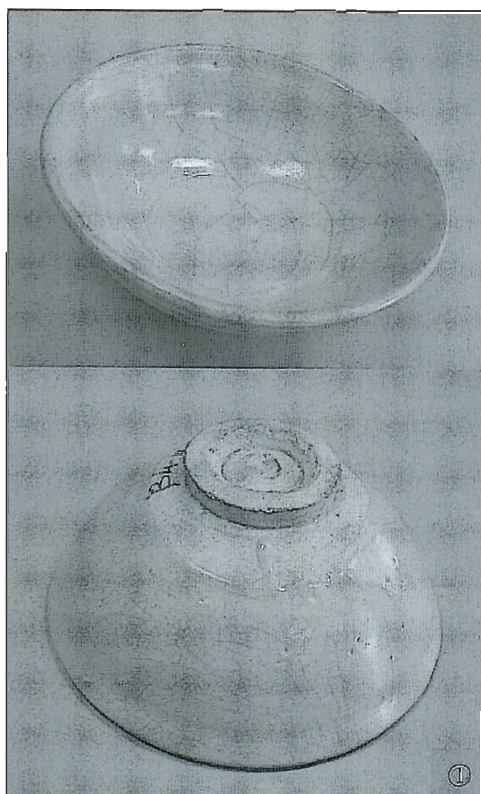
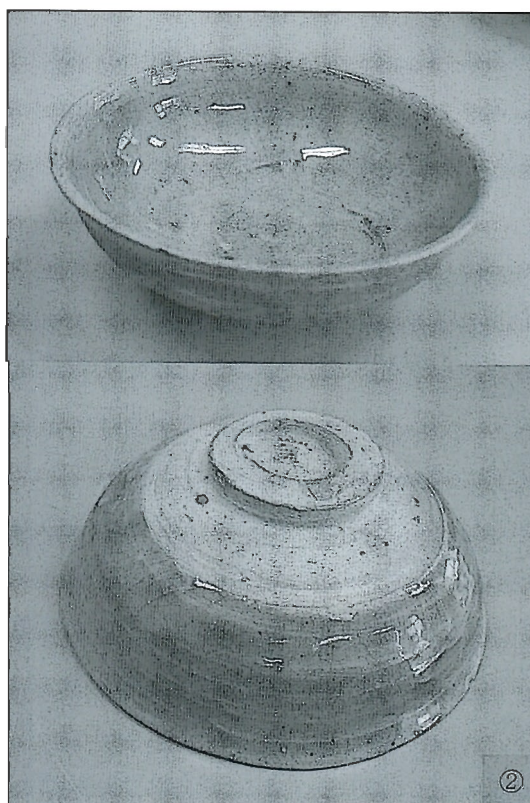


写真12 フィリピン諸島南部出土の福建産粗製陶磁 (1)

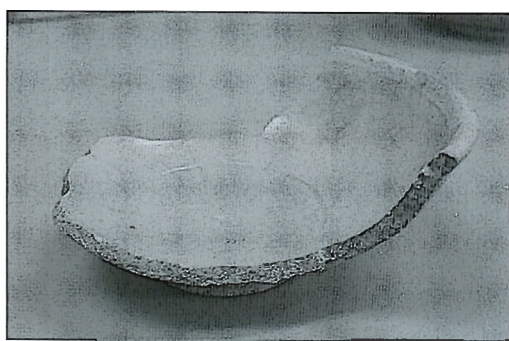
ゲーテコレクション



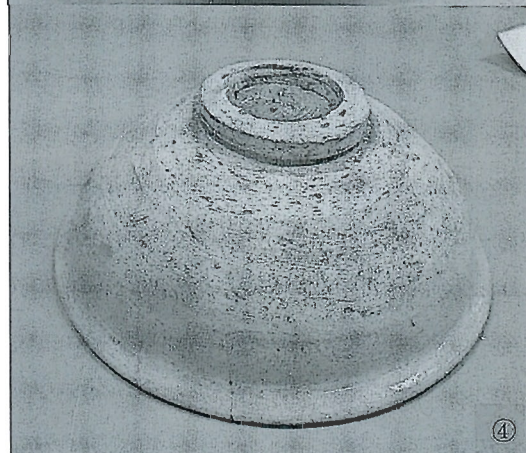
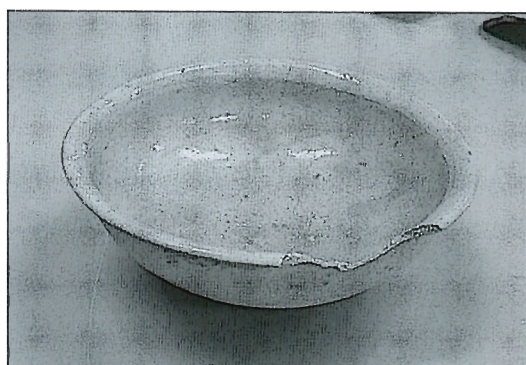
①



②



③



④

ビロースクタイプに似た碗各種がある。

写真13 フィリピン諸島南部出土の福建産粗製陶磁 (2)

グーテコレクション



写真14 フィリピン諸島南部出土の福建産粗製陶磁 (3)
 ゲーテコレクション

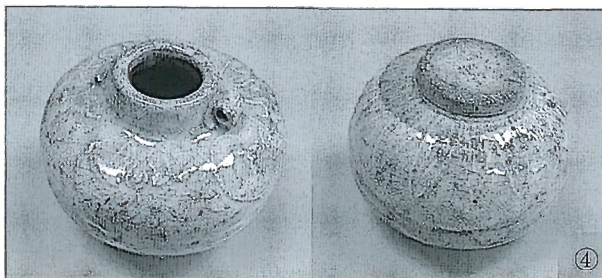
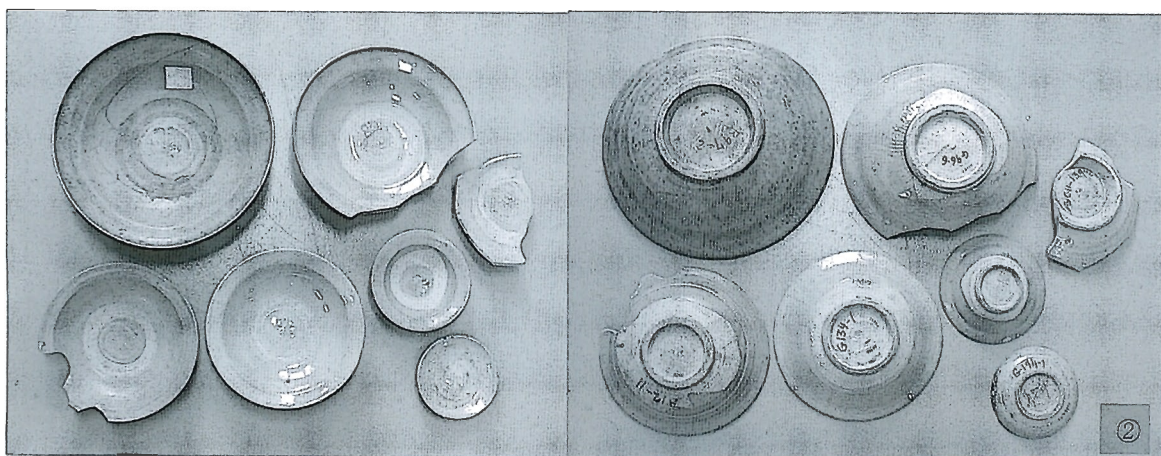
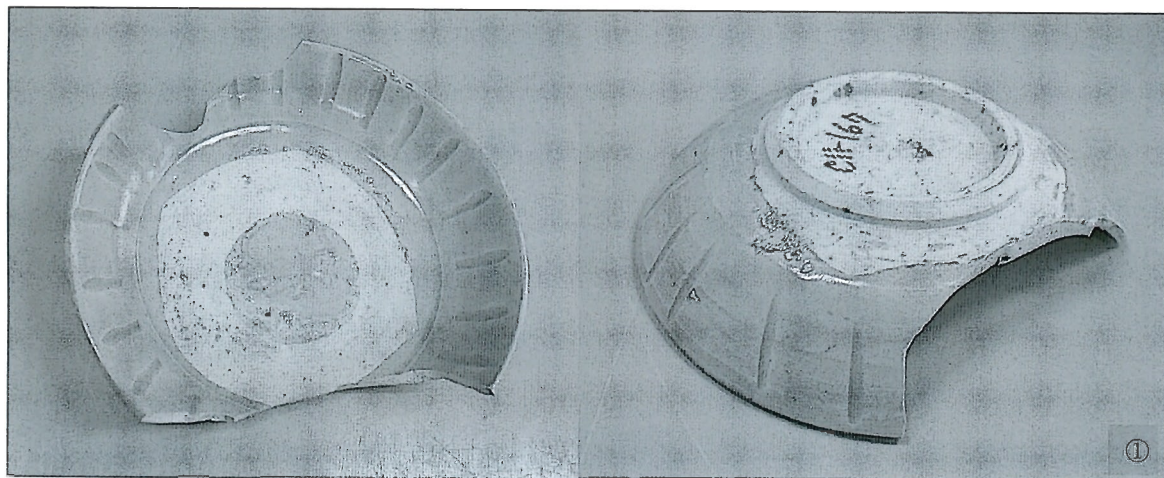


写真15 フィリピン諸島南部出土の福建産粗製陶磁 (4)
グーテコレクション

ふたつの「琉球」

—13・14世紀の東アジアにおける「琉球」認識—

大田由紀夫
鹿児島大学OTA Yukio
Kagoshima University

はじめに

宋元期の「琉球」（文献上では「流求」「瑠求」など様々に記されるが、以下基本的には「琉球」に統一する）に関する史料は限られるため、これを専ら対象にした研究はあまりない。また、『隋書』巻81「流求国伝」以来、その所在地については、台湾説、沖縄説、台湾+沖縄説などをはじめとして様々な議論が存在しており、各論者によってその見解は大きく異なる。よって、宋元期の史料に散見する「琉球」の位置比定も困難をきわめる⁽¹⁾。そのような中、この問題に関する数少ない専論ともいえるべき研究として、曹永和（曹1963・1988）、梁嘉彬（梁1972）という台湾の研究者の論考があげられる。

曹永和は、宋元期の「琉球」認識にはふたつの異なるイメージが混在していたと指摘する。ひとつは「琉球」＝「野蛮な島」という観念で、いまひとつは福建・広東などの華商の往来する交易相手という認識であり、前者が台湾、後者がのちの「琉球（＝沖縄）」にそれぞれ対応していたと論じる（曹1988・2001）。また梁嘉彬は、宋元期の「琉球」はおおむね現在の台湾を指すが、宋元交替期などには台湾と沖縄とが混同されることもしばしば起こり、その場合の「琉球」とは「東方に浮かぶ島の汎称」に過ぎないとする（梁1972）。

曹・梁らの研究は、宋元期の「琉球」＝台湾と捉える見解が優勢を占める現状のなか、乏しい関連史料の詳細な検討を通して、通説的理解では説明困難な要素が当時の「琉球」認識に含まれていたことを示唆する貴重なものである。本稿は、これらの先行研究の成果を踏まえ、13・14世紀に記された諸史料より窺える「琉球」認識について考察する。

1. 同時代史料からみた「琉球」—宋元中国の「琉球」認識—

まず宋元期には「琉球」＝中国の東南海にある僻遠の島というイメージのあったことが、当時の史料から確認できる。たとえば、南宋の楼鑰（1137～1213年。浙東明州の人）『攻媿集』巻3「万耕道の瓊管（海南島）に帥（＝安撫使）すを送る」という詩の一節からは、そのようなイメージの一端を窺うことができる。

琉球・大食、更に天表、舶、海上を交して俱に朝宗す。

琉球・大食更天表、舶交海上俱朝宗。⁽²⁾

中国に來航する海外諸国に言及するなかで、「琉球」は西方の遠国・大食（アラビア・ペルシャ方面）とともに、東海の果てにある地域の代表としてその名が挙げられている。宋代に「琉球」朝貢の事実は伝えられていないので、恐らくこの文言は最果ての地からもはるばる來航する人々のいたことを詩的に表現したものであろう。なお、この楼鑰の詩は、

其の海外雜国、耽浮羅・流求・毛人・夷亶の州・林邑・扶南・真臘・干陀利の属の若きは、東南の際天、地は万を以て数う。或いは時に風潮を候ちて朝貢し、蛮胡賈人、海中に舶交す。

其海外雜国、若耽浮羅・流求・毛人・夷亶之州・林邑・扶南・真臘・干陀利之属、東南際天、地以万数。或時候風潮朝貢、蛮胡賈人、舶交海中。

といった唐・韓愈の文章などを焼き直したものと思われるため、ここでの「流求」も取って付けただけの「おかげ」のような単語なのであろう。なにか具体的な地域を念頭において語っているというよりも、楼鑰はこれを遙か彼方にある東方の果ての島として漠然と認識していたに過ぎないと考えられる⁽³⁾。また韓愈の「琉球」認識も、その内実は楼鑰と同じレベルに止まっていたであろう。

このほかにも、南宋の陸游（浙東紹興の人）のある詩（「歩出萬里橋門至江上」、1176年の作⁽⁴⁾）の一節には、

一日、新雨、霽^はれ、微茫として流求を見る。（割注）福州に在り海に^{うか}びて東望せば、流求国を見る。

一日新雨霽、微茫見流求在福州泛海東望、見流求国。⁽⁵⁾

という句がみられ、雨上がりの晴れ間に福州沖からボンヤリと眺められる東方の島を「流求」と呼んでいる。これが何処を指すのかについても各論者により意見が分かれ、現在の台湾であるとか、福建の東海に浮かぶ島々の総称などとされて定論をみない（黄寛重1987）。ただ、ここで確実にいえるようなのは、「琉球」は福建東海に浮かぶ島とする漠然とした共通イメージが当時の人々に持たれていた点であろう。そしてこの陸游の認識は、おそらく沿海部の事情に疎い一知識人の単なる「思い違い」の類ではなく、たとえば彼の別の詩（『劔南詩稿』卷59「感昔」、1204年の作）の一節で、

常に^{おぼ}記ゆ、早秋の雷雨、霽^はれ、舵師の指点して流求と説いしを。

常記早秋雷雨霽、舵師指点説流求。⁽⁶⁾

と詠われているように、福州近辺の海民たちより得られた情報であり（これは「観光客」に対する地元「ガイド」のリップ・サービスの類なのかもしれないが）、一定のひろがりを持ったイメージであったといえる。

もっとも、宋元期の主要史料（『諸蕃志』卷上「流求国」、『文献通考』「琉球」、『島夷誌略』「琉球」、『元史』卷210「瑠求伝」など）に記される「琉球」は、現在の台湾を指していたと一般には認識されている。確かに宋元期のおもな史料にみえる「琉球」は、位置説明などの記述（「流求国は泉州の東に当たり、舟行すること約五六日」〈『諸蕃志』卷上、流求国〉、「（琉球は）彭湖より之を望めば甚だ近し」〈汪大淵『島夷誌略』〉、「泉州と瑠求は相近し」〈『元史』卷19、成宗本紀〉）を参照する限り⁽⁷⁾、台湾のことを指していると考えられる。

しかし他方で、前出の陸游の詩（「歩出萬里橋門至江上」）に関していえば、その割注で説明のある福州沖から東望できる「流求」を台湾だと捉えてしまうのも、やはり少々無理がある（実際問題として福州沖から台湾を望むことは不可能）。宋元期の認識も決して画一的なイメージが共有されている状態ではなく、当時の人々の多くは、台湾に関する明確な地理的認識を持った上で、かの地が「琉球」だと認知してはいなかったようである。

さらに、『元史』卷210「瑠求伝」の記述は、当時の人々の曖昧模糊とした「琉球」認識の一端を明瞭に示している。

（至元）二十九（1292）年三月二十九日、汀路尾澳より舟行し、是の日巳時に至り、海洋中の正東に山の長くして低き者あるを望見し、約去ること五十里。（楊）祥は「是れ瑠求国なり」と称し、（阮）鑿は「的否を知らず」と称す。祥、小舟に乗りて低山の下に至り、其の人の衆きを以て親ら上らず、軍官劉閩ら二百余人をして、小舟十一艘を以て、軍器を載せ、三嶼人・陳輝なる者を領して岸に登らしむ。岸上の人衆、三嶼人の語を曉^{もと}らず、為に其の殺死せらるる者三人にして、遂に還る。四月二日、澎湖に至る。祥、鑿・（呉）志斗の「已に瑠求に至る」の文字を責めるも、二人従わず。明日、志斗の蹤跡を見ず、之を覓^{もと}むるも有る無きなり。……祥、顧つて「志斗、初

め瑠求は往くべからずと言うも、今祥、已に瑠求に至りて還り、志斗、罪を懼れて逃去せり。」と称す。

二十九年三月二十九日、自汀路尾澳舟行、至是日巳時、海洋中正東望見有山長而低者、約去五十里。祥称是瑠求国、鑿称不知的否。祥乘小舟至低山下、以其人衆不親上、令軍官劉閏等二百余人、以小舟十一艘、載軍器、領三嶼人陳輝者登岸。岸上人衆不曉三嶼人語、為其殺死者三人、遂還。四月二日、至澎湖。祥責鑿・志斗已至瑠求文字、二人不從。明日、不見志斗蹤跡、覓之無有也。……祥願称志斗初言瑠求不可往、今祥已至瑠求而還、志斗懼罪逃去。

引用部分にある通り、元朝の使節が「瑠求」に派遣された際、そもそもどこが「瑠求」であるのかについてすら、使者たちの中で認識の対立がみられた。招諭を進言した福建出身の「書生」呉志斗や元より派遣された武将楊祥・文官阮鑿は、福建（ないし泉州）の東、さらに「澎湖」の向こうに「瑠求」が存在するといった程度の認識しか、どうも持っていなかったようである。ましてや元初期の一般人の「瑠求（おそらく台湾）」に関する認識は、さらに漠然たるレベルにあったものと考えられる。その後、大徳元（1297）年に人を派遣して「瑠求」で「生口一百三十余人」（『元史』卷19、成宗本紀）を捕獲した記事が伝えられるのみで、結局は国初の一時期を除き、公的には元朝一代において「琉球」とは没交渉の状態にあった。従って、元人の認識も基本的に曖昧模糊とした水準のままであったとみてよいだろう。

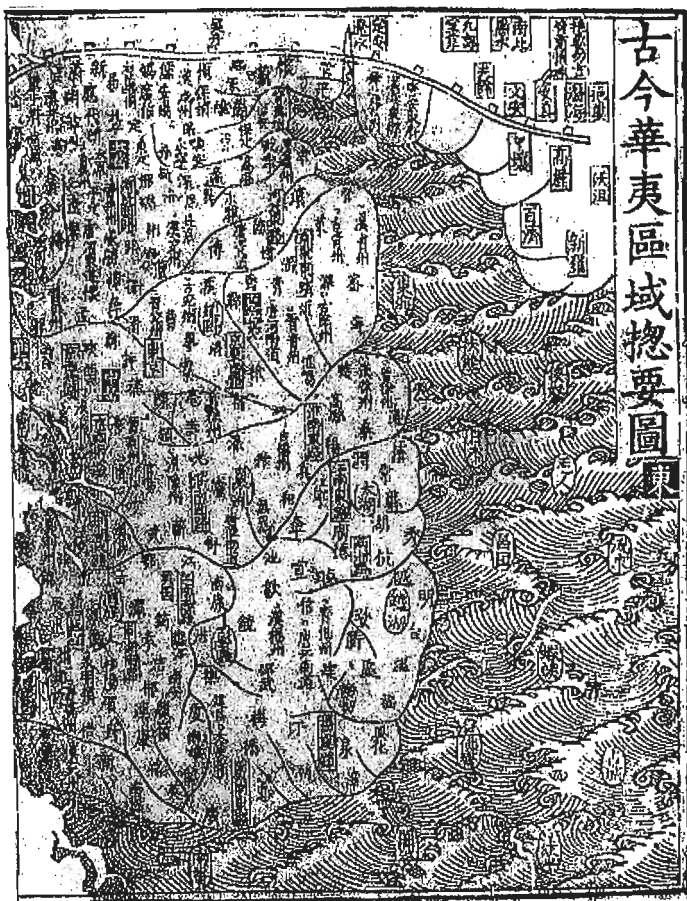


図1 古今華夷区域惣要図

このように宋元期の「琉球」に対する認識は、史料・執筆者によってユレ・ブレがみられた。南宋期の楼鑰や陸游の詩をみれば、彼等がどれほどの明瞭な地理的知識を持った上で、「琉球」に言及できていたのかは疑問である。執筆者自身は当の言及対象に対して漠然としたイメージを持っている程度で（一般の人々の認識レベルもおそらく同様）、「琉球」について語っている場合が多かったように思われる。

ところで、さきほど取り上げた文字資料のほかにも、宋代の「琉球」認識の一端を窺える資料群が存在する。それは当時の中国で作成された地図であり、この種の図像資料には海外諸地域に関する情報がしばしば盛り込まれている。そうした地図のなかで「琉球」を記した最古の部類に属するものとして、北宋末～南宋初期（12世紀前半）の作成とされる「古今華夷区域惣要図」（税安礼『歴代地理指掌図』所収。以下「華夷区域図」と略称）と南宋期（13世紀）にできた「東震旦地理図」（志盤『仏祖統紀』所収。以下「東震旦図」と略称）のふたつがあげられる⁽⁸⁾。

まず前者の「華夷区域図」は、日本や高麗との交易港である明州（寧波）近海に浮かぶ昌国の東海上に「流求」を描く（図1）。大まかにいって本図では、「流求」が中国東海の彼方に浮かぶ島と認識されているようである。他方、後者の「東震旦図」では、「流求」が「華夷区域図」とその位置を若干異にし、福州（ないし福建）の東海上に存在するものとして描かれている（図2）。つまり、両図はともに東の海上に記しているものの、それぞれ異なる地点（浙江東海上、福建東海上）に「流求」を位置づけているのである。

このような相違が存在する点から判断すれば、宋代中国の地図作成者たちに「琉球」の所在地（ひいては東方海域の地理）はあまり明瞭に把握されていなかったことがわかる。さらにいえば、この頃には、中国（ないし福建）の東海に浮かぶ島という情報を持つだけで、それ以上は明瞭な共通認識も形成されていなかったようにみえる。もっとも、宋元期の地図では、海外の記述、たとえば日本についてはもっと混乱した記載がされているので（海野1999）、「琉球」に関するこれくらいの表現のブレはまだよく描かれている方だと評価してよいのかもしれない。

とにかく当時の「琉球」認識の様相は、知っている者はある程度の認識（台湾方面に関する地理的知識）を持っているけれども、知らない者は中国東海の遠島である位のイメージしかない、といった落差の著しい状態だったようにみえる。こうした辺りに当時の中国における「琉球」認識の曖昧さ・不明瞭さの一端を窺うことができるだろう。なお、「東震旦図」についていうなら、その画面構成上の制約などの点を考慮する必要もあると思われるが、とりあえず同地図は福州東海あたりに浮かぶ島という認識に基づいて「流求」を描いているように見え、前述の陸游詩のごとき「琉球」イメージ（＝福州東海の島）との一定の親和性が看取される。

このほか、さきの2地図に遅れて製作された、京都東福寺の塔頭・栗棘庵にその拓本が伝来する「輿地図」（南宋末頃の作成）などは、「華夷区域図」と同じように、「流求」を慶元（寧波）の東海に記している（図3）⁽⁹⁾。この地図でも、現在の台湾方面に「琉球」が存在するというイメージは必ずしも読み取れない。本章で参照した3地図が当時の一般的な「琉球」認識をどの程度正確に反映しているのことはなお検討の余地があるけれども、文字史料より看取される宋元人の認識のユレと類似した傾向が同時代の地図からも確認できる。

ここまでの考察を踏まえると、宋元中国には「琉球」に対してそれほど明瞭な地理的認識は形成されていなかったと把握することが可能である。このような認識のあり様は、当地が中国の東の境界領域に位置することと関係していたと考えられる（『海外諸国、蓋し此れより始まる』〈『島夷誌略』「琉

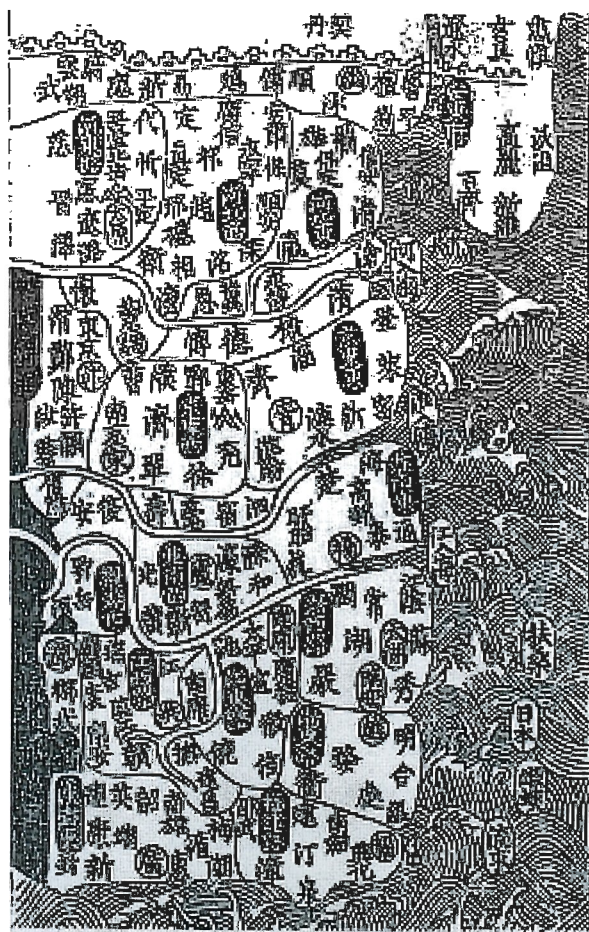


図2 東震旦地理図

球』)。およそ境界領域においては、そこが内と外とを隔てる狭間であるため、人的交流の度合いや政治的影響力の高低が時期によってしばしば異なり、その情報入手機会の多少も自ずと変化するため、境界領域に対する人々の認識は多かれ少なかれ漠然としたものになりやすい(村井章介1997)。隋代や元代における「遠征」とそれ以後における公的レベルでの没交渉といった一連の経過は、中国側の認識にあいまいな要素を持ち込むのに好適な環境を提供したであろう。境界に存在した「琉球」に対する認識にユレが見られるのは、ある意味で至極当然のことなのかもしれない。なお、『諸蕃志』巻上「流求国」には、「流求国は、泉州の東に当たり、舟行すること約五六日」、「他に奇貨無く、尤も剽掠を好み、故に商賈通ぜず」と記され、また『島夷誌略』が『隋書』以来の記述を踏襲して食人の風習を記すなど⁽¹⁰⁾、従来から指摘されている通り、「琉球」を未開の野蛮な島とする認識が宋元期にも存続している。

以上のように、台湾や沖縄という島の存在をそれぞれ明瞭に認識した上で区別するといった地理

的認識を、宋元中国の人々が有していたとは到底考えられない。各史料の記述を踏まえると、まず福建東海にある未開の島という当時の人々の抱いている共通イメージがあり、さらにそうした東海の島々の中で最も目立った存在である台湾を「琉球」と呼ぶことが通常多かった、といったあたりが宋元期中国における「琉球」認識の一般的な様相だったと考えられる。

従来から多くの研究者により指摘され、また本稿でも確認した通り、少なくとも宋元期に限ってみれば、中国側の主要史料にみられる「琉球」は、台湾方面を指しているとみて間違いはない。ただし、当の「琉球(≒台湾)」自体に対する宋元人の認識は、かなりユレ・ブレが存在していた。このため、陸游の詩にみられるような、「琉球」=福建東海に浮かぶ島との抽象的認識に基づき、およそ台湾と考えられないような島に対してもその呼称が平気で用いられる事例もみられたのである。とするなら、「琉球」=台湾の等式が常に成り立つというような確固たる認識の存在を、宋元期に想定してしまうのは危険だろう。

2. ふたつの「琉球」—宋元中国と中世日本—

前章で述べたように、宋元期の「琉球」は、台湾方面を漠然と指す名称であった。ところが、同時代の東アジアにおいては、ある一定地域を「琉球」と把握する認識を持っていた地域が中国以外にいまひとつ存在していた。それが中世日本である。その「琉球」認識を記述する代表的史料としては、鎌倉時代の13世紀の著作とされる『漂到流球国記』があげられる。これは「寛元元年(1243)に中国の宋に渡った一行が漂着した流球において見聞したことを中心に、慶政という僧侶が当時の船頭や僧侶から聞き取りしてまとめた」(山里1999b、230頁)書物とされている。たとえば、同書のなかで

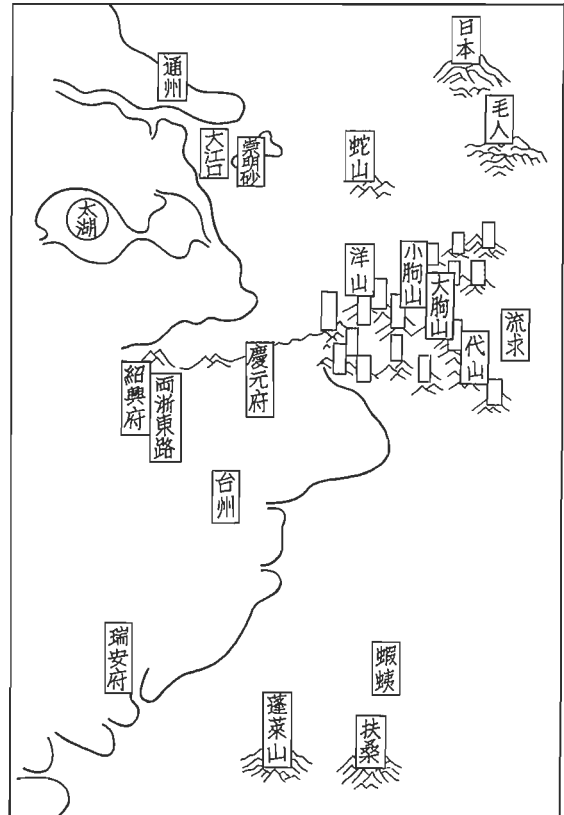


図3 栗棘庵所載宋拓「輿地区」略図
(室賀1956より)

「琉球」は以下のように記されている。

(寛元元年9月)同十七日、琉球国の東南方に漂到す。船裏の諸人衆口討論するに、或ものは貴賀国きがいと云い、或ものは南蕃国と云い、或ものは琉球国と云う。終に即ち皆謂う、是れ琉球国なり、と。命は朝暮に在り、奈何せん奈何せん。

同十七日、漂到琉球国東南方。船裏諸人衆口討論、或云貴賀国、或云南蕃国、或云琉球国、終即皆謂、是琉球国也。命在朝暮、奈何々々。

ここに描かれているように、「琉球」は生きては戻れぬ恐ろしい島として当時の人々にイメージされていた。ところで、同書の「琉球」が一体どこを指すのかについては、必ずしも確たる証拠が提示されている訳ではないが、日本史側の研究では、これを「沖縄本島」であるとか(山里1999b)、中世日本の「西の境界」である「鬼界ヶ島を越えたところ」(高橋公明2002、42頁)などと比定しており、おおむね沖縄方面のことと理解しているようである。ただ本書の記述に関しては、近年、当時の実体験を記録したものというより、「食人種」などといった既存情報の影響を受けた「作為性」のみられる、「対琉球知識」の「低かった」「鎌倉時代日本の対琉球観を示したもの」との指摘がされている(下郡剛1999)。

『漂到琉球国記』の記述内容に対する評価には各論者で相違が存在するものの、本稿ではこの問題には深入りせず、とりあえず同書の記された当時の日本で「琉球」がどの地域に存在するとイメージされていたのかのみを問題にしていきたい。そして当該問題を確認するには、やはりこの頃の「琉球」認識を視覚的に示す古地図を参照するのが捷径であろう。幸いにも日本側にはこの点を確認するための格好の地図が存在している。最古の日本地図のひとつとして著名な、鎌倉・金沢文庫所蔵の「日本図」(嘉元3〔1305〕年作成と推定。以下、金沢文庫本「日本図」と記す)がそれである(図4)⁽¹¹⁾。この図はその半分が失われているものの、西日本およびその周辺地域を描いた部分が残存し、そこに「琉球」に関する貴重な情報が記されている。本図には九州南方にあたる西南隅に大きな陸塊の一部が描かれ、この部分には次のような文字が存在する。

雨見嶋、私領郡なり。龍及国宇嶋、身は人にして頭は鳥なり。

雨見嶋、私領郡。龍及国宇嶋、身人頭鳥。

黒田日出男によれば、本地図は南宋滅亡直前の状況を記したものとわれ、これが依拠したであろう原図の成立時期はさらに13世紀後半頃まで遡ると推測されている(黒田2003)。金沢文庫本「日本図」の記載を参照すると、その地理的認識はかなり莫然としたものようだが、13・14世紀頃の日本には、奄美以南の「南島」(≒沖縄方

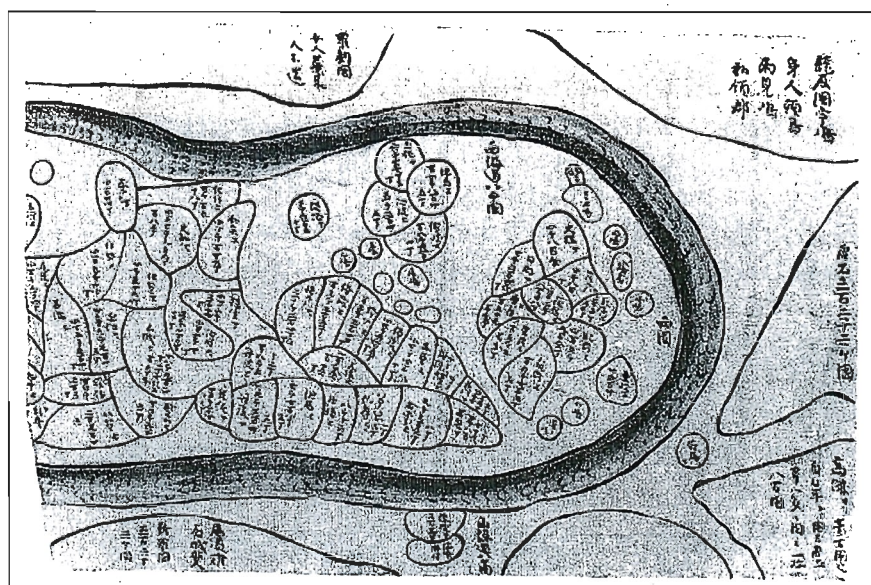


図4 金沢文庫所蔵「日本図」

面)を「琉球」と捉える認識が存在していたことがわかる。

また、金沢文庫本「日本図」と同系統の情報を伝え、ほぼ同時代に書かれた地図を写したとされる、千葉・妙本寺所蔵の「日本図」が近年発見・紹介され、注目を集めている⁽¹²⁾。この地図では、九州を描いたと考えられる島(これが「日本」を表していると考えられる)が大きく描かれ、その島の南方に「琉球国身ハ人頭ハ鳥」との文字が記されており、金沢文庫本「日本

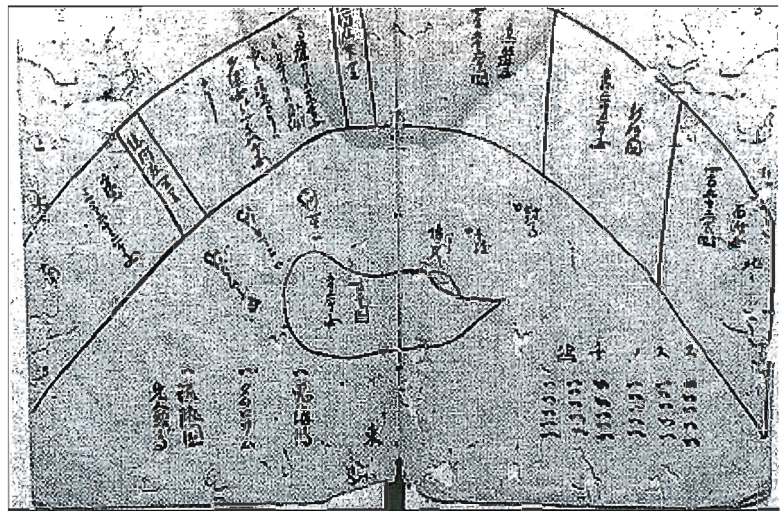


図5 妙本寺所蔵「日本図」

図」と類似した記述がみられる(図5)。金沢文庫本や妙本寺本の「身は人、頭は鳥」という記述に示されている通り、「琉球(≡沖縄)」に関する認識はかなり荒唐無稽な要素を含んでいるものの、中世日本では奄美以南の「南島」を「琉球」と観念していたことはほぼ確かであろう。従って、その内容が事実かフィクションかは別として、『漂到琉球国記』の「琉球」も、「南島(沖縄方面)」を指す呼称として使われていると理解するのが妥当である⁽¹³⁾。

宋元中国では、おおむね台湾方面を指す名称として「琉球」が使用されていた。これに対して同時代の中世日本では、中国とは異なり、奄美以南の「南島」を漠然と指す名称であった。このような日中間における異なる認識の並立状態は、互いの差異が顕在化しにくい構造になっていた。なぜなら、どちらの「琉球」も中国の東海上にあって、かつ日本の南方に位置しており、しかも日中双方が当時この方面に対する明瞭な地理的共通認識を持っていなかったからである。台湾と沖縄の両方がその視野に入っていない限り、相互の認識の齟齬を発見することはきわめて困難であったと思われる。

かくて認識の相違が日中間でとくに顕在化することもなく、宋元中国は隣接する福建東海に浮かぶ島を、中世日本は九州南方に浮かぶ島を、それぞれ自らに引き付けて「琉球」と認識し続けていったのであろう。確かに13・14世紀の東アジアでは、沖縄は「琉球」として認識されていたが、ただそう認識していたのは中世日本だけでのことだったようなのである。こうした状態は、「琉球」なる名称のもとに沖縄と台湾という異なる地域が混同された状態というよりも、日本と中国で異なる認識が別個に形成されていたと捉えるのが適切であろう。つまり、当時の東アジアには、ふたつの「琉球」認識(宋元中国の「琉球」≡台湾と中世日本の「琉球」≡沖縄)が存在していたのである⁽¹⁴⁾。

他方、13・14世紀頃の東アジアに並存していた諸認識には共通した特徴もみられる。それは、『隋書』「流求国伝」系統の情報の影響であろうが、ともに未開で野蛮な「食人国」というイメージに示されているように、かなり荒唐無稽なレベルでしか「琉球」を認識できていない点である。つまり、その認識は宋元中国・中世日本ともに曖昧模糊とした漠然たるものに止まり、換言すれば情況次第でどう変容するのか予断を許さぬ、いわば流動的な認識であったといえる。そして、このような性質がつづく元末明初期において東アジアの「琉球」認識に変容をもたらす素地を提供していくことになる。

3. 「琉球」認識の変容—元末明初の中国を中心として—

東アジア（とくに中国側）における「琉球」認識に大きな変化がみられるのは、先行研究でもしばしば指摘されてきた通り、明代初期の洪武年間（1368～98年）であった。この時期にその認識の変容をもたらす契機として、中国と「琉球」の関係以上に、中国と日本との通交関係が大きな役割を果たしていたと考えられる。

さて、洪武5（1372）年に明朝が「琉球（＝沖繩）」へ遣使を行った経緯に関しては、佐久間重男・曹永和により提示された見解が現在のところ最も魅力的なものであるように思われる（佐久間1975、曹1988）。即ち、日本に2回派遣された明の使者・楊載が、訪日の際に情報を得て沖繩を経由して中国に帰還したため、明朝にその存在が認知されるようになり、ついで明の使節が沖繩に派遣された、とするのが両者の見解である。ただ、楊載による「琉球（＝沖繩）」経由の本国帰還という出来事は、嘉靖年間（1522～66年）の著作である鄭若曾『鄭開陽雜著』巻7「琉球図説」の記述によるものであり⁽¹⁵⁾、同時代史料に裏付けられた情報ではないという難点を持っている。

とはいえ、周辺地域の多くはその建国後2、3年の間に明からの遣使があったのに比べ⁽¹⁶⁾、「琉球（＝沖繩）」は洪武5年といういささか遅れた時点で招諭が行われたこと（遣使を決定するための何らかの契機がそこに介在していたと考えるべき）、またその遣使が2度目の日本遣使の直後だったことなどを考慮すると、沖繩経由の帰還という史実の有無を立証することはできないものの、楊載が2度にわたる日本滞在中に「琉球（＝沖繩）」情報を入手していた可能性はかなり高いといえる。

さらに付け加えると、中国側の認識に変容をもたらしたもうひとつの歴史的契機として、14世紀中頃の元朝末期における所謂「南島路」（九州から沖繩を経由して福建へ至るルート）を通じた日中通交の活発化という事態が想定できる。これは、元末の動乱に伴って浙江海域の航行が危険な状態となり、これを回避する目的で、日本から中国寧波へ至る既存のルートとは異なる経路（九州—沖繩—寧波）が利用されるようになった事象と考えられている（榎本渉2007）。また、この推測を裏付けるものとして、肥後・高瀬津（南朝側の菊池氏が支配）がこの頃より対中交易の窓口として俄に繁栄を迎えるという事実も指摘できる（橋本雄2005）。そしてこれらの動向と軌を一にして、沖繩列島では14世紀中葉以降、当時のものと推定される中国製貿易陶磁の出土が激増すると報告されており（亀井明德1993・1997）、元朝末期から中国沿海部と沖繩との接触が急速に頻繁になっていく様相は出土遺物の状況からも窺える。

元末における「南島路」浮上は、日本からの「琉球（＝沖繩）」情報の入手という前述の仮説を補強する好材料となろう。周知のように、一連の日明交渉の過程において洪武政権が当初接触した日本側勢力は、北九州に本拠をおく南朝＝征西府勢力であった。「南島路」の日本側窓口のひとつとされる高瀬津を支配した肥後菊池氏は、南朝側に属する勢力でもあった。ここに洪武政権と「南島路」に関する情報とを結び付ける経路が浮かび上がってくる。「南島路」を通じた通交の活発化を背景にして、征西府勢力との接触により明朝は「琉球（＝沖繩）」情報を獲得した、と考えるのはごく自然な推定だろう。元末に胎動したあらたな歴史動向が「琉球（＝沖繩）」情報を明朝中国にもたらし、ひいては「琉球」3王国（中山・山南・山北）と明との朝貢関係樹立へ向かわせる原動力になっていったと考えられる⁽¹⁷⁾。

以上のように、明の洪武政権が日本を通じて沖繩に関する情報を入手し、また日本から得られた情報だったからこそ、宋元以来の「琉球（＝台湾）」ではなく、洪武政権は中世日本の認識する「琉球（＝沖繩）」へその使者を向かわせることになったのであろう。3王冊封に至る一連の過程は、中世日本の認識が明朝中国に流入・定着していったことを示す事象として捉えられる。

その後、宋元＝鎌倉期の「琉球」認識の並存状態が変容することで、日中で別個に把握されていた対象（沖縄と台湾）はともに「琉球」と認知されていく。つまり、ふたつの認識が明初の中国で融合ないし混淆され、「琉球」は沖縄・台湾を包括する呼称となっていったのである。次の史料をみよう。

（洪武）七年甲寅（1374）、海上の警聞え、（呉禎）復た沿海各衛軍を領いて出捕し、流球大洋に至り、人・船若干を獲、俘は京に送る。上、益々之に嘉頼し、（呉禎）常に海道を往来し、機務を総理す。

七年甲寅、海上警聞、復領沿海各衛軍出捕、至流球大洋、獲人船若干、俘送于京。上益嘉頼之、常往来海道、総理機務。

<劉崧『槎翁文集』卷18「靖海侯追襄封海國公諡襄毅呉公神道碑銘」>引用文（洪武13〔1380〕年の作成）は、洪武5年の中山王冊封以降も台湾が依然として「琉球」と呼ばれていたことを窺わせる史料である。もっとも、ここに記される「流球大洋」について、先行研究では沖縄近海を指していると理解されたりもしている（たとえば曹1988）。だが、ことはそう簡単にはいかないように思われる。それは、前出史料と類似した表現をもつ記述が実は元末にも見出せるためである。程端礼『畏斎集』卷6「故中奉浙東道宣慰都元帥兼蕪湖翼上万户府達嚙嗚齊諤勒哲因公行状」の一節には、

是年（至元6〔1340〕年）冬十一月……時に海寇、復た隙に乗じて猖獗し、糧艘多く殺さる。……（浙東道宣慰都元帥オルジェイト）渠魁周麻千等と韭山の南に遇い、……^{しばしば}屢々流求国界に直抵し、之に及びて遂に全獲す。

是年冬十一月……時海寇復乘隙猖獗、糧艘多被殺。……遇渠魁周麻千等于韭山之南、……屢直抵流求国界、及之遂全獲。

とある。元末における海賊退治の顛末を記したこの史料では、元将オルジェイトがたびたび「流求国界」にまで至って海賊掃討を行った事跡が語られている。これまでの考察を踏まえると、宋代以来の認識を引き継ぐ元代の史料であり、また沖縄方面に比定すべき特段の事由も見出されないで、引用史料の「流求」は台湾方面のことを指していると考えられる。とすれば、元末の当該史料が記す「流求」と明初の呉禎神道碑にあった「琉球」は、前者が台湾で、後者が沖縄である、というふうに機械的に分けよとのだろうか。しかし、このように処理してしまうことには若干問題を感じる。

なぜなら、海賊を「琉球」近海まで追いかけて退治したという類似表現の元末と明初における存在は、次のような理解の可能性を有していると思われるからである。同様な表現が複数の史料で存在している点に留意するなら、前出史料にみられる「流求」・「流球」の単語は、東の遠海（波荒いシナ海域）をイメージさせる象徴的な言葉として使われていると理解することが可能であり、その近海に至ったとの記述も東海での海賊退治という難業の達成を賛美する際に用いる「常套句」といった趣さえある。ならば、中山王冊封後の出来事に属しているとはいえ、呉禎神道碑が記す洪武7年に到達した「琉球大洋」を、無条件で沖縄近海と理解してしまうのは少々問題があろう。明初の事例に先行して、すでに元末段階で類似の「常套句」がみられた点を重視するなら、むしろそれは台湾近海をイメージして語られていると理解した方が無難である⁽¹⁸⁾。

そもそも洪武5年の冊封直後、明人が「琉球」という名称で沖縄方面を具体的にイメージできていたとは思えない。元末明初の浙東人・胡翰が遣使より帰還した楊載を讃えた、『胡仲子集』卷5「贈楊載序」は次のように記す。

（洪武）五年秋、流球、表を奉じ、（楊）載に従いて入貢す。……（元・至元中）流球を取らんことを議し、閩人・呉誌斗の言を用い、師を出ださずして使を遣わして往きて其の国を論さんとし、

泉南（泉州）に留まること久しと雖も、訖^{つひ}に達する能わずして罷む。

五年秋、琉球奉表、従載入貢。……議取琉球、用閩人吳誌斗之言、不出師而遣使往諭其国、留泉南者雖久之、訖不能達而罷。

洪武5年における中山王使節の入貢に際して、胡翰は沖縄のことを、前代より中国と接触のあった「琉球」と認識していた。前代以来の「琉球（≒台湾）」とあらたに朝貢した「琉球（＝沖縄）」を混同している事例が存在することに示されているように、沖縄と台湾というふたつの「琉球」を、明人が当初より別個の存在として明瞭に識別できていたかどうかさえ実は定かではない。結局、前出の呉禎神道碑が示唆するように、冊封以後に書かれた史料に登場する「琉球」であっても、それが沖縄を排他的に指している保証はどこにもなく、なかには台湾とみた方がよい事例も存在すると考えるべきなのである。ここから導かれるのは、冊封後にも台湾は沖縄とともに「琉球」と呼ばれていたとの認識である。両者が洪武初年に同じ名称で一括されていたからこそ、のちに沖縄と区別して表記されるようになって、台湾は依然として小「琉球」の名で呼ばれ続けたのである。

すでに論じた通り、宋元期の「琉球」認識はユレのある曖昧模糊としたもので、この地点に存在して他所ではあり得ない式の確固たる共通認識が形成されていた訳ではない。従って、福建の東海にある島として漠然と認識されていた宋元以来の「琉球」の記憶が日本との接触を契機として沖縄と結び付けられていくのも、さほど不可解なことではない。所詮、「琉球（≒台湾）」に関する乏しい情報に基づく宋元期の認識は、明代に「琉球（＝沖縄）」が浮上することにより変容してしまうような、脆く流動的な認識でしかなかった。

かつて認識していた台湾が誤りで、沖縄こそが本当の「琉球」である、といった認識の自覚的転換が明初に存在したようにはみえず、またこれを窺わせる痕跡も同時代史料からは検出できない。というより、中国側の認識する「琉球」の範囲は既存の台湾方面だけでなく、さらに沖縄方面へも広がっていったように見える。そして前代までの「琉球」に関する情報は、何の疑問も差し挟まれることなく、沖縄に関する情報として明人に認知されていったのである。このような自覚されざる認識の変容を可能にしたひとつの要因が、前述した宋元期における「琉球」認識のユレだったといえる。

洪武5年の冊封以後の「琉球」認識の推移を中国側から眺めると、次のようになろう。明初に在来のふたつの認識が融合され、中国の認識する「琉球」の範囲が沖縄までを包含していった結果、沖縄と台湾がひとつの名称（「琉球」）で呼ばれるようになる。その後、両者を区別する呼称（「大琉球」・「小琉球」）が生まれ、日中で別個に存在したふたつの認識はひとつの共通認識に整序されていった、と。これこそが、王圻『統文献通考』などに典型的にみられる後人の認識（「其の国に大琉球・小琉球有り」—琉球国にはふたつの「琉球」が存在し、それが「大・小琉球」であるとの認識—）なのである⁽¹⁹⁾。かくて台湾は依然として「琉球（小琉球）」と呼ばれ続けるものの、以前から中国と断続的に接触のあったのは沖縄（「大琉球」）であると認識されていったのである。

4. 「大琉球」・「小琉球」の成立

前章で考察したように、日中のふたつの認識が融合され、「琉球」という名称のなかに台湾と沖縄が包含される状況が形成されたのち、台湾と沖縄を区別する呼称（「大・小琉球」）もやがて生まれ、「琉球」認識はひとつの共通認識のもとへ整序されていった。とはいえ、「大・小琉球」の名称の成立過程を実証的に論じることは、同時代史料が乏しいこともあって容易ではない。勿論、これらの名称が明・洪武年間に入って成立したものであるとは、一般に認識されている。しかし、より具体的な成立時期については、これまで定説がない。というより、時期の特定に関心が向けられることはそもそ

も殆どなかった。おそらく「大・小琉球」は、明の「琉球 (= 沖繩)」遣使を契機に台湾との区別のため成立したと漠然と認識されていたため、とくに詮索されることもないまま現在に至ったと推察される。

そこで同時代史料に基づき、「大・小琉球」の登場する時期を確認しておく、これらの呼称は洪武20年代(1390年代)までに出現している。かつて秋山謙蔵・小葉田淳らが指摘したように(秋山1929、小葉田淳1942)、その初見は『明太祖実録』洪武25(1392)年5月己丑の条における次の史料に求められる。

琉球国民才孤那等二十八人を遣わして国に還らしめ、人ごとに鈔五錠を賜う。初、才孤那等、舟を河蘭埠に駕して硫黄を採らんとすも、海洋に於いて大風に遇い、飄たがよいて小琉球界に至り、取水して殺さるる者八人、余は脱するを得。又た風に遇い、飄たがよいて惠州海豊に至り、邏卒の獲る所と為り、言語通ぜずして、以て倭人と為し、転送して京に至る。其の国の遣使の入貢するにあたり、為に其の事をう白げ、遂に皆遣還せしむ。

遣琉球国民才孤那等二十八人還国、人賜鈔五錠。初、才孤那等駕舟河蘭埠採硫黄、於海洋遇大風、飄至小琉球界、取水被殺者八人、余得脱。又遇風、飄至惠州海豊、為邏卒所獲、言語不通、以為倭人、転送至京。值其国遣使入貢、為白其事、遂皆遣還。

「琉球 (= 沖繩)」人たちの明国漂流という洪武25年の出来事を伝える記述中に、惠州へ漂流する以前に流れ着いた場所として「小琉球」の名が登場する。史料には直接みられないものの、「小琉球」が存在する以上、「大琉球」もこの時すでに存在していたと見做せる。

この洪武25年の初見史料以降、数は多くないものの、他の同時代史料(『皇明祖訓』『祖訓首章』、『明太祖実録』洪武30年8月丙午の条など)でも、「大・小琉球」の語が見出せるようになる。よって、これらの呼称は洪武末年までには確実に成立している。だが他方、現在知られている限り、洪武25年より早い時期にそれらを見出すこともできない⁽²⁰⁾。このことはいったい何を意味しているのであろうか。

「大・小琉球」の成立時期を探るひとつの手掛りとして、『祖訓録』『箴戒』における以下の記述が注目される。

凡そ海外夷国、安南・占城・高麗・暹羅・琉求・西洋・東洋及び南蛮諸小国の如きは、山を限りて海を隔て、一隅に僻在す。

凡海外夷国、如安南・占城・高麗・暹羅・琉求・西洋・東洋及南蛮諸小国、限山隔海、僻在一隅。引用部分は所謂「不征国」に関する著名な条文の一節である。『祖訓録』は洪武28(1395)年編纂の『皇明祖訓』の前身となる書物で、その最初の版は洪武6(1373)年の成立にかかるが、前引史料をのせるテキスト自体は洪武14(1381)年頃に成立したと推定されている(黄彰健1961)。当該史料では「琉求」のみが記され、「大・小琉球」の文字はみられない。ところが、『祖訓録』の当該部分に相当する条文を載せた『皇明祖訓』『祖訓首章』は、

大琉球国(割注)朝貢不時にして、王子及び陪臣の子、皆な太学に入りて読書し、礼待甚だ厚し。

小琉球国(割注)往来を通ぜず、曾つて朝貢せず。

大琉球国朝貢不時、王子及陪臣之子、皆入太学読書、礼待甚厚。

小琉球国不通往来、不曾朝貢。

となっており、そこに「大・小琉球」が確認できる。つまり、洪武14年以前に書かれた『祖訓録』では「琉求」と書かれていた部分が、洪武28年の『皇明祖訓』になると、「大琉球国 (= 沖繩)」・「小琉球国 (= 台湾)」に書き改められているのである。このことから、洪武14年頃に「大・小琉球」はい

まだ存在していない可能性も浮上してくる。

勿論、さきに引用した2史料における記載の相違という点のみから、件の名称がまだ成立していなかったとの結論をただちに導き出すことはできない。『祖訓録』の書かれた時（洪武6～14年の間）に「大・小琉球」の語はすでに存在していて、単なる文章表現上の都合から、明朝にとってあまり重要な存在ではない「小琉球」が省かれ、結果として「琉球」のみの記述になったと解釈する余地も残されている。事例検出の有無と当該名称の有無は、あくまで別次元の事柄に属する。

とはいえ、洪武5年の時点では「琉球（＝沖縄）」とすでに接触していたので、もっと早い時期に「大・小琉球」の文字が検出されてもよいはずだが、既述の通り、洪武25年以前の史料には、沖縄も台湾も単に「琉球」と記されるのみであった。いまのところ洪武20年代より以前に両者を区別する呼称は確認できないのである。これに加え、「大・小琉球」を記す史料が洪武20年代に入って俄かに散見されるようになる、というさきに指摘した点なども考慮すると、これらの名称が洪武初年の段階、さらには洪武10年代になっても成立していなかった可能性はやはり高いように思われる。現今の史料状況からは、洪武5年の「琉球国」中山王の冊封以降、台湾と沖縄をともに「琉球」と呼ぶようになる段階がまず存在し（「ふたつの琉球」から「ひとつの琉球」へ）、その後に「大・小琉球」の名称が成立する、と想定しておくのがひとまず穏当であろう⁽²¹⁾。

そして、いま述べた明初における「琉球」認識の変容と関連して、龍谷大学所蔵「混一疆理歴代国都之図」（以下、龍谷本「混一疆理図」と略記）における「琉球」の記載が注目される。アフリカ大陸まで描かれた「世界地図」として著名な本図は、元末に作成された2枚の中国製地図（清濬「混一疆理図」と李沢民「声教広被図」⁽²²⁾）を底図とした原図（簡略だった朝鮮と日本の部分を増補して1402年に朝鮮で作成されたもの。以下、原本「混一疆理図」と略記）の上に、さらに改定を施して1470年代頃に成ったものである⁽²³⁾。龍谷本「混一疆理図」は当時の東アジアにおける「琉球」認識の一端を窺い知ることができる貴重な資料といえる。

さて、龍谷本「混一疆理図」における「琉球」方面の略図を参照すると（図6）、そこには「琉球」と「大琉球」が描かれている。台湾は「琉球」とのみ記され、「大琉球（沖縄）」と並記されている点が興味深い。これが単に「小」字の脱誤でないならば、なぜこのような変則的記載になっているのだろうか。この点について憶測を逞しくすれば、次のような可能性が考えられる。即ち、元末の中国製地図にはもともと「琉球」の記載しかなかったのが、原本「混一疆理図」の作成時か、あるいはその後の改定過程で「大琉球」の情報が付け加えられ、「琉球」「大琉球」の列記になった、と⁽²⁴⁾。つまり、龍谷本「混一疆理図」の記載は、中国における既存の認識（「琉球」≡台湾）があらたな

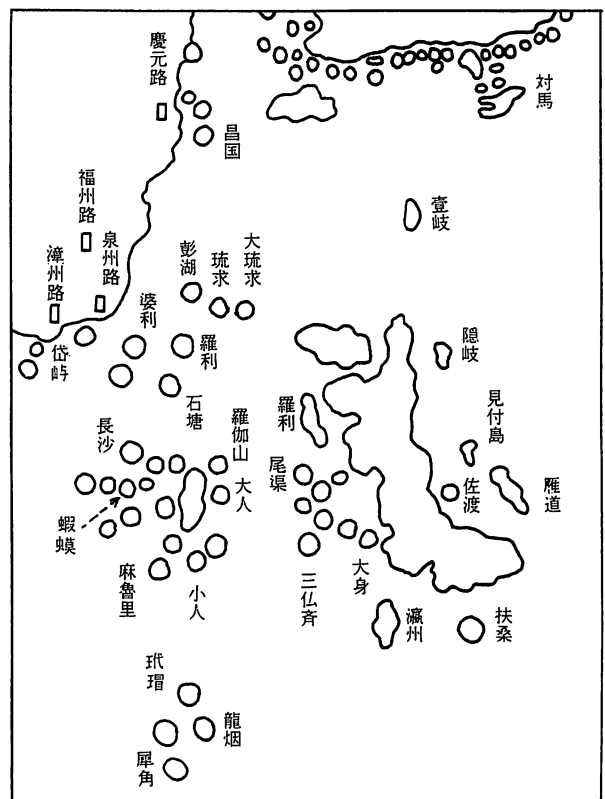


図6 龍谷大学所蔵「混一疆理歴代国都之図」略図
(弘中1988より)

認識（「大・小琉球」）へ変容したことをうけ、「琉球」の東側に「大琉球」が書き加えられた結果と考えられないか、ということである。そうであるなら、龍谷本「混一疆理図」における件の記載は、まさに本項で論じた明初における「琉球」認識の変容過程の痕跡を残すものと捉えることができるだろう。

小結

本稿で指摘した13・14世紀の日中における異なる「琉球」認識の並存という事象は、当時、中国と琉球列島との接触・交流（そしてまた「南島路」を通じた日中通交）が希薄であったことを端的に示すものとして評価できる。なぜなら、中国と琉球列島との間の隔絶状態こそが、日中間の「琉球」認識に分裂をもたらした最大の要因と考えられるからである。この点は近年の古琉球史研究における歴史認識ともそれ程齟齬しない理解といえる。ただし、この「隔絶状態」という表現は、中琉間の接触がのちの時代と比べて希薄であったことを述べているに過ぎず、明朝成立以前に両者の間でまったく接触がなかったということだけをただちに意味しない。中央や一般レベルでの地理的認識の変化は、一定の相互交流の成熟を経た上でもたらされるものと考えられるため、そのような成熟過程の前段階が存在して然るべきだからである⁽²⁵⁾。

最後に、これまでの考察を通じて興味深く感じられた事柄をひとつ記し、本稿を締めくくりたい。それは13・14世紀の「琉球」認識と現今の学説対立状況との類似性である。屢述したように、『隋書』以降「琉球」の所在地をめぐるのは、現在、台湾説（中国で優勢な見解）と沖縄説（日本・台湾で根強い見解）の有力2学説が並存している。奇しくもそうした状態は、本稿で論じた13・14世紀の東アジアにおける異なる「琉球」認識の並存状況と似通ってみえる。ふたつの主要学説の対立という現在の状況は、かつての「琉球」認識の並存にその歴史的淵源があると理解することがあるいは可能なものかもしれない。つまり、13・14世紀の「琉球」をめぐる諸学説は、過去の認識（しかも多分にユレのあるそれ）に規定されて形成された認識、ないしは現代におけるその「再現」といえるのではないか、ということである。

注

- (1) ただし、宋元期の「琉球」に関していえば、一般的に台湾説が優勢といえる（沖縄説も根強く存在している）。周知のように、『隋書』「流求国伝」をめぐるのは、これまでに膨大な議論がある。しかし、本稿は13・14世紀の同時代史料から窺える「琉球」認識の様相に検討の対象を限定しているため、『隋書』「流求国伝」をめぐる諸問題は考察の範囲外にある。なお、『隋書』以来の「琉球」に関する研究動向については、山里純一による包括的な学説整理（山里1999 a）、藤善真澄訳注の『諸蕃志』「流求国」についての解説（藤善1991）、田中聡の手になる簡潔な研究史整理（田中1999）等があり、それぞれ要を得た論点の整理が行われている。併せて参照されたい。
- (2) 黎山千仞摩蒼穹、巖巖独在大海中。自從漢武置兩郡、黎人始与南州通。歴歴更草不勝計、唐設五筦如容邕。皇朝声教久漸被、事体全有中華風。生黎中居不可近、熟黎百洞蟠疆封。或從徐聞向南望、一粟不見波吞空。靈神至禱如響答、征帆飽掛輕飛鴻。曉行不計幾多里、彼岸往往夕日春。琉球・大食更天表、舶交海上俱朝宗。勢須至此少休息、乘風徑集番禺東。…（以下省略）…
- (3) このほか「琉球」=中国東南海の最果ての島という抽象的イメージの存在を窺わせる史料として、南宋・胡銓『胡澹庵先生文集』巻11「答呂機宜」、元・宋本「船上謡」（蘇天爵『国朝文類』巻4、所収）などがあげられる。

- (4) 本章で引用する陸游の詩の作成年代は、錢仲聯1985の見解に従っている。なお、同書が存在ならびに陸游詩の解釈については、鹿児島大学の高津孝教授より示教をうけた。ここに記して謝意を示す。
- (5) 久坐意不懌、掩卷聊出遊。一筇吾事足、安用車与騶。浮生了無根、兩踵塌百州。常憶航巨海、銀山卷涛頭。一日新雨霽、微茫見流求在福州泛海東望、見流求國。西行亦足快、縱獵南山秋。騰身刺猛虎、至今血濺裘。命薄每自笑、校尉略已侯。短劍隱市塵、浩歌醉江樓。頗疑屠博中、可与共奇謀。丈夫等一死、滅賊報國讎。徒倚万里橋、寒日墮前洲。
- (6) 行年三十憶南遊、穩駕滄溟万斛舟。常記早秋雷雨霽、柁師指点說流求。
- (7) 趙汝适『諸蕃志』「流求國」
流求國、当泉州之東、舟行約五六日程。……無他奇貨、尤好剽掠、故商賈不通。
汪大淵『島夷誌略』「琉球」
（琉球）自澎湖望之甚近。……海外諸國、蓋由此始。
『元史』卷19、成宗本紀2
元貞3〔1297〕年2月）己未、改福建省為福建平海等處行中書省、徙治泉州。平章政事高興言、泉州与瑠求相近、或招或取、易得其情。故徙之。
- (8) 「古今華夷区域惣要図」および「東震旦地理図」については、室賀信夫1956、鄭錫煌1990、海野隆一1999、沖縄県史料編集室2003などを参照のこと。
- (9) 栗棘庵所蔵「輿地図」については、森鹿三1941、森克己1951、青山定雄1955、黄盛璋1990、海野1999を参照。ちなみに、室賀信夫は、今日散逸してしまった唐・賈耽「海内華夷図」には、「華夷区域図」や「輿地図」のごとく中国東海に「琉球」が記されていた可能性を指摘している（室賀1956、114～15頁）。もし仮にその通りであれば、「華夷区域図」・「輿地図」より窺える「琉球」についての地理的認識は、その淵源を唐代にまで遡れることになる。
- (10) 汪大淵『島夷誌略』「琉球」
他國之人、倘有所犯、則生割其肉以啖之、取其頭懸木竿。
- (11) 金沢文庫本「日本図」については、秋岡武次郎1955、応地利明1996、海野1999、黒田日出男2003、沖縄県史料編集室2003などを参照のこと。
- (12) 妙本寺本「日本図」については、黒田2003、坂井法暉2003などを参照のこと。
- (13) なお、高橋2002は、『漂到琉球国記』などにみられる「琉球」認識が中世建密仏教界の一部に限られ、当時の人々の一般的認識とはいえないと指摘している。
- (14) 本文のように考えることが可能としても、ふたつの「琉球」認識の並存という状態はいつ頃から定着したのかという重要な疑問が依然として残る。しかし残念ながら、この点に関して現時点では不明とせざるを得ない。『隋書』の「琉球」問題論争とも関わり、明確な根拠を提示した論証を行うことは至難である。とりわけ、日本において「琉球」=奄美以南の「南島」という認識がいつ頃定着するのかがさきの疑問を解くカギになると考えるが、これらの問題の解明は現在の筆者の能力を超えている。当該問題については関連分野（古代・中世日本の「南島」史研究など）の専門家より示教を乞いたい。ちなみに、村井章介は、〈浄一穢の同心円〉的世界像に基づいて、「内外の境目は、東の外が浜、西の鬼界島（硫黄島）に代表される帯状のひろがり」としてイメージされる中世日本の領域像形成の起点を9世紀頃におき、さらにこの領域像の形成にともない、従来『南島』として一括されていた琉球弧の列島は「内国化した多祢・掖玖、境界としての喜界島、異域としての琉球に三分されることになった」とみている（村井1990）。
- (15) 明洪武初、行人楊載使日本、帰道琉球、遂招之。其王首先帰附、率子弟来朝。太祖嘉其忠順、賜符即章服及閩人之善操舟者三十六姓、令往来朝貢。

(16) 『明太祖実録』を一瞥すれば、明朝成立直後の周辺地域に対する招諭使節の派遣状況は、洪武元年（高麗・安南）、同2年（日本・占城・爪哇・雲南等）、同3年（吐番・暹羅・三仏齊・渤泥・真臘等）といった具合になっている。

(17) 断片的な史料ではあるものの、同時期の中国側でも、その沿海部から「琉球（＝沖縄）」への人の移動・交流を伝える史料は検出可能である。よく知られたものとして、『明太宗実録』永楽9（1411）年月癸巳の条に、

琉球国中山王思紹、遣使坤宜堪彌等、貢馬及方物。……又言、（長史・程）復饒州人。輔其祖察度四十余年、勤誠不懈。今年八十有一。請命致仕、還其郷。從之。

と記す、元朝末期の1350年代頃に琉球へ渡って中山王察度（在位1350～95）に40数年仕えた江西（元代は江浙行省所属）饒州（福建西北部に隣接した土地）出身の程復の事例がある。研究者によっては、程復の入琉を洪武5年の中山王冊封以後とする見解もあるが（佐久間1975）、本文を文字通りに解釈すれば（入琉の時期を永楽9年の時点から計算しても、洪武5年より早い時期のことになる）、その移住は冊封以前のことになる。引用史料にある通り、元末の中国沿海部と「琉球（＝沖縄）」の間には確かに人的交流が存在していたと考えられる。

なお、元代の中琉通商を示す史料として、康熙『重修崇明県志』巻14、逸事志の記述（「朱清・張瑄、元初自崇徙太倉、以海運開市舶司、通日本・琉球諸島、商貨駢集、遂成東南大都會、号大国馬頭。」）が、おもに日本中世史家によってしばしば引用される。しかし、その「琉球」に関する記載が後代の「増補」に係り、当時の状況を記した証拠と見做せないことについては、榎本渉によってすでに詳述されているところである（榎本2007、202～04頁）。

(18) 同様な表現のみられる史料はほかにも存在する。たとえば、「航海侯」張赫の事跡を綴った、『明太祖実録』洪武23（1390）年8月甲子の条には、

航海侯張赫卒。赫、鳳陽臨淮石亭村人。……（洪武）六年、率舟師巡海上、遇倭寇、追及于琉球大洋中、殺戮甚衆、獲其弓刀以還。

とあり、福建都指揮同知であった張赫が洪武6（1373）年に倭寇を追って「琉球大洋中」にまで至り、これを多数「殺戮」したとの武勲を記している。ちなみに、引用史料にある「琉球大洋」について、和田久徳・池谷望子・内田晶子・高瀬恭子2001は、「福建の水軍は備倭を主務とし、その「哨戒の範囲（信地）は沿海部であり、沖縄近海まで倭寇を追撃していったとは考えにくく、「また明清代、江口の外を大洋（あるいは大海）としていた」ことなどから、「小琉球（＝台湾）周辺の外洋」であろうと理解している（77～78頁）。

(19) 『続文献通考』巻235、四裔考・東南夷・琉球

按、琉球在中国之正南偏東、漳・泉・興・福四州界内、澎湖諸島与之相对、亦素不通。……其国有大琉球・小琉球。

(20) なお、一般に元代の著作とされる周致中『異域志』巻上「大琉球国」「小琉球国」の条には、

（大琉球国）在建安之東、去海五百里。其国多山洞、各部落酋長、皆称小王、至生分彼此不和、常入中国貢、王子及陪臣、皆入太学讀書。

（小琉球国）与大琉球国同。其人龕俗、少入中国、風俗与倭夷相似。

といった「大琉球」「小琉球」に関する記述が存在するものの、そこには明らかに明代のものと思われる記述（「常入中国貢、王子及陪臣、皆入太学讀書」）が含まれているため（つまり後人の手による文章の改変・挿入等の可能性がある）、当該史料の存在をもって「大琉球」「小琉球」の名称が元代に存在していた証拠とすることはできない。

(21) もし洪武20年前後に「大・小琉球」の名称が成立したとするなら、そこにはどんな背景が存在していたのか。この点に関しても明確な証拠に基づいて回答を提示することはできない。ただ、強いて推量するなら、ひとつの可能性として倭寇問題との関連が想起される。なぜなら、「大・小琉球」が文献上で確認できるようになる洪武

20年代前後の時期は、ちょうど明朝政権が倭寇掃蕩の事業に本腰を入れ、浙江・福建を中心とする中国東南沿海部・島嶼部において、湯和等による海防体制の整備・強化が進められた時期と重なるからである。この時の海防体制強化は、日本との外交交渉を通じた倭寇沈静化策が暗礁に乗り上げたことがその背景にあったという（黄中青2001、22～23頁）。

湯和の主導による海防体制の強化が着手された洪武20年前後をピークとして、城塞建設や衛所増設、守備兵の調発・増配が東南沿海部で進められると共に、倭寇と海民の結託を予防するため、沿海部に近接した島嶼の無人島化も実施されていく（尹章義1977、鄭克晟1991、黄2001、檀上寛2003・2007）。福建方面の場合、洪武20（1387）年4月に周徳興が中央から派遣され、その指揮のもと城塞建設、海防組織や配備兵員の増強が図られる。また同時に、福建沿海の島嶼部や台湾に最も近接した澎湖島などは、その住民を内地に強制移住することで無人島化された。

加えて、洪武20年前後に本格化する海防強化の過程では、その体制構築のために沿海情報の収集も行われている。たとえば『明太祖実録』洪武20年4月戊子の条には、

命江夏侯周徳興往福建、以福・興・漳・泉四府民戸三丁取一、為縁海衛所戍兵、以防倭寇。其原置軍衛、非要害之所、即移置之。徳興至福建、按籍抽兵、相視要害可為城守之处、具図以進。

とあり、周徳興が福建沿海部の「城守を為すべき」要害に関する地図を作成して中央政府に提出していた。倭寇に対する防衛ラインを島嶼部に設けていく上で、明朝やその武將等が東南沿海部一帯の地理的認識をより明瞭なものとする必要性も当然あったはずである。洪武20年前後、明軍による沿海・島嶼部に対する海防・調査等の活動が大々的に展開されるなか、福建東海域との接触の機会も頻繁になり、当該域に対する認識も自ずと深まっていっただろう。その結果、福建東海に浮かぶ台湾は明の中央政府によって俄然注視されるに至り、従来同一の名称（「琉球」）で括られていた沖縄と台湾を区別するため、「大琉球」・「小琉球」の呼称が生み出された、という可能性も十分に考えられる（あくまで推論に推論を重ねた想定の出ないが）。このような想定に一定の妥当性が認められるなら、「大・小琉球」の成立は、単に「琉球（＝沖縄）」の朝貢といった要因だけでなく、当時の東アジア海域の情勢（とりわけ日明関係の推移）とも密接に関わっていたと捉えられるだろう。

- (22) 清濬「混一疆理図」と李沢民「声教広被図」に関しては、青山1938、海野1967、高橋正1975、宮紀子2006・2007などを参照。
- (23) 龍谷本「混一疆理図」については、小川琢治1928、青山1938、高橋1963、弘中芳男1988、海野1999、杉山正明2000、李燦2005、宮2006・2007、藤井譲治・杉山正明・金田章裕2007などを参照。
- (24) しかし、こうした想定とは異なる見解も存在している。たとえば近年、宮紀子は、清濬「混一疆理図」を「広輪疆理図」と題して載せる、38巻本系の明・葉盛『水東日記』（「初版本の姿をほぼ忠実に伝える」とされる）巻17所収の地図（明人・嚴節の手になる改定版）が「大・小琉球」を描いていることに基づき、原本「混一疆理図」の依拠した清濬「混一疆理図」にも「大・小琉球」の記載がすでに存在したと推測している（宮2007、50頁）。これは「大・小琉球」の呼称成立が元代に遡るとみる見解であろう。確かに『水東日記』所収「広輪疆理図」は、元末の清濬「混一疆理図」の姿をかなり忠実に伝えているようであり、また既述のように、元末には日本と中国とを結ぶ「南島路」が活発化するので、そのような想定も十分に可能だろう。

とはいえ、「広輪疆理図」は後人の手が入った明代（15C中葉）の改訂版であり、「大・小琉球」の部分が明代に増補された情報である可能性もなお排除できない（これは、李沢民「声教広被図」を「最も忠実に」「踏襲している」とされ<海野1967>、かつ「大・小琉球」の記載のある、明・嘉靖間刊の羅洪先『広輿図』所収「東南海夷図」にも同様のことがいえる）。むしろこれまでの考察を踏まえるなら、「大・小琉球」の情報は明代の増補である可能性の方がやはり高いように思われる。「広輪疆理図」とは別の論拠があらたに提示されない限り、元末の段階で「大・小琉球」の呼称が存在したとする宮の見解には俄かに従い難い。今後、現在公開の写真では地

名読解の困難な、中国第一歴史档案館所蔵「大明混一図」（その成立は洪武22〔1389〕年頃である〈汪前進・胡啓松・劉若芳1995〉とも、またこの頃に作成されたものを底図として嘉靖・万暦期以降に成立した〈宮2006〉とも推測されている「声教広被図」系の情報を伝える地図）などの資料が活用可能になれば、あるいは前記の問題にも一定の結論が得られるのかもしれない。

- (25) 明朝成立以前における中琉間の交流の可能性は、本科研の所謂「粗製磁器」に関する考古学分野の研究成果によっても示唆されているところである。

参考文献

- 青山定雄 1938 「元代の地図について」『東方学報 東京』 8
—— 1955 「粟棘庵所蔵の輿地図」『唐宋時代の交通と地誌地図の研究』吉川弘文館、1969年、所収
- 秋岡武次郎 1955 「鎌倉、室町時代の行基式日本図」『日本地図史』河出書房、所収
- 秋山謙蔵 1929 「隋書流求国伝の再吟味」『歴史地理』 54 - 2
- 尹章義 1977 「湯和与明初東南海防」『国立編訳館館刊』 6 - 1
- 海野一隆 1967 「広輿図の資料となった地図類」『大阪大学教養部研究集録 人文・社会科学』 15
—— 1999 『地図に見る日本』大修館書店
- 梅本渉 2007 「元末内乱期の日元交通」（初出2002年）『東アジア海域と日中交流一九～一四世紀一』吉川弘文館、所収
- 汪前進・胡啓松・劉若芳 1995 「絹本彩絵大明混一図研究」曹婉如ほか編『中国古代地図集 明代』文物出版社、所収
- 応地利明 1996 『絵地図の世界像』岩波書店
- 小川琢治 1928 「支那地理図学の発達」『支那歴史地理研究』初集、弘文堂、所収
- 沖縄県史料編集室 2003 『古地図にみる琉球（沖縄県史ビジュアル版12・古琉球1）』沖縄県教育委員会
- 亀井明德 1993 「西南諸島における貿易陶磁器の流通経路」『上智アジア学』 11
—— 1997 「琉球陶磁貿易の構造的な理解」『専修人文論集』 60
- 黒田日出男 2003 『龍の棲む日本』岩波書店
- 黄寛重 1987 「南宋『流求』与『毘舍耶』的新史料」中琉文化経済協会主編『第一屆中琉歴史関係国際学術会議論文集』聯合報文化基金会国学文献館、所収
- 黄彰健 1961 「論皇明祖訓録頒行年代並論明初封建諸王制度」『明清史研究叢稿』台湾商務印書館、1977年、所収
- 黄盛璋 1990 「宋刻輿地図綜考」曹婉如ほか編『中国古代地図集 戦国 - 元』文物出版社、所収
- 黄中青 2001 『明代海防的水寨与遊兵』明史研究小組
- 小葉田淳 1942 「台湾古名随想」『日本經濟史の研究』思文閣出版、1978年、所収
- 坂井法暉 2003 「日蓮の対外認識を伝える新出資料—安房妙本寺本「日本図」とその周辺」『金沢文庫研究』 311
- 佐久間重男 1975 「明代の琉球と中国との関係—交易路を中心として—」『日明関係史の研究』吉川弘文館、1992年、所収
- 下郡剛 1999 「『漂到琉球国記』成立の背景—作者慶政と松尾社—」『立正史学』 86
- 杉山正明 2000 「アフロ・ユーラシア・サイズの歴史像」『世界史を変貌させたモンゴル—時代史のデッサン』角川書店、所収
- 銭仲聯校注 1985 『劍南詩稿校注』全8冊、上海古籍書店出版社
- 曹永和 1963 「台湾的開發与經營」『台湾早期歴史研究』聯経出版事業公司、1979年、所収
—— 1988 「明洪武朝の中琉関係」『中国海洋史論集』聯経出版事業公司、2000年、所収（外間みどり訳「明洪

- 武期の中琉関係』『浦添市立図書館紀要』4、1992年)
- 曹永和ほか 2001 「座談会 東アジア海域のネットワーク」『海のアジア5』岩波書店、所収
- 高橋公明 2002 「文学空間のなかの鬼界ヶ島と琉球」『立教大学日本学研究所年報』1
- 高橋正 1963 「東漸せる中世イスラーム世界図—主として混一疆理歴代国都之図について—」『龍谷大学論集』374
 ——— 1975 「元代地図の—系譜—主として李沢民図系地図について—」『待兼山論叢』9
- 田中聡 1999 「古代の南方世界」『歴史評論』586
- 檀上寛 2003 「方国珍海上勢力と元末明初の江浙沿海地域社会」京都女子大学東洋史研究室編『東アジア海洋域圏の史的 연구』京都女子大学、所収
 ——— 2007 「『国初寸板不許下海』考」『山根幸夫教授追悼記念論叢 明代中国の歴史的位相 下巻』汲古書院、所収
- 鄭克晟 1991 「明朝初年の福建沿海及海防」『史学月刊』1991-1
- 鄭錫煌 1990 「関于『仏祖統記』中三幅地図芻議」曹婉如ほか編『中国古代地図集 戦国—元』文物出版社、所収
- 橋本雄 2005 「肥後地域の国際交流と偽使問題」(初出2002年)『中世日本の国際関係』吉川弘文館、所収
- 弘中芳男 1988 「古代中国における日本の地理像—<研究ノート>「混一疆理歴代国都之図」考—」(初出1983年)『古地図と邪馬台国—地理像論を考へる—』大和書房、所収
- 藤井譲治・杉山正明・金田章裕編 2007 『大地の肖像—絵図・地図が語る世界』京都大学学術出版会
- 藤善真澄訳注 1991 『諸蕃志』関西大学東西学術研究所
- 宮紀子 2006 「『混一疆理歴代国都之図』への道—14世紀大明地方の「知」の行方—」(初出2004年)『モンゴル時代の出版文化』名古屋大学出版会、所収
 ——— 2007 『地図は語る—モンゴル帝国が生んだ世界図』日本経済新聞社
- 村井章介 1990 「古琉球と列島地域社会」『新琉球史—古琉球編—』琉球新報社、所収
 ——— 1997 「中世国家の境界と琉球・蝦夷」村井ほか編『境界の日本史』山川出版社、所収
- 室賀信夫 1956 「魏志倭人伝に描かれた日本の地理像—地図学史的考察—」『古地図抄—日本の地図の歩み—』東海大学出版会、1983年、所収
- 森克己 1951 「日宋交通と地理学的世界観—とくに栗棘庵の輿地図について—」『続々日宋貿易の研究』国書刊行会、1975年、所収
- 森鹿三 1941 「栗棘庵所蔵輿地図解説」『東洋学研究 歴史地理編』同朋舎、1970年、所収
- 山里純一 1999 a 「『隋書』流求伝研究の論点」(初出1993年)『古代日本と南島の交流』吉川弘文館、所収
 ——— 1999 b 「漂到琉球国記について」(初出1998年)同上書、所収
- 李燦 2005 (山田正浩・佐々木史郎・渋谷鎮明訳)『韓国の古地図』(原著1991年刊)汎友社
- 梁嘉彬 1972 「宋諸蕃志流求国毘舍耶国考証—兼考宋前宋後琉球及台湾澎湖諸島—」『大陸雜誌』44-1
- 和田久徳・池谷望子・内田晶子・高瀬恭子訳注 2001 「『明実録』の琉球史料(一)」沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室